佐　　堂

（その２）－Ⅱ・他

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

佐　　堂

（その２）－Ⅱ・他

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

序　文

河内平野の自然環境は古代人にとって、時には、非常に過酷なものであったことが判明している。それでも、この河内平野に生活の場を求めた古代の人々は、その厳し過ぎる程の自然環境にともすれば幾度となく押し流されながらも粘り強く、工夫して生活を、文化を、歴史を守り、拓き、伝えてきたことも事実である。

従って、過去の歴史、文化の継承・発展を担った現代の我々も、たとえ非常に困難な条件のもとで、かつ微細なことであろうとも、せめて記録を残して後世に伝えていかねばならない責務を負っている。

本書は、先に発掘調査した山賀、美園、佐堂遺跡で、諸々の条件のため未調査となっていた橋脚部分等を、道路建設工事と併行して調査を実施した結果の概要報告書である。悪条件のもとでの調査ではあったが、新たに貴重な資料を追加、補足することが出来、所期の目的を達成し得たものと確信する。

当該遺跡の発掘調査にあたっては、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局はじめ調査関係、工事関係各位のご協力、ご援助をいただき深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和60年12月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　吉　房　康　幸

序　文

古大和川によって運ばれた土砂は、縄文時代以降、河内湾と呼ばれた入海に堆積し、“湾”から“潟”へ、“潟”から“湖”へ、“湖”から“池”へ、“池”から“陸”へと、時々に変化の速度に差こそあれ、確実にデルタを形成してきた。

このデルタの形成と、それに伴なう変化の過程が、一方では、そこに生活を営んだ人々に与えた影響も、その時々に応じて、“ヒト”のとまどいと逃亡から、“ムラ”としてのおどろきと順応、さらには、“クニ”としての苦悩と克服へと変化していった。河内平野は、このような歴史を数千年間内に秘めて今日存在している。

河内平野の発達と、そこに住んだ人々の歴史は、我国の稲作農耕と、それを基盤とした文化社会の発展の歴史であり、我国古代史に重要な位置を占める地域の発展の歴史でもある。

近畿自動車道天理～吹田線建設にかかる15遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡、大堀城遺跡の調査を完了し、亀井北遺跡、城山遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和60年５月31日に調査を完了した東大阪市末広町一帯に所在する佐堂遺跡及び、東大阪市友井～八尾市新家町に所在する山賀遺跡並びに八尾市美園町一帯に所在する美園遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

調査に要した費用、期間も膨大ならば、検出した遺構、遺物もまた膨大でありそのすべてを本書に収録できた訳ではないが、河内平野の歴史の理解に一助となるものと確信している。

最後に、大阪文化財センターは、埋蔵文化財の保護、文化財の普及啓発事業を積極的に実施し、その使命を果しながら、着実に発展してきた。これも偏に関係者各位の御理解、御支援の賜物と感謝するとともに、今後とも、より一層の御支援を願ってやまない。

昭和60年12月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加　藤　三之雄

例　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市金岡町・八尾市佐堂町・美園町・新家町に所在する佐堂遺跡、美園遺跡及び山賀遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 佐堂遺跡の発掘調査は既にその1（A地区）、その2（B地区～F地区）に分けて実施されている。今回報告するのは、その2（C～F地区）の第2次調査（切り拡げ部分）及び佐堂その3として実施した、先のその1、その2にかかる3調査区及び美園遺跡と山賀遺跡にかかる追加部分の調査結果である。
3. 調査は大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した。
4. 調査に要した費用佐堂（その2）407,878,000円、美園（その4）59,839,000円はすべて日本道路公団が負担した。
5. 調査は佐堂（その2）橋脚部分が昭和58年4月から昭和59年10月まで、美園（その4）が昭和59年7月から昭和60年5月までの間実施した。
6. 出土遺物の整理作業は発掘調査と並行して行い、全体的な整理作業と本書の作成作業は昭和60年3月から昭和60年5月までの間に行った。
7. 調査及び本書作成は、大阪府教育委員会指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査及び本書作成に関係した者は以下の表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜（60年1月まで、以後理事専任）
	専務理事	住羽地米治（60年3月まで）
	事務局長	畔　謙造（60年3月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（60年4月から）
	事務局次長兼総務課長	大塚恭朗（58年4月まで）
	同	尾田勝之（60年4月まで、以後事務局次長専任）
	総務課長兼庶務係長	阪上允子（60年4月まで主幹兼庶務係長）
		主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	石神　怡（59年3月まで）
	同	泉本知秀（60年4月まで）
	業務課長兼業務第1係長	中西靖人（60年4月まで主幹兼業務第1係長）

	業務課主幹	椋尾孝彦（58年5月まで）
	同	吉村信男（58年5月から）
久宝寺分室	業務第2係長	渡辺昌宏、主査　井藤暁子、技師　片山彰一、森屋直樹、枡本　哲
長田分室	業務第1係	主査　國乗和雄、技師　山口誠治、金光正裕

また、調査に際しては日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾警察署、布施警察署等に格別の配慮を受けた。調査及び遺物整理においては、以下の学生諸氏の協力を得た。

明田千晶、阿部雅彦、植松久明、大島尚人、大政　明、清井邦子、桑原篤史、柴田範子、下村寿邦、西田昭子、三原浩之、吉井裕武、土生　稔

8. ^{14}C 年代測定については、京都産業大学　山田　治氏に依頼した。木製品の樹種鑑定については財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

9. 本書の遺構実測図の方位は国土座標軸の北を示す。

10. 遺構実測図の縮尺は、1/20、1/30、1/50、1/100を基本としたが、遺構の大きさによって縮尺を変えたものもある。

11. 遺物実測図の縮尺は、土器は1/6を基本とし、他は遺物の大きさにより縮尺を変えた。

12. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ　中西靖人　Ⅱ　第1章、第2章第1節～第2節　森屋直樹、第3節　枡本　哲、第4節　森屋直樹、第3章　山田　治、第4章　森屋直樹、Ⅲ　第1章　国乗和雄、第2章　森屋直樹　第3章　枡本　哲、Ⅳ　国乗和雄

13. 調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドも作成した。広く利用されることを希望する。

佐　　堂

（その２）－Ⅱ 他

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

これらの事実を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団は、さらに協議を重ねた結果、基本的には発掘調査の結果を尊重し、設計や工法を検討しながら橋脚位置を決定し、オール高架の道路を建設していくということで合意した。

上記合意に基づき、日本道路公団は、文化庁へ、文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁から、事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮するべき旨の回答を受けた。ここに於いて大阪府教育委員会は、現地に於ける発掘調査について(財)大阪文化財センターに協力を求めることにし、日本道路公団大阪建設局を含めた三者によって昭和51年7月、最南端に所在する長原遺跡の調査について上記の協定に基づいて三者で契約を締結し、現地調査に着手した。その後、長原遺跡の調査は、古墳群の発見や、掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏えて保存策が講じられ、数回にわたって設計変更に伴う契約変更を重ねながら、昭和53年3月に現地に於ける発掘調査を終了し、同年5月概要報告書作成作業を完了して、概要報告書『長原』を刊行した。

この長原遺跡の調査の終了を待って、残る12遺跡の調査について、一応の調査目標を昭和58年度末とする、5ヶ年計画を作成すると共に、長原遺跡での設計変更の繰り返し及び調査面積の拡大、期間の延長、経費の増加等々反省する点が多かったことから、調査方法の再検討も行なった。その結果建設される道路は高架道路であること、沖積平野上の遺跡の特殊性としての埋没深度の深いこと、発掘作業の安全性の確保及び、調査期間や調査費用を考慮して、いわゆる"トレンチ調査方式"を採用することとなった。"トレンチ調査方式"とは、路線の全面発掘調査より、現況保存を優先した必要最小限度の調査を目的として、発掘面積を極力限定すると共に、主要な遺構の存在する部分の保護、保存をも併せて可能とする沖積平野発掘調査の新しい試みであった。

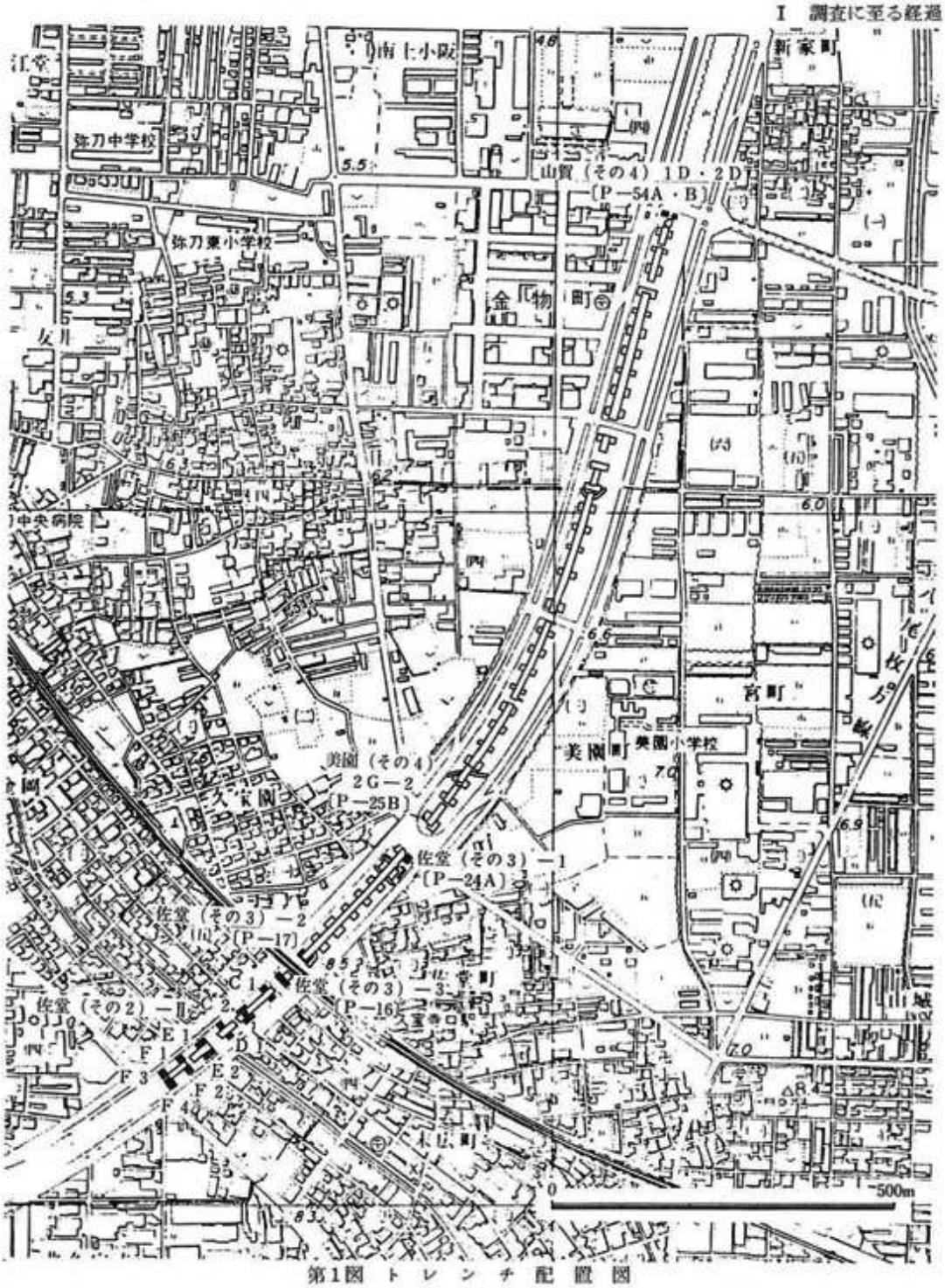
この調査方式をもって、昭和53年2月には瓜生堂遺跡、昭和53年11月には巨摩廃寺遺跡、昭和54年4月には西岩田遺跡、昭和54年7月には新家遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡、そして亀井遺跡と順次道路の供用工程及び他の関連公共施設整備計画に基づいて調査に着手してきた。

すでに10遺跡の発掘調査は無事その目的を果たして終了し『瓜生堂』『巨摩・瓜生堂』等々として概要報告書の刊行をみているところである。

佐堂遺跡は、昭和49年に財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局より委託を受けて実施した第1次発掘調査により、須恵器、土師器、瓦器、和銅開珎等を含む遺物包含層が検出されたことによって確認された古墳時代から鎌倉、室町時代にかけての複合集落遺跡である。

近畿自動車道天理～吹田線の建設に先立つ当該遺跡の発掘調査は、上記の第1次発掘調査の結果を踏まえて中央環状線佐堂交叉点から、長瀬川までの区間、延長400mについて昭和56年3月に調査に着手した。調査は期間、経費の執行、調査担当職員の配置等々の関係から、遺跡を近鉄大阪線で南北に任意に2分し、北側を佐堂遺跡（その1）調査区、南側を佐堂遺跡（その2）調査区として実施した。

佐堂（その1）調査区の調査は、昭和56年3月から昭和59年3月までの間に、巾10mのトレン



第1図　トレンチ配置図

チ部分220m（横断する既設水路部分は巾5m）、近畿道の橋脚部分13ヶ所、及び工業用水管切替部分並びに、横断水路切替部分と横断水道（⌀200）切替部分の調査を実施した。

当該調査区の調査については、頭初、15ヶ所の橋脚予定位置の調査を実施する予定であったが、道路公団の橋脚番号P－24A及びP－17の2ヶ所については、地下埋没物に接近することや、中央環状線横断道路の路肩まで掘削する必要が生じ、本体工事施工時に同時に調査をするの

が安全管理上好ましいとの判断から、後に調査を遅らせた。

一方、佐堂（その2）調査区の調査は、頭初、近鉄大阪線から高瀬川までの間の調査を実施するべく、巾10mのトレンチをBからDまで設定して着手した。このトレンチ部分の調査が進む中で、Dトレンチからは良好な弥生時代前期及び中期の遺物包含層が長瀬川まで検出され、また同時に南側で調査が進行していた久宝寺遺跡北（その1）調査区北端の調査結果ともあいまって、遺跡がさらに南側に延伸することが確実となったため、長瀬川と府道大阪八尾線まで間100mについて調査区を拡大し、おなじく巾10mのトレンチ調査を実施することとなった。

こうして、遺跡範囲が拡大し、調査対象面積が増大したことから、当初から当該調査区を担当していた職員の出向期間内に、トレンチ部及び橋脚予定位置の全べての調査が完了する見込みがなくなったため、トレンチ部分の調査の完了をもって概要報告書を上梓し、橋脚予定位置の調査については担当職員を別途配属して実施することにした。このトレンチ部分の調査概要報告書が既刊の"佐堂（その2）—I"である。

また、当該調査区においては、トレンチ調査の結果による橋脚位置の協議によって、古墳時代前期の住居跡が検出された部分の保存が図られたことから、当初の橋脚予定位置が大きく変更になり、道路公団の橋脚番号P—16については地下埋没物及び横断道路との関係から、本体工事施工時に調査を遅らせた部分がある。

この様に多くの設計変更を含む当該調査区の調査は、その都度、設計変更を繰返しながら昭和59年10月に終了した。

さらに、前述の、本体工事施工時に実施すべく残された橋脚位置の調査は、日本道路公団大阪建設局近畿自動車道天理～吹田線美園高架橋下部工事として昭和59年2月に発注になり、同年6月に土留工矢板の打設が行なわれたことから、この鋼矢板打設工事の工程にあわせて埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

当該発掘調査の対象となる橋脚予定位置は、佐堂遺跡範囲内の前述のP—24A、P—17、P—16以外にも、この美園高架橋下部工工事の工事区域は、山賀遺跡南端から、美園遺跡全域を含み、佐堂遺跡の内近鉄大阪線付近に及ぶ長大なものであり、P—25B（美園遺跡）P—54A・B（山賀遺跡）が未調査で残されていた。これら6ヶ所の橋脚予定位置の調査を一つにまとめて実施することとし、調査の名称を下部工工事名と同一とすることとした。従って調査の名称は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内美園遺跡（その4）発掘調査となったが、内実は3遺跡（佐堂、美園、山賀）の調査であり、中でも佐堂遺跡部分が多くを占めている。この美園遺跡（その4）発掘調査は、昭和59年7月から、昭和60年5月までの間実施したものである。

こうしたことを前提として、前述の佐堂（その2）調査区の橋脚予定位置の調査結果について概要報告を纏めるに際して、美園（その4）にかかる調査結果もあわせて記述する方が、佐堂遺跡の実態を理解する上で好ましかろうと判断した。従って、本概要は、佐堂遺跡（その2）調査区を中心としているが、美園、山賀の橋脚部分が含まれることとなった。

Ⅱ 佐　堂（その2）—Ⅱ

第1章 基 本 層 序

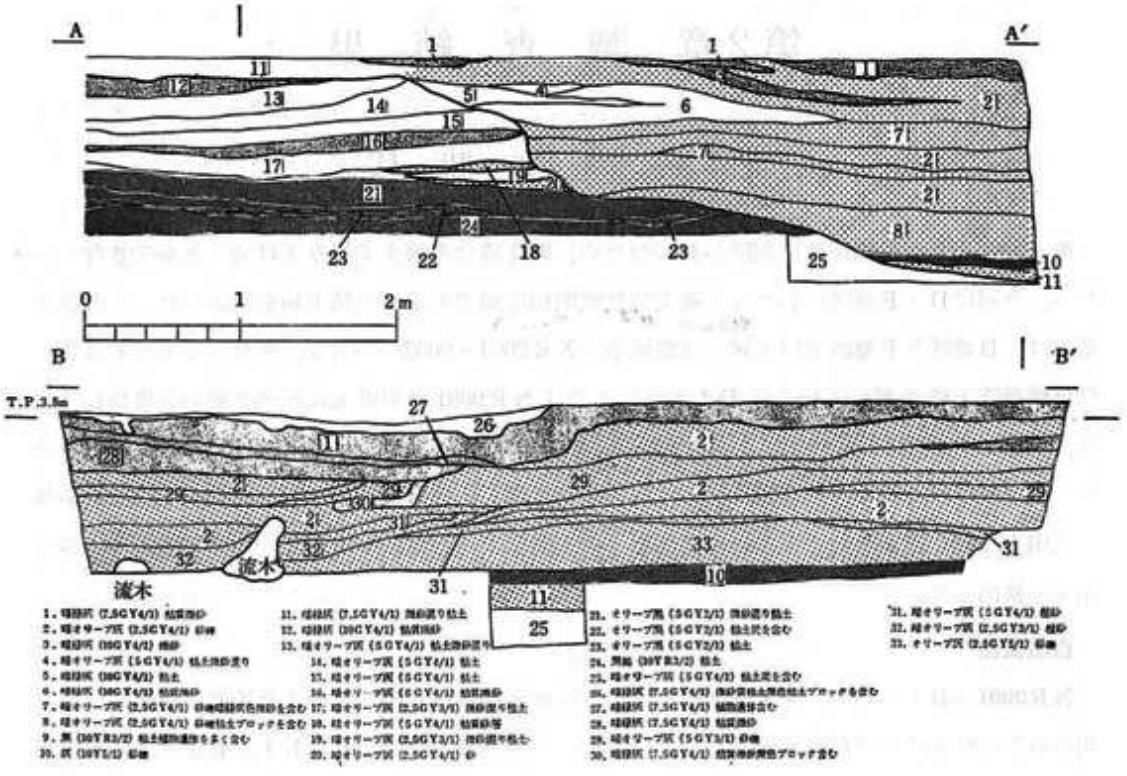
本調査区における基本層序は概に第1次調査の概要報告書（佐堂その2—Ⅰ）が刊行されており、基本的にかわらないものである。本項では第二次調査において、新たに得られた資料に基づき、若干の訂正を行いたい。

第1層—盛土
第2層—黄灰色～灰色礫混り粗砂（中世長瀬川河流による堆積）
第3層—暗緑灰色粘土及び微砂（湿地性自然堆積）
第4層—暗緑灰色粘土（水田耕作土）
第5層—黒色粘質微砂（古墳時代前期遺物包含層）
第6層—暗緑灰色微砂及び粘質微砂（古墳時代前期遺構面）
第7層—黒色粘（土弥生時代中期遺構面・縄文時代最終末期～弥生時代前期包含層）
第8層—暗緑灰色粘土～微砂（縄文晩期最終末期～弥生時代前期遺構面）
第9層—黒色粘土

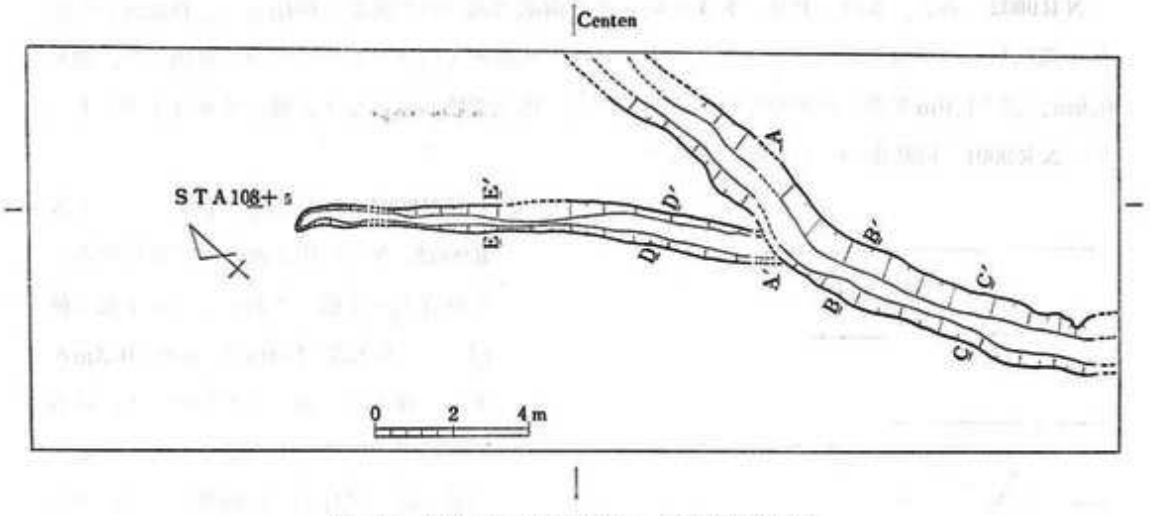
第2層　中世長瀬川の河流によって堆積した粗砂である。粗砂中からは、弥生から中世に至るまでの遺物が出土するが、河床面上で磨滅の少ない最も古い遺物は、10C後半の小皿である。それ以前の遺物はいずれも、かなり磨滅しており、中世長瀬川の存続期間の上限を10世紀後半と考えられる。従って第2層は10世紀後半より18世紀初頭の堆積粗砂層である。

第3層—暗緑灰色粘土及び微砂はC～Dトレンチ北半のみに検出される。間層に砂層を狭み、時折ゆるやかな水の流れのある中で堆積したものであることがうかがえる。又、花粉分析[注1]の結果ではシダ類の繁茂している状況が示されており、湿地性の堆積であることがわかる。D～Fトレンチが長瀬川の本流であったのに対し、Cトレンチ、Dトレンチ北半は氾濫源的要素があったのであろう。

第4層　第4層は3層に分層ができる。各面には薄く粗砂が堆積しており、牛・馬等の足跡、畦畔状遺構が検出される。花粉分析でもイネ科の花粉が優占しており、水田が営まれていた可能性を示唆する。出土遺物により下層は6～7世紀、上層は10C前半まで耕作されていたようである。



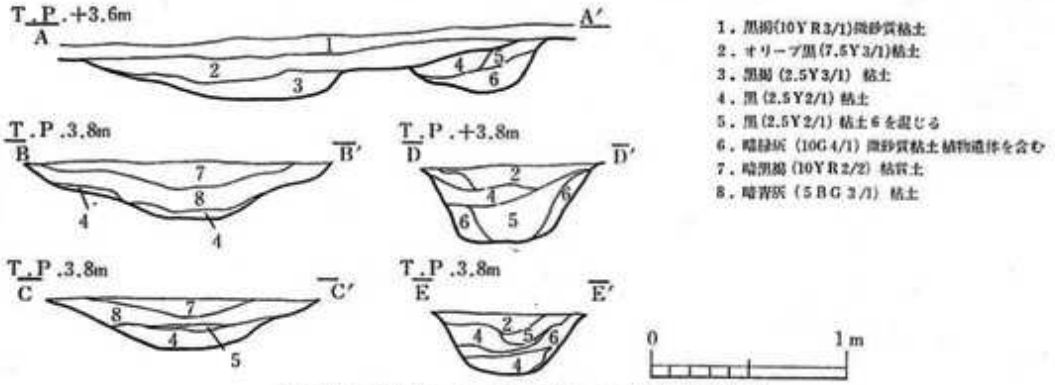
第3図　F3トレンチ自然流路断面



第4図　D1トレンチSD9001、9002遺構平面図

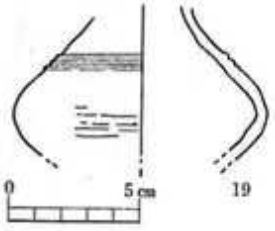
緑灰色微砂質粘土である。遺物の出土はみない。断面観察（第5図）によると、SD9001に先行する溝である。

D1トレンチ縄文晩期包含層出土土器（第6図、第7図）　D1トレンチ黒色微砂質土層中より出土した遺物は縄文晩期後半の突帯文土器と極めて少ないが弥生時代前期の土器がみられる。



第5図　D1トレンチSD9001、9002遺構断面図

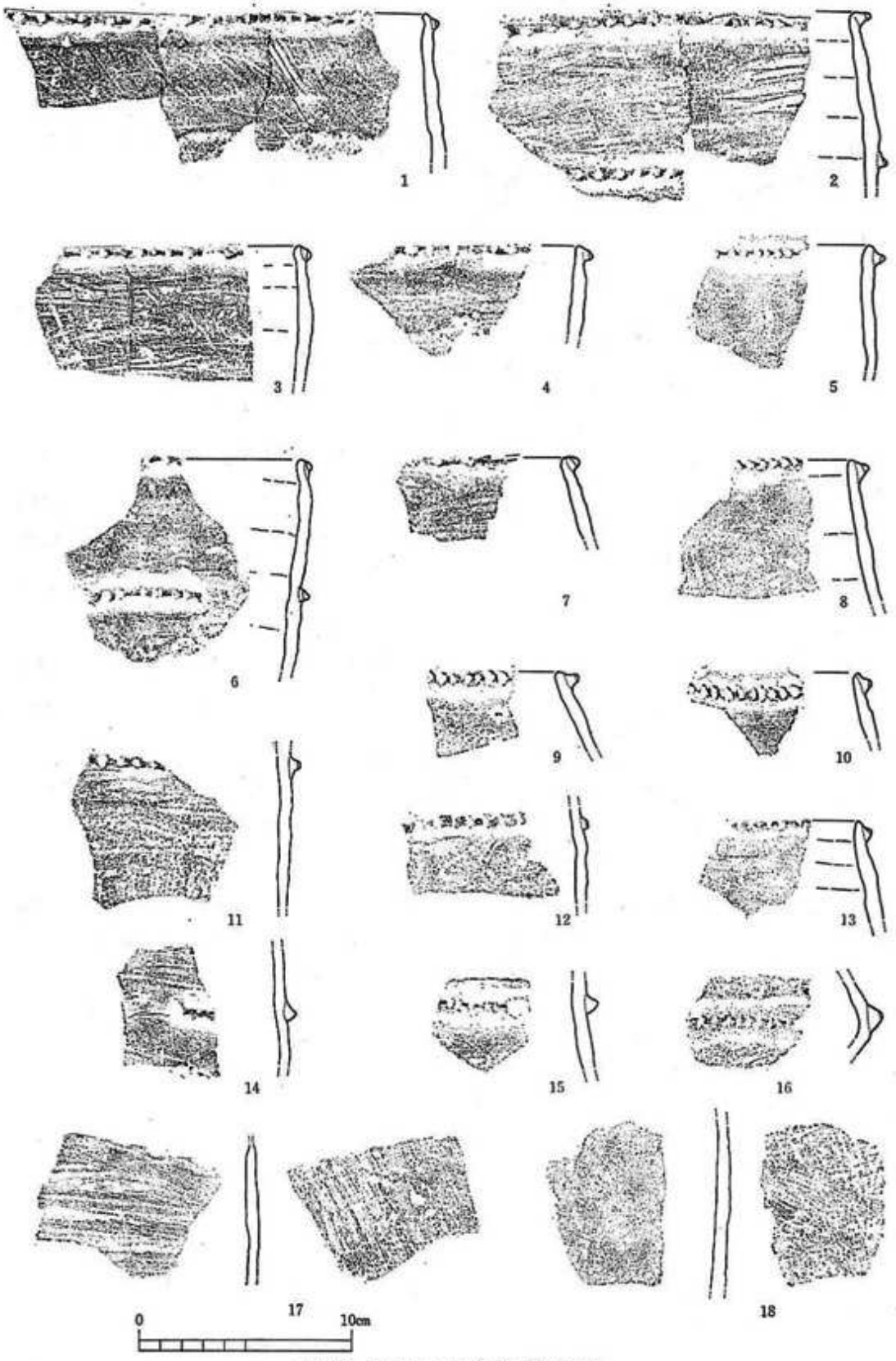
出土した縄文土器は、全て晩期後半の突帯文土器で長原式の範疇に入るものである。形式の明確になるものは全て深鉢で家根氏分類のA2類(注1)に含まれるものである。いずれも小破片のみ出土で、口縁部から底部までの形状が明らかになるものはなく、部分的な観察しかでき得なかった。外面調整は口縁部突帯の間にヨコナデ調整の行われるもの（4～11）、条痕の明確なもの（1～3）があるが、ヨコナデ調整の施こされたものの中にも、条痕が不鮮明ではあるが見うけられるもの（4、6、7）もある。胴部下端はヘラケズリ調整が施こされる（17、18）。



第6図　D1トレンチ黒色粘質微砂包含層出土土器

内面は、口縁部端部～胴部上半にかけて板状工具によるナデを施すもの（1～3、4、6、7）ヨコナデ調整のもの（5～8～11）がある。胴部下半部は精緻なナデ調整を施こすもの（18）荒いヨコ方向の条痕を残すもの（17）がある。

共伴する弥生土器は削り出突帯を有する小形の壺で口縁部、底部が欠損する。胴部最大径9.7cmをはかる。細い頸部から胴部にかけて斜め方向に立ちあがるがやや下がった胴部頂点で「く」の字に屈曲する。胴部下端にヨコ方向のヘラみがきが若干認められる。



第7図　D1トレンチ包含層出土土器

第2節　弥　生　時　代

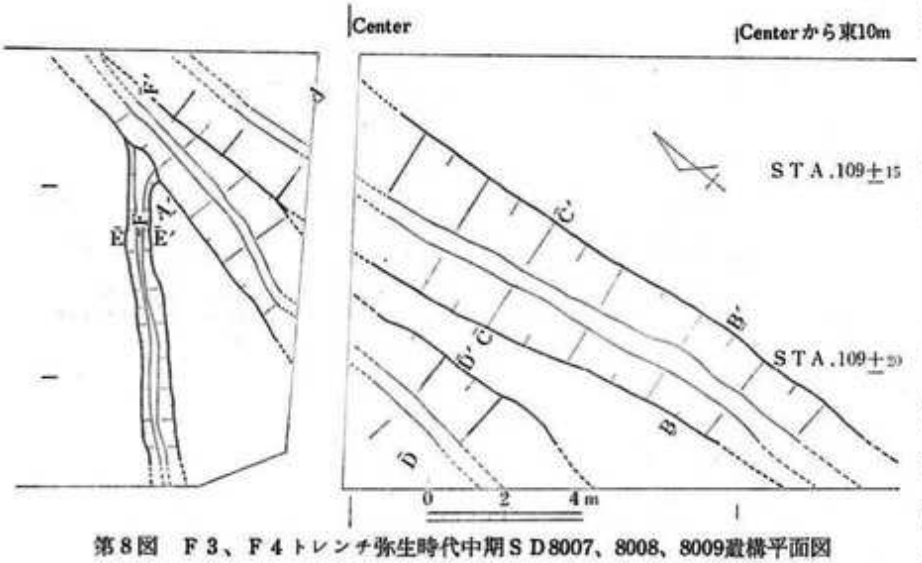
本調査区の弥生時代はＣ地区とＤ地区以南で様相を異にしている。調査区の北半を占めるＣ地区では南北方向の自然流路が交錯し、不安定な状態であるが、Ｄ地区以南では、縄文晩期～弥生前期の包含層である黒色粘土をベースに、中期の遺構が検出された。さらにＤ地区では、長瀬川の削平をうけながらも、かろうじて河床面に後期の遺構を留めている。

Ｃ地区では、Ｃ１トレンチ・Ｃ２トレンチにおいて、４本の自然流路（ＮＲ8001～8004）が検出された。流路内の遺物から時期を判定するのは難しいがＮＲ8003最上層の遺物（第17図）から、その下限を弥生中期末に限定してもよいと思われる。又、Ｅ・Ｆ地区では黒色粘土上面で溝（ＳＤ8001～8004、8007～8009）が検出された。遺物を伴わないため、時期を明確にし得ないが、第１次調査でこの黒色粘土上面よりⅢ様式の水差し一点が出土しており、同様の時期が与えられよう。又Ｄ地区Ｄ１トレンチでは長瀬川河床面上に溝（ＳＤ8010）、土壙（ＳＫ8004）を検出した。ＳＫ8004埋土上層で出土した高杯脚部（第12図）より弥生中期末葉～後期初頭の時期と思われる。Ｃ地区ＮＲ8003埋没と同じような時期であろうか。

ＳＤ8001　Ｅ２トレンチ西隅、黒色粘土上面で検出した。幅0.4m、深さ0.1mの小規模な溝である。埋土はベース土となる黒色粘土よりやや緑がかった黒色粘土で検出が難しい。第一次調査時には下層の暗緑灰色上面で検出したものであるが、今回は黒色粘土面で検出することができた。遺物は出土していない。

ＳＤ8002　Ｅ１トレンチ西隅でＳＤ8001同様黒色粘土上面で検出した。幅0.4m、深さ0.1mを計る。ほぼＳＤ8001と同規模の溝である。埋土は黒色粘土。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ8004　Ｆ２トレンチを東西に横断している溝で、黒色粘土上面で検出された。幅1.3m、深さ0.4～0.5mを計る。第一次調査Ｆトレンチで検出された溝（ＳＤ8004）に続く溝である。溝底はほぼ平坦であるが、Ｆトレンチ西隅でＳＤ8007に流れ込む。



第８図　Ｆ３、Ｆ４トレンチ弥生時代中期ＳＤ8007、8008、8009遺構平面図

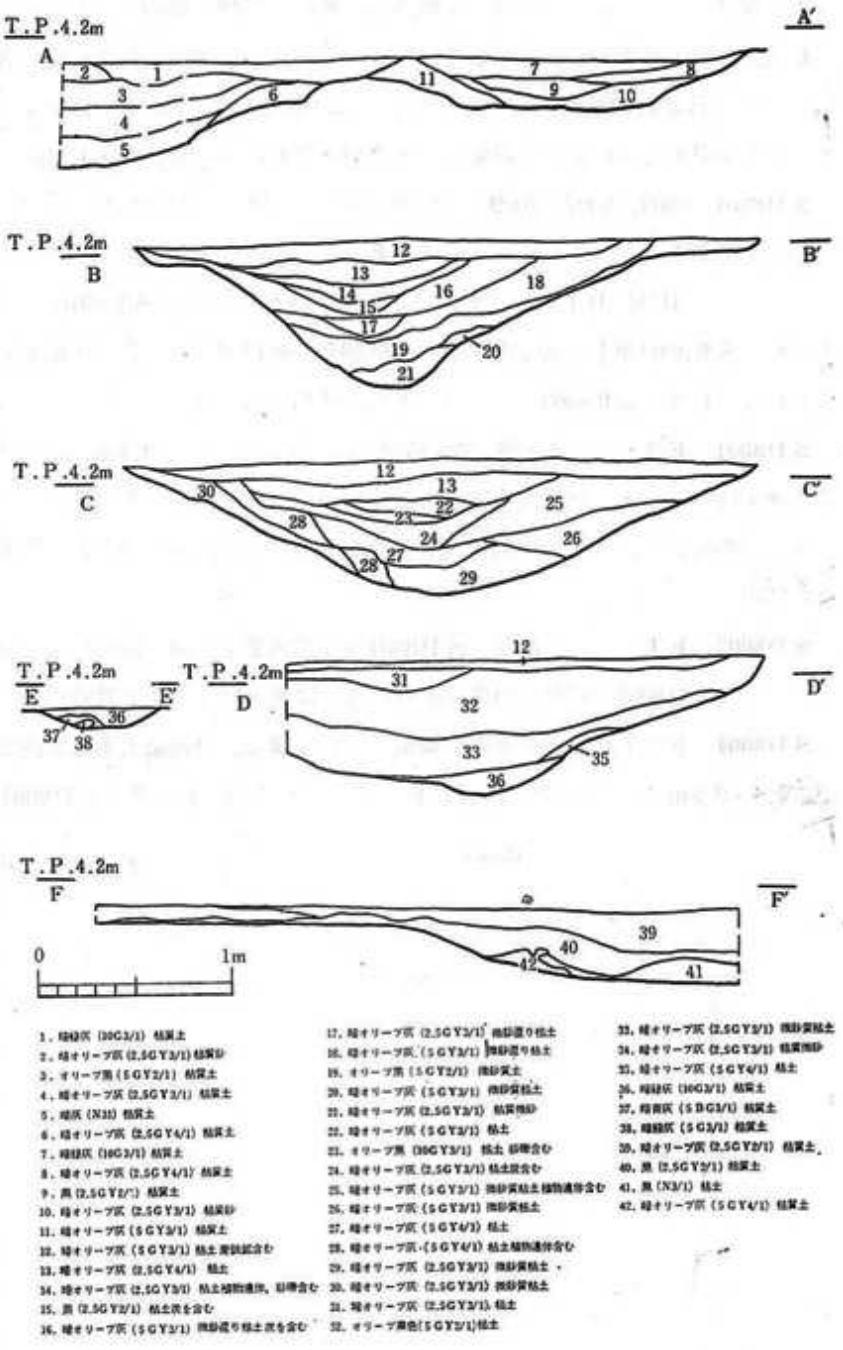
ＳＤ8007　Ｆ４トレンチからＦ３トレンチ東隅にむかって南北にはしる。幅3.6m、深さ0.8mの比較的大き

な溝である。検出面は黒色粘土上面。第１次調査でもＦトレンチ南端で検出されており、ＳＤ8004が注ぎ込んでいる。ＳＤ8004との合流付近では、北から埋っておりＳＤ8004からの流入が考えられる。ＳＤ8008を切っており、ＳＤ8008埋没後に掘削されたものであろう。埋土は上層より暗緑灰色粘質土、オリーブ黒色粘土質、暗オリーブ灰色粘質土、暗灰色粘質土で遺物は含まれなかった。

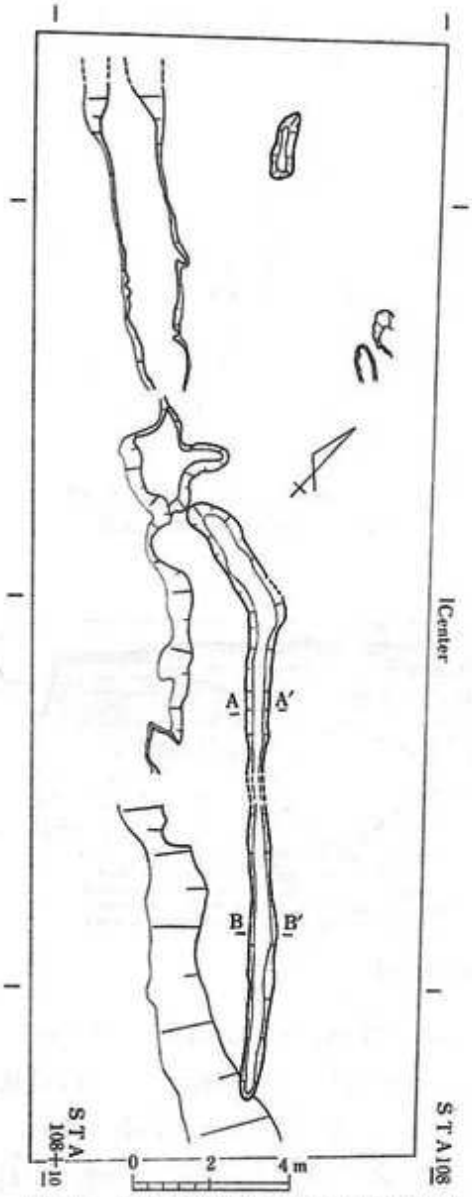
ＳＤ8008　ＳＤ8007の南側にＳＤ8007に切られる形で南北方向の溝を検出した。幅は推定20m前後、深0さ.4～0.5mを測る。埋土はＳＤ8008と同様で上層より暗緑灰色粘質土、暗オリーブ灰色粘質土、黒色粘質土、暗オリーブ灰色粘質土で遺物は含まれなかった。

ＳＤ8009　Ｆ３トレンチ東側で黒色粘土上面で検出された。幅0.6m、深さ0.1mを測る。北端でＳＤ8009に注ぎ込む。埋土は暗緑灰色粘質土と暗青灰色粘質土で遺物は含まれていない。

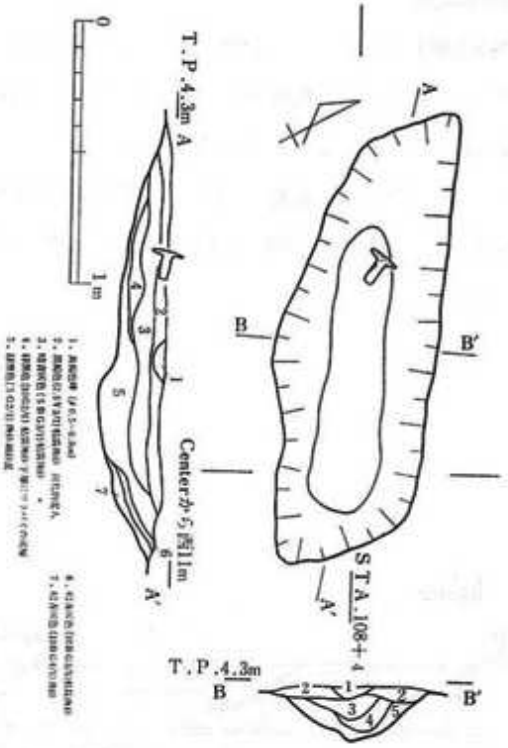
ＳＤ8010　Ｄ１トレンチ中央部で南東～北西の方向にトレンチにそって検出された。幅0.6m～0.8



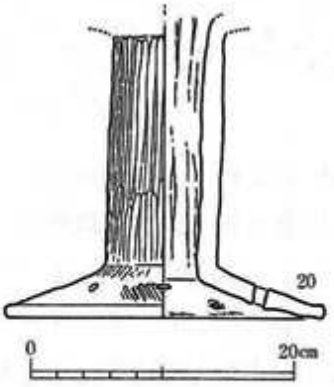
第９図　Ｆ３、Ｆ４トレンチＳＤ8007、8008、8009遺構断面図



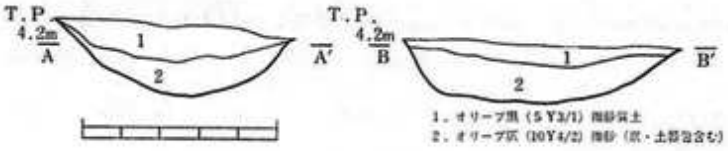
第10図　中世長瀬川河床面及び弥生時代後期
ＳＫ8004、ＳＤ8010遺構平面図



第11図　ＳＫ8004遺構平面図、断面図



第12図　ＳＫ8004出土土器



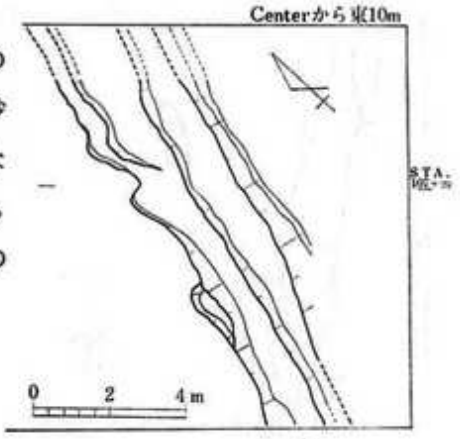
第13図　ＳＤ8010土層断面図

m、深さ0.2mを計る。

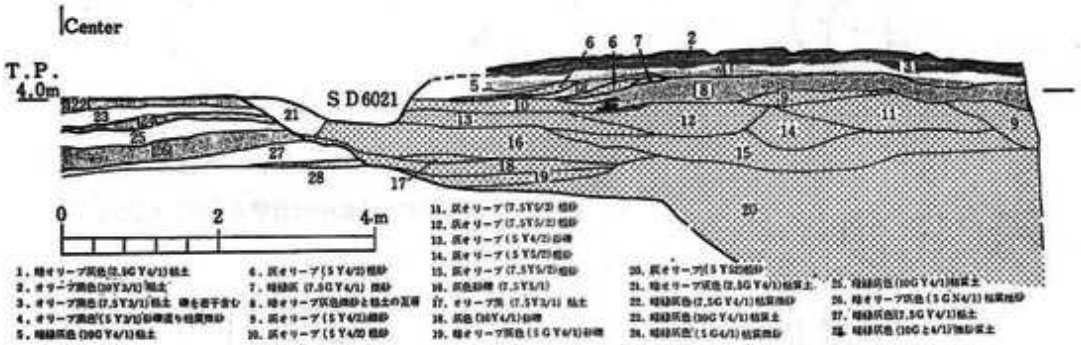
ＳＫ8004　Ｄ１トレンチ北西隅で検出した隅田長方形の舟底形をした土壙である。長辺1.5～1.6m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。高杯の脚部のみ出土している（第12図）。

自然流路

NR8001　C１トレンチ東側で南北方向の自然流路の左岸を検出した。古墳時代前期面の暗オリーブ灰色微砂層を除いて検出した。埋土は全て粗砂礫で遺物を含まない。時期は明確にし得ないが縄文晩期の黒色粘土を削っていることから、弥生時代に限定できるが詳しい時期の判定はし難い。



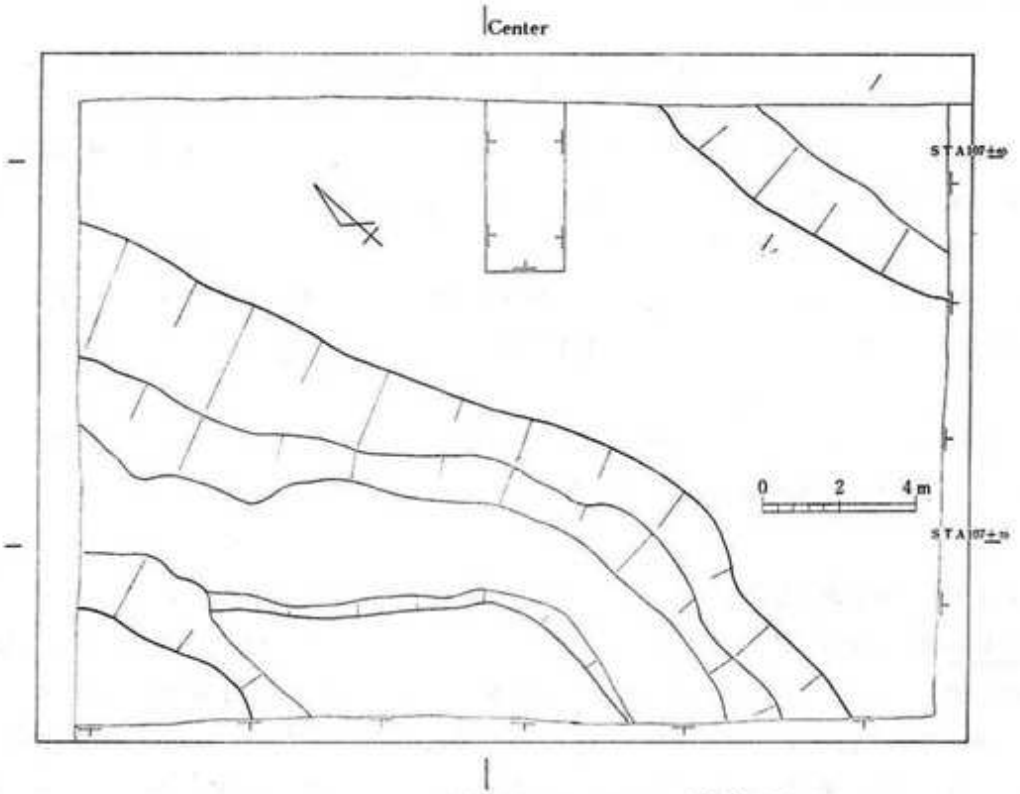
第14図　C１トレンチ自然流路
ＮＲ8001遺構平面図



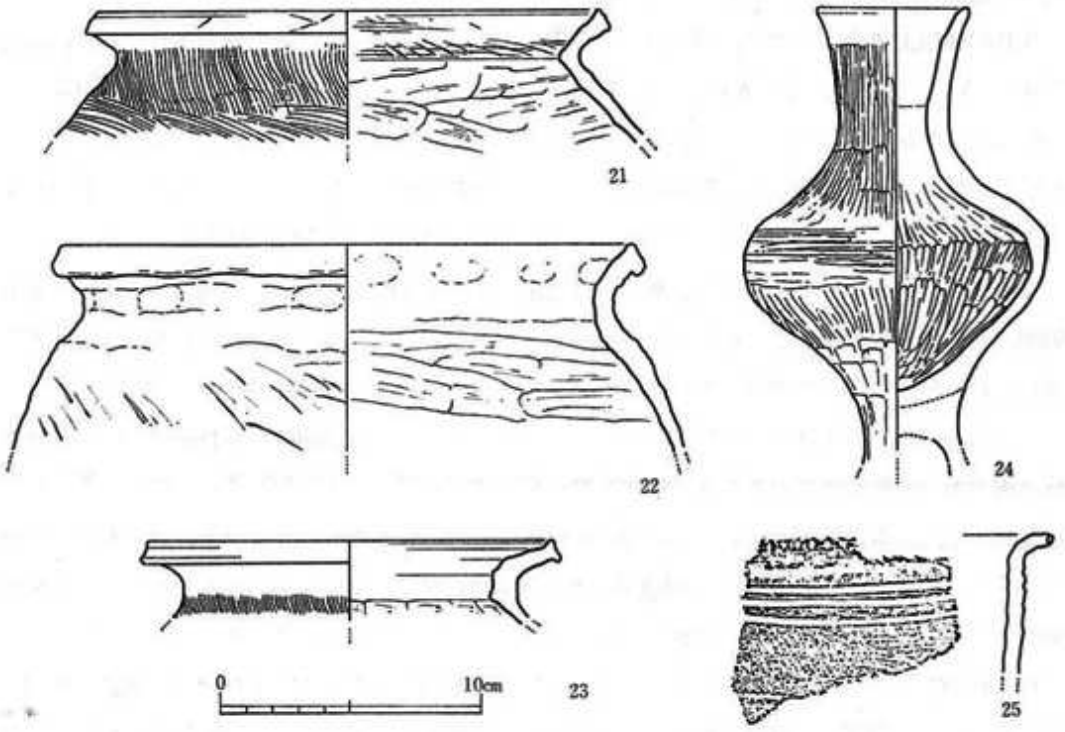
第15図　C１トレンチ自然流路ＮＲ8001断面図

NR8002　C２トレンチで検出された南北方向に流れる、幅10m、深さ1.5m程の流路である古墳時代前期遺構面となる暗緑灰色微砂質土、暗オリーブ灰色粘土の下層で検出した。古墳時代前期面より0.2～0.3m程下層となる。埋土は上層オリーブ灰色、黒色系の微砂。中層灰オリーブ粘質微砂。下層にしたがって灰オリーブ系細砂～緑灰色系砂層となる。上層中層部では弥生中期末～後期初頭の土器（第17図21～24）を包含しており、この流路の最終埋没時期を示唆している。下層では遺物を含まないため流路開始時期は明確ではない。

NR8003　ＮＲ8002下層より別の流路を検出した。同一方向に流れるほぼ同規模の流路でＮＲ8002につらなる流路であろう。埋土は上層が青灰色系粘質微砂～細砂、中層浅黄色砂～青灰色砂、下層緑灰色系砂である。中層青灰色砂層中より弥生時代前期に属する甕（第17図25）の出土をみたが磨滅しており、流路の時期判定は難かしい。



第16図　Ｃ２トレンチ自然流路ＮＲ8002、8003遺構平面図



第17図　自然流路ＮＲ8002、8003出土土器

第3節　古　墳　時　代

古墳時代前期の遺構検出面は先の調査（『佐堂』（その２）－Ⅰ）と等しくＴ.Ｐ.4.0～4.3mを測る。既に発見された遺構に連続するものを除くと、今回の調査で新たに竪穴住居跡１、掘立柱建物跡２を始めとして、溝、土壙その他大小のピットを検出した。これらの遺構の大半が先の調査区のＣトレンチに集中している。遺構面を覆う層厚20～30cmの包含層もこのトレンチを中心に堆積している。Ｅ、Ｆトレンチでは今回Ｅ１と名づけたトレンチの一部に残る包含層からコンテナ４箱分程の布留式土器を採取している。

以下、遺構と遺物を各トレンチ毎に説明する。布留式土器の分類は先の調査報文に整理された基準に従う。また遺構の説明では先の報文を参照、一部引用したことを断っておく。

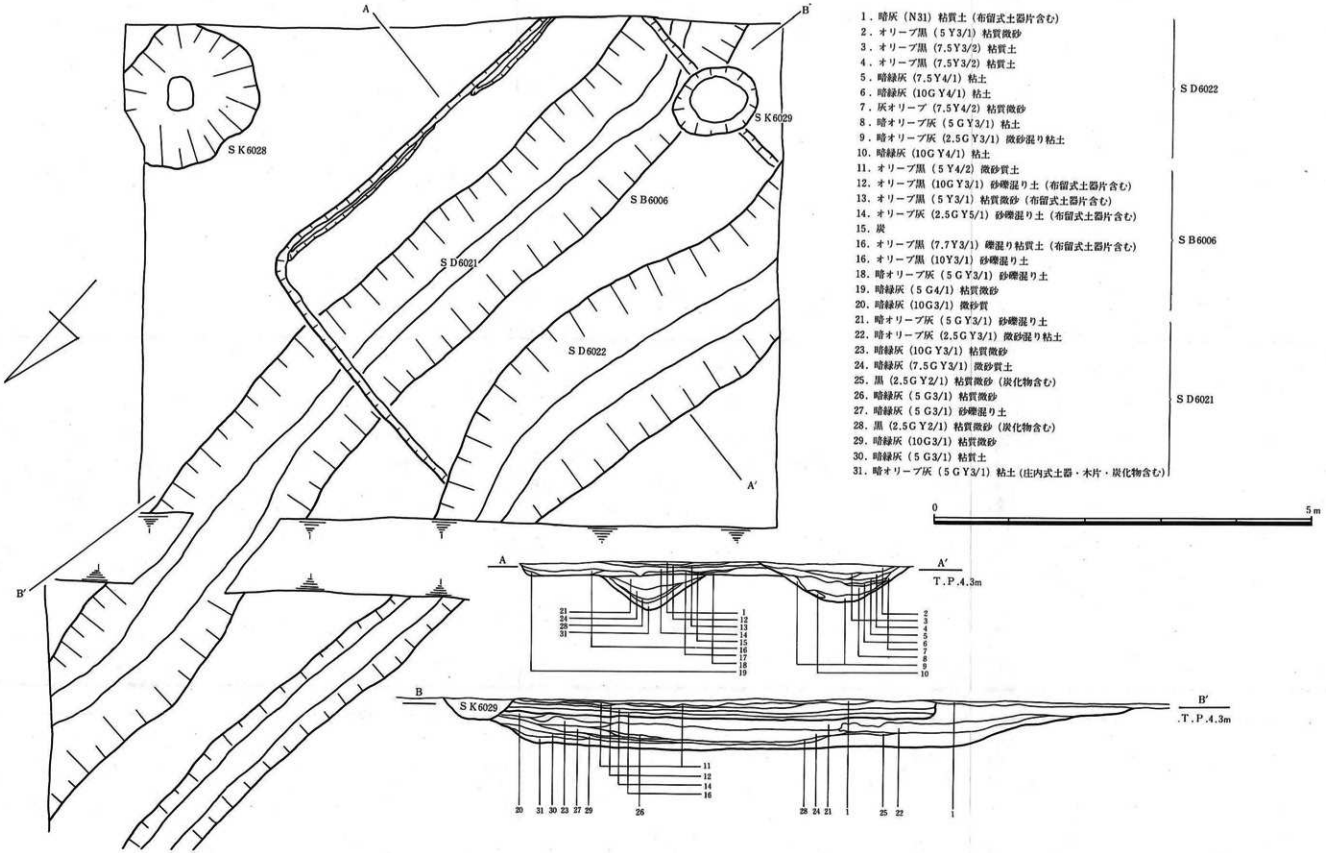
Ｃ１トレンチの遺構と遺物

ＳＢ6006（第18図、図版８）　柱穴は発見されなかったが、竪穴住居跡として報告する。ＳＤ6021の埋没後に掘り込まれている。西壁はＳＤ6002に、南壁の一部はＳＫ6029に切断されている。東南隅は調査区外に及んでいる。平面プランは６ｍ×５ｍと南北に長い。壁高は15～20cmを残し、内側に10～13cm幅の浅い壁溝がめぐる。しかし、明確に追跡できるのは東壁沿いだけである。竪穴内の充満土はレンズ状堆積を示す。床面には貼り床の痕跡は認められなかった。床面直上で布留式甕の細片が数点出土したほかは、大半が上層（11～14層）から出土している。

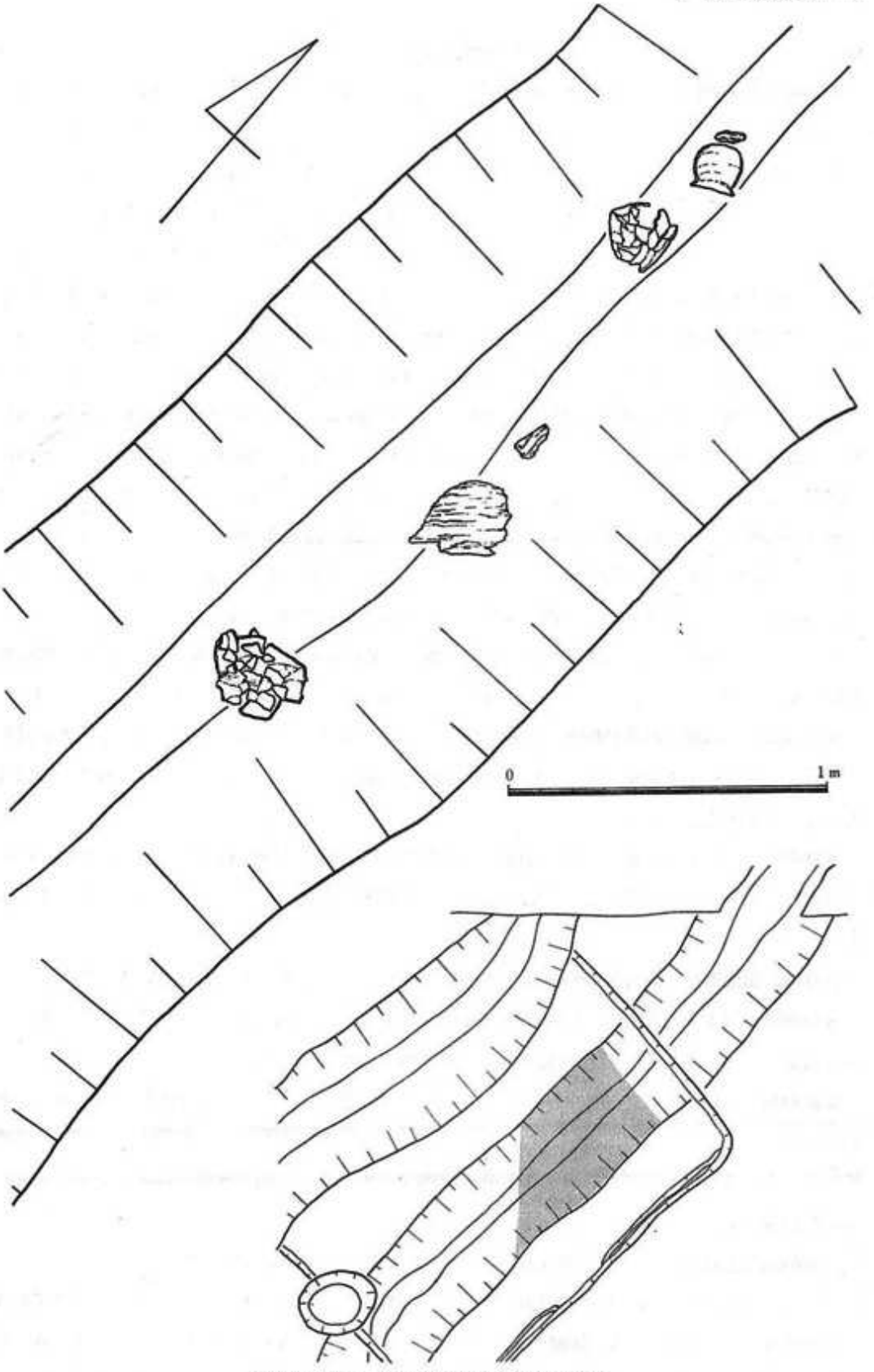
ＳＢ6006出土遺物（第22図、図版21）　布留式土器が出土している。小型丸底Ｂ、Ｄ、高坏坏部A_1、A_2、脚部A_2、器台A_1、甕Ａ、Ｂ、C_3の破片がある。小型丸底Ｂ（４）は、口径が体部を上回り、長く外斜方にのびて細く尖り、端部をまるくおさめる形態である。胎土は精良で、焼成も非常に良い。コンテナ１箱分の破片のうち、甕Ｂが80％を占める。土器以外では砥石が１点出土している（６）。砥面を３面もつ。砂岩製である。14層より出土している。

ＳＤ6021（第18、19図、図版８、９）　幅1.5m、深度0.5～0.6mの南北溝である。南半部でＳＢ6006、ＳＫ6029に切られる。Ｃ１トレンチの遺構の重複関係からみてこの溝は最も古い。充満土下層（28～31層）出土の土器もこのことを証明している。同層では木片、樹皮等も出土している。

先の調査ではこの溝は確認されていない。しかし、報文中「ＳＤ6001とＳＤ6002に囲まれた部分に南北方向の落ち込みがみられ、柱穴と思われる小穴が集中する。落ち込みの深さは５～10cm程度で、主柱穴も確認できないため、竪穴式住居跡の可能性あるもの」という記述がある。この「南北方向の落ち込み」の肩は今回検出したＳＤ6021の西辺にあたり、また「小穴」群はＳＤ6021検出の過程でその上面一帯に認められた小ピットと等しいものであろう。「小穴」群の広がりがＳＤ6021の肩の検出ラインを越えていないことでも明らかである。ＳＤ6021の最終堆積層が礫を多く含んだ砂質土（21層）で、周辺の微砂質の遺構面とは違って自然の凹凸を生じ易いことが結果的にそのような堆積の特徴を引き起したようである。よって、先の調査の「南北方向の落



第18図　C1トレンチ東南部遺構群



第19図　Ｃ１トレンチＳＤ6021遺物出土状況

ち込み」とそれ以東の「小穴」群をＳＤ6021に変更する。

ＳＤ6021出土遺物（第22図、図版21）　甕形土器が３個体出土している。（26）は、口径13.9㎝、器高24㎝。体部最大径はほぼ中位にある。口縁部は外反し、端部はまるく終わる。底部は平底で、いわゆる円板充填による。粘土接合痕は、底部より上3.5～４㎝、それより上４㎝、さらにその上2.5～３㎝の体部最大径付近に、それぞれ１ケ所、そして頸部付近に２ケ所ある。外面のタタキは１㎝あたり３本、左下がりの傾きをとるが、逆円錐形台部を境に傾きは異なる。内面はナデ調整であるが、接合部はヘラ掻きしている。口縁部は内外面ヨコナデで、頸部付近に指頭圧痕を認める。器壁は0.5～0.6㎝と厚い。淡褐色で、１～３㎜の砂粒を多く含む。（27）、（28）は、外面のタタキ、内面のヘラケズリ、口縁部の立ち上がりに特徴をもつ甕である。口縁部の立ち上がりは（26）の方が屈曲やや鋭い。（26）の器高は18.8㎝、体部最大径は20.4㎝、口径は17.9㎝。（27）の器高は残存部分だけで19㎝、最大径は19.6㎝、口径は16.8㎝である。いずれも口径が体部径を下回る。（27）はやや肩が張り、（28）は球形に近く、器高と最大径が等しくなる形態である。器壁も（27）が0.3～0.6㎝と厚手であるが、（28）は0.3～0.4㎝におさまる薄い感じである。内外面の調整は、両者とも外面タタキが１㎝あたり６～７本と細筋である。下半はハケメ、内面はヘラケズリである。器色は褐色で、胎土には砂粒を多く含む。

以上の３個体の土器は、形態・調整からみて、（26）がⅤ様式系甕、（27）、（28）は庄内式甕で概ね新段階にあたると考えられ、どちらかといえば（27）が時期的にさかのぼる要素をもつようである。

ＳＤ6022　先の調査のＳＤ6002に連続する溝である。幅はさらに広くなり、北進して調査区外に至る。南半では幅1.7mと広く、北に向って幅員、深度ともに減少する。２～５層より布留式土器片が数点出土している。

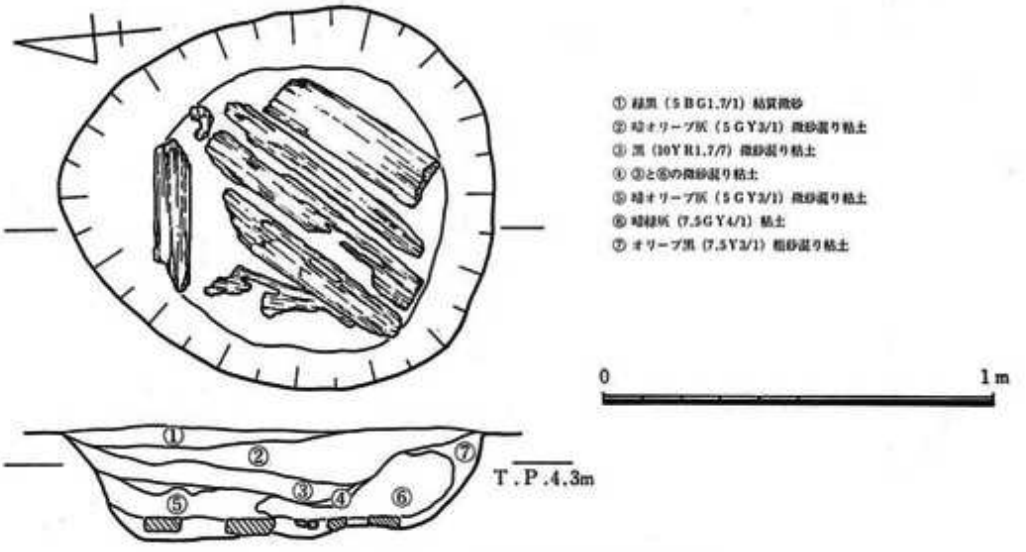
ＳＤ6023　幅0.4～0.6m、深度0.1mの浅い溝である。南北方向に軸をもつ他の遺構に一般的な傾向と違って西に振れている。充満土はオリーブ黒色粘質土だけである。高坏の破片が１点出土した。

ＳＤ6023出土遺物　高坏は布留式土器で脚部片である。縦方向にナデ調整したA_2である。

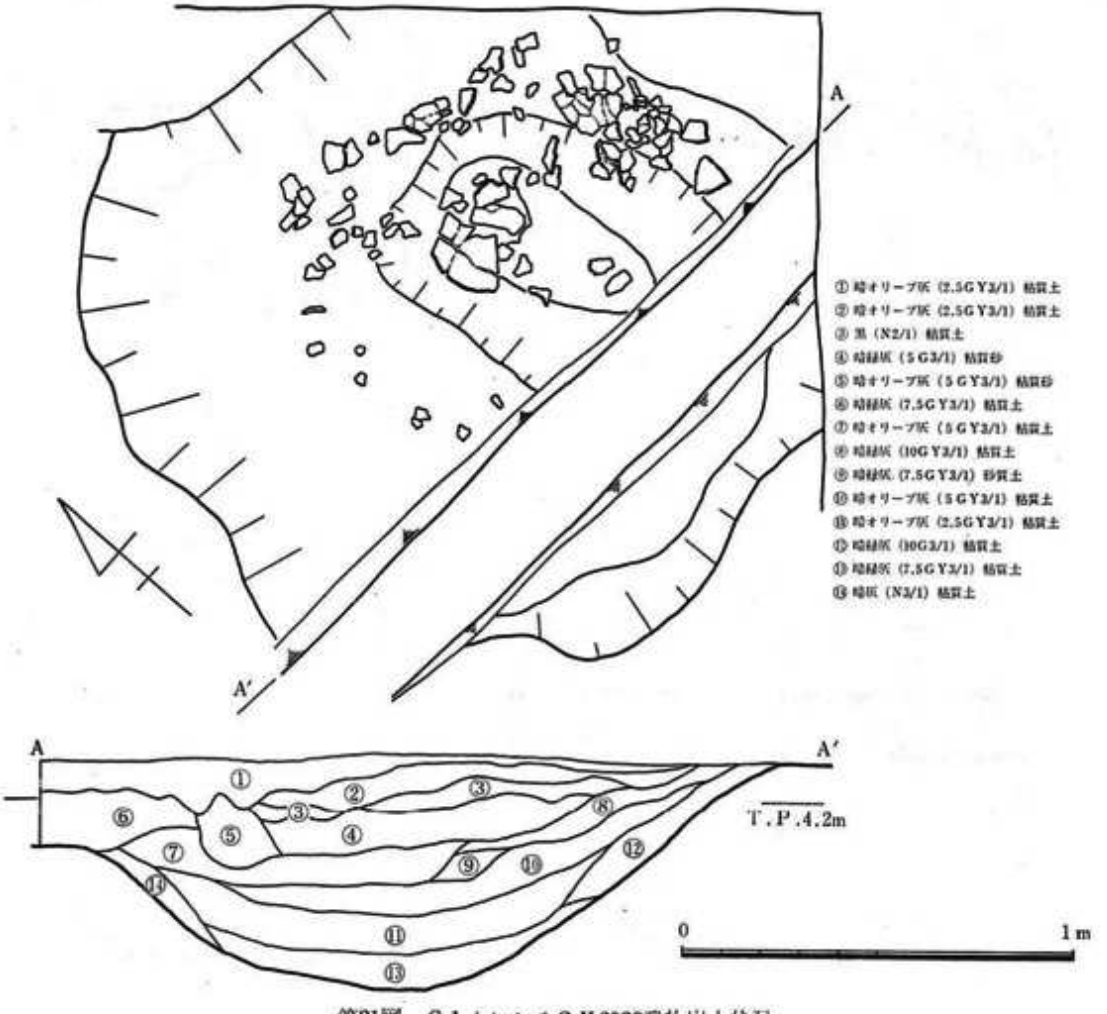
ＳＤ6024　幅１～1.2m、深度0.1～0.2mの浅い溝である。南に向ってやや深くなる。充満土は植物遺体を含むオリーブ黒色粘土である。他に出土物はなかった。

ＳＫ6028（第18、21図、図版８、９）　トレンチ北東端で検出した不整な円形土坑である。東側は調査区外に及ぶ。径は2.5m程度、深度は0.6m。鉢状の断面を示す。充満土はレンズ状に堆積する。１～６層にかけてコンテナ１箱分の土器片が出土した。出土状態からみて東側より流れ込んだ模様である。

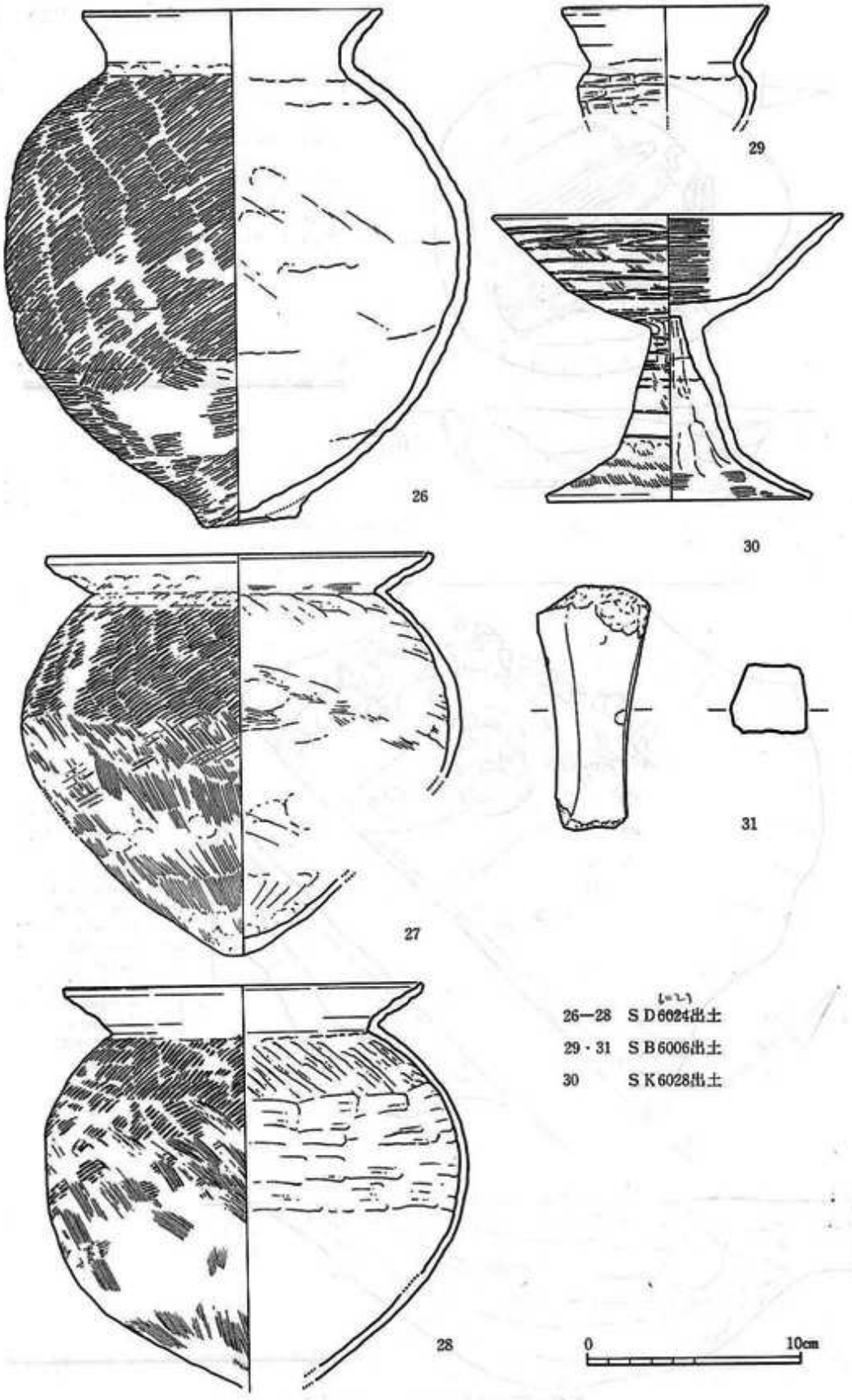
ＳＫ6028出土遺物（第22図、図版21）　全て布留式土器である。破片点数からすると甕が圧倒的である。その大半が口縁端部の内面が肥厚して上端面をなすＢである。その他、小型丸底壺Ａ（体部外面ヘラミガキ）、Ｂ（体部外面ヘラケズリ）、高坏坏部A_2（外面ヨコナデ）、脚部B_2（有孔）、器台A_2（ヘラケズリ）、A_3（ハケメ）などの破片がある。全形に復元できた高坏（30）は



第20図　Ｃ１トレンチＳＫ6029遺物出土状況



第21図　Ｃ１トレンチＳＫ6028遺物出土状況



第22図　Ｃ１トレンチ出土土器、砥石

ていねいなヘラミガキで調整したA_1＋A_1である。

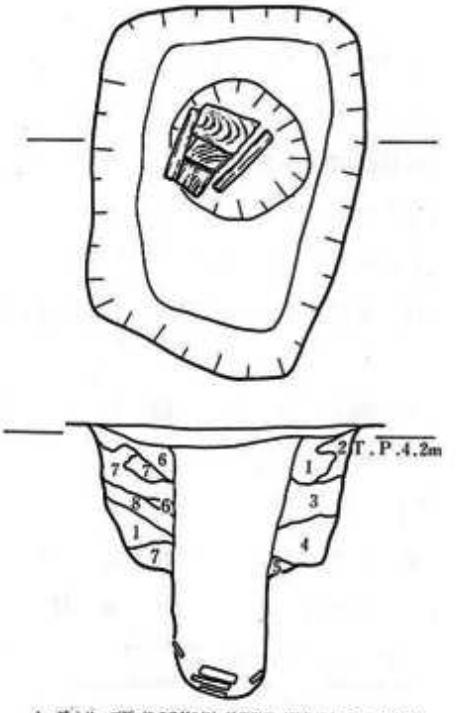
ＳＫ6029（第18、20図、図版９）　ＳＢ6006の南辺を切断して掘り込まれている。１ｍ×1.1ｍの長円形土坑である。深度は25～30cmで坑底は平坦である。充満土は最上層の炭を含む微砂（１層）を除き、以下は全て粘土を主体とする。特に６層は非常に精良な粘土である。この粘土を取り去ると、幅７～14cm、長さ40～60cm、厚さ３～4cmの板５枚とその破片が出土した。出土状態からみて、板材を坑底の径に合わせて切断し、敷き詰めたような印象を受ける。上に述べた粘土がこの板の上に位置する点は注意されよう。板以外に、１～２層から土器片が数点出土している。

ＳＫ6029出土遺物　土器は全て布留式土器の破片である。二重口縁をもつ壺Ａ、ヘラナデ調整の高坏脚部A_2、端部が上方に突出して外に面をもつ甕Ａの口縁部などである。なお、板材は幅2.5～３cm、長さ10～11cmの枘穴をもつものがある。建築材などの再利用が考えられる。

Ｃ２トレンチの遺構と遺物

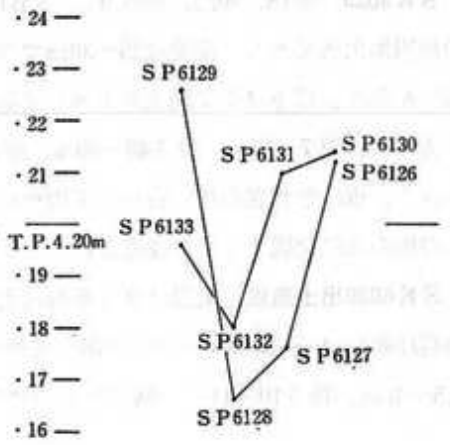
ＳＢ6007（第24図、図版10～12）　３間(4.8m)×２間(3.8m)の掘立柱建物である。東西棟で棟通りに床束をもつ。南北の振れはN7°E。柱穴掘り方は方形または長方形、辺長60cm前後を基本とする。深度は0.7m前後、標高ではＴ.Ｐ.3.45～3.75mに達する例が多い。柱の地中に埋まる部分の長さの½～⅔まで掘り方を掘削している。その掘り方の底面に、さらに径16～20cmの円形ピットを掘り込む。この深度は柱の地中に埋まる部分の長さの½～⅓にあたる。したがって柱穴全体は基本的に段掘りの形となる。

柱穴内に柱根は残っていない。しかし、礎板の残る例がある。ＳＰ6119では材厚２cm以上の板２板と１cm前後の薄板１枚が重ねてあった。ＳＰ6120では1.6cm厚の板１枚、ＳＰ6125では１cm前後の板２枚が残っていた。ＳＰ6119の場合は礎板に据えた柱とピット壁との間隙を詰めたと思われる長さ20cm、幅３～４cm、厚さ１cmの板が相互に10～15cmの間隔をとって礎板上に横置きにされていた（第23図、図版12）。ＳＰ6125の礎板は重圧によって折れていたが、柱の底面の円孤をくっきりとどめていた。この柱の痕跡から柱の径は13～13.5cmと推定される。その他ＳＰ6122、6123、6124でも礎板らしき板が検出されているが、いずれも柱抜き取り後の埋土に紛れて投棄された出土状態であった。



第23図　Ｃ２トレンチＳＰ6119（ＳＢ6007）礎板出土状況

床束は2回据え替えている（ＳＰ6130～6133→ＳＰ6126～6129）。上からの荷重を受けて沈下した床束の窪みの径は、大きいもの（ＳＰ6132）で25cm、小さいもの（ＳＰ6131）で10cmある。沈下の度合いについては底面の絶対高で各ピットを比較する（第1表）。これによると前後2回の据え替えとも東西両端の床束よりも中央の2本の、特に東側の床束（ＳＰ6132、6128）に沈下が激しい。第1回目の据え付けにあたるＳＰ6132の径が大きいのもこのことと無関係ではないようである。



第1表　ＳＢ6007床束柱沈下深度表

上部構造について予想されるのは高床式建築である。特に、柱穴を掘って柱を据えたとは考えられない床束の使い方やその前後2回にわたる差し替えからみて、高床というよりもむしろ揚げ床というほうが妥当かも知れない。また、この遺構そのものから、この建物が住居、倉庫あるいはそれ以外のもののいずれであるかとする決定的な根拠はない。1間×1間程度の小規模なもの、あるいはそれ以上の建物で総柱をもつものが倉庫だというならば、倉庫の可能性は薄い。

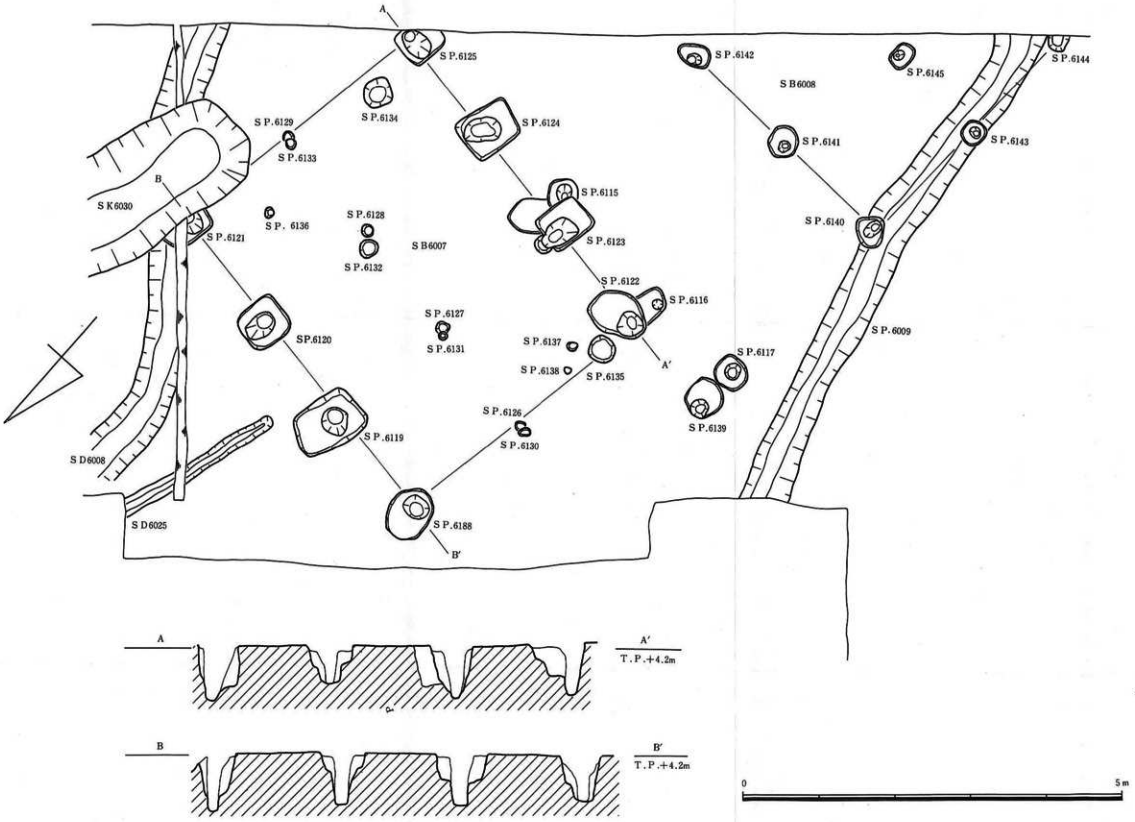
ＳＢ6007出土遺物　柱抜き取り後の埋土中より土師器片が数点出土した。いずれも細片のため器種等は不明である。土器以外では上記の礎板その他の木片が出土している。礎板については既述したので、木片について形状・寸法を示し、用途を考える材料としたい（第2表）。礎板他の木片の配置状況が良く観察できるＳＰ6119の事例と比較してみるとこれらの木片の特徴は以下のようになる。

A　幅7～10cm、長さ13～22cm、厚さ2cm以上あるが、中には厚さが1～2cmまでのものも含めた板材。これらは柱穴の径におさまり、柱の径（ＳＰ6125礎板に残る痕跡より推定）を極端に下回らない。

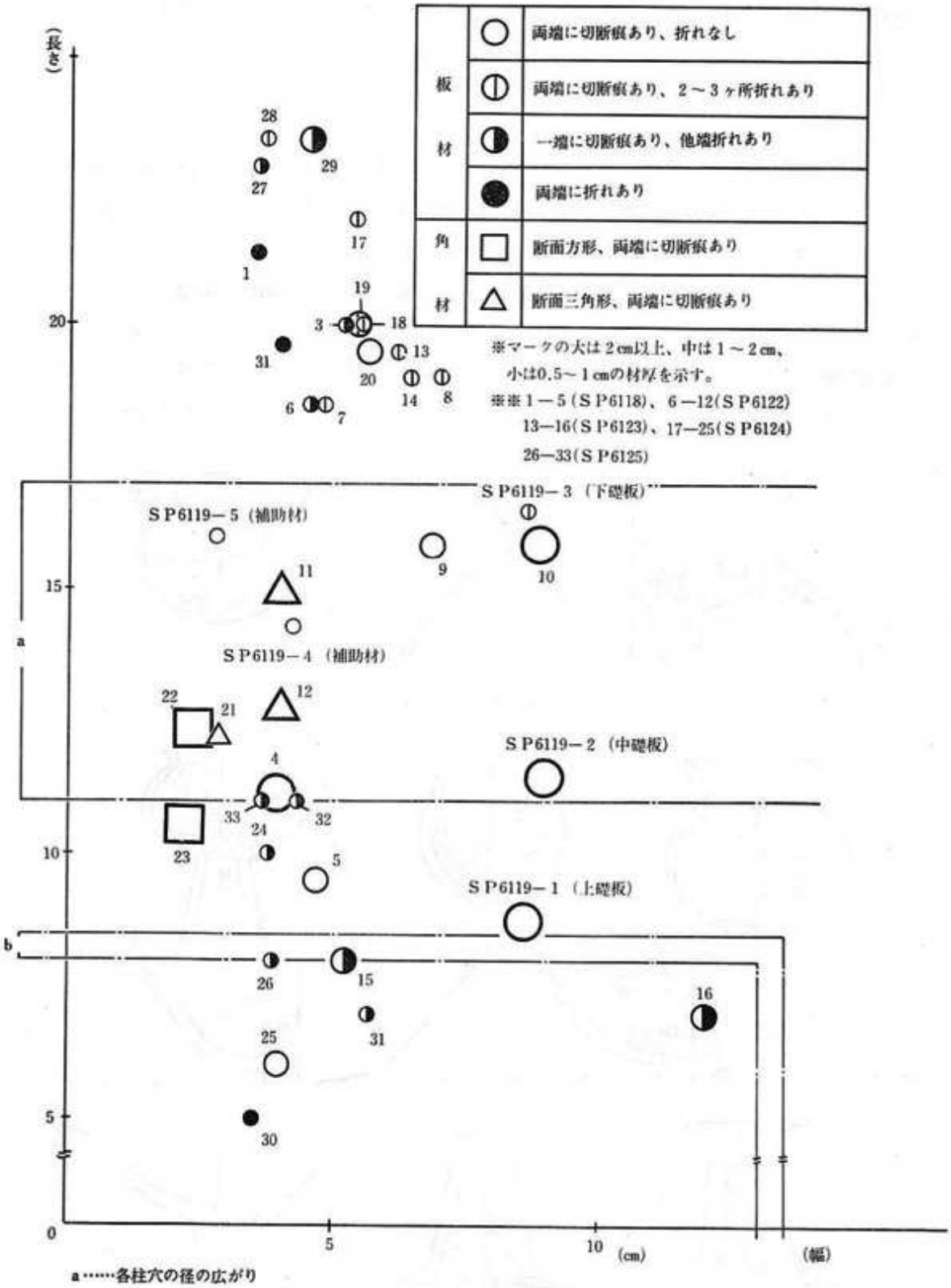
B　幅3～7cm、長さ10～21cmにわたる板材と角材。板材は厚さ1～2cmの主である。角材は全て、板材はその一部（4、5、21）に材の両端に切断痕をもつ。一端に切断痕をもつものも多い（15、24、26、31、32、33）。特に、両端に切断痕をもつものは必要な材の長さを求めたことが明らかである。

C　幅3～7cm、長さ23～29cmの板材。厚さは1cm前後が多い。両端に切断痕をもつ例が1点（20）ある。残存状態では、接合して両端に切断痕をもつもの（6～8、13、14、17～19、28）、一端に切断痕を残すもの（3、27、29）がみられる。いずれも、この種の材は柱穴の径をかなり上回っている。

以上の3つのグループの材のうち、AはＳＰ6119の礎板との比較から礎板そのものとみられる。Bの切断痕を両端に残し、しかも折れのない角材や板材は、ＳＰ6119の礎板以外の材（ＳＰ



第24図　C２トレンチ東南部遺構群



a……各柱穴の径の広がり

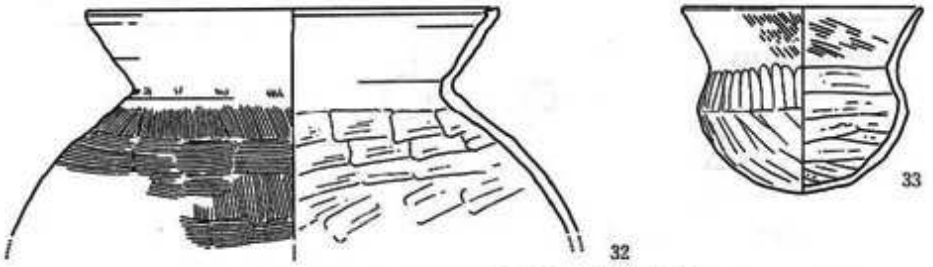
b……SP6125の礎板に残る柱の推定径

第2表　SB6007出土木片計測値分布表

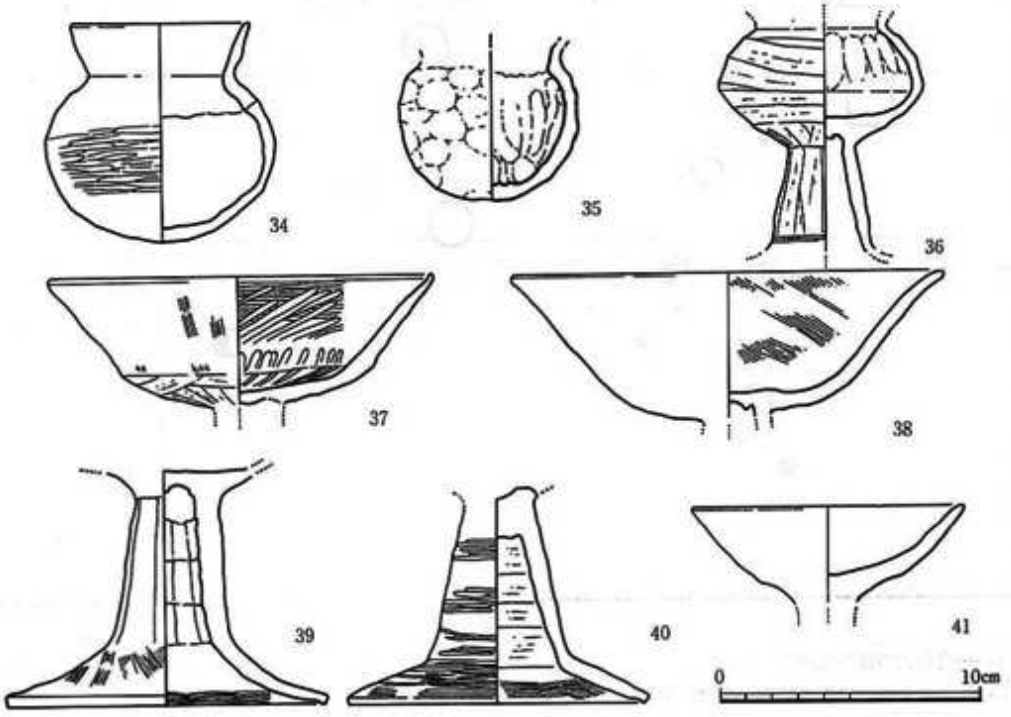
6119—4、5）と同様、柱据え付けに伴う補助材のような用途が考えられる。Cは残存状態にかなりバラツキがある。接合して両端に切断痕のあるものは半折のままだとBの材のうち一方に切断痕をもつものと結果的には同じことになる。折れには土圧や柱抜き取りなど二次的な原因があるかも知れない。しかし、Cのような柱穴径を上回る材はあらかじめ長めに切っておいてピットの大きさや柱の座り具合に応じ適宜折って詰めものとした可能性が考えられる。A、Bはある程度の規格が必要とされる反面、Cは柱の据え付ける時にならないと実際に要する材の大きさはわからない。バラツキもまたそのために生じたのではないか。

礎板の樹種については一部の鑑定にとどめた。SP6120がスギ、SP6122、6123がヒノキである。

SB9008（第24図、図版10）　SB6007の南へ約3m隔て、軸をほぼ揃えて位置する。南東部は調査区外へ及ぶため全体の規模は不明である。判明しているのは北辺と西辺の各2間分であ



第25図　C2トレンチSD6009 1層出土土器



第26図　C2トレンチSD6009 2層出土土器

る。柱間は1.6～1.85mと不揃いである。ピットの径は0.3～0.4m、深度はＳＰ6124がＴ.Ｐ.3.8m、他は全てＴ.Ｐ.４mである。ＳＰ6145が総柱１本かのどうか断言できない。重複関係については、西辺柱列がＳＤ6010を切って掘り込まれている。柱穴内の出土遺物はなかった。

ＳＤ6008（第24図）　幅0.5m前後の浅い溝である。ＳＫ6030、ＳＰ6121に切断されている。この溝は先の調査で西に張り出すことが指摘されていたが、さらにカーブして南端で再び南へ方向を転じている。充満土は暗灰色微砂である。出土遺物はなかった。

ＳＤ6009（第24図、図版10）　この溝も前の調査で検出されたものの連続である。幅0.7～1m、深度は浅いところで0.13～0.15m、深いところで0.25mを測る。充満土は３層である。１、２層ともオリーブ黒色粘土で、１層には炭が多い。２層は灰色微砂で、浅いところでは堆積していない。遺物は１、２層から土器が出土しているが、大半は２層出土品である。

溝の方向はＳＢ6007、ＳＢ6008の建物群の西を南北に限る。この溝を境に西側一帯には遺構が稀薄であり、包含層からも土器類はほとんど出土していない。

ＳＤ6009出土遺物（第25、26図、図版22）　土器は全て布留式土器である。１層出土品には頸部の屈曲が目立たない小型丸底壺（33）がある。体部上半を縦にヘラミガキし、下半をナデている。甕では、口縁端部に上端面をもち、頸部以下をハケメ調整する甕Ｂ（32）がある。２層出土品では、ヘラミガキ調整の小型丸壺Ａ（34）のほか、外面に指頭圧痕をとどめ、内面は縦に強く指でナデて仕上げる手づくね品（35）がある。小型丸底壺Ｂに縦方向のヘラケズリをした脚部の付くもの（36）も出土している。壺にはＡの破片がある。比較的出土量の多い高坏では、坏部A_2（38）、Ｂ（37）、脚部A_1（40）、A_2（39）がある。小型の高坏（41）は内外面ともヨコナデ調整である。

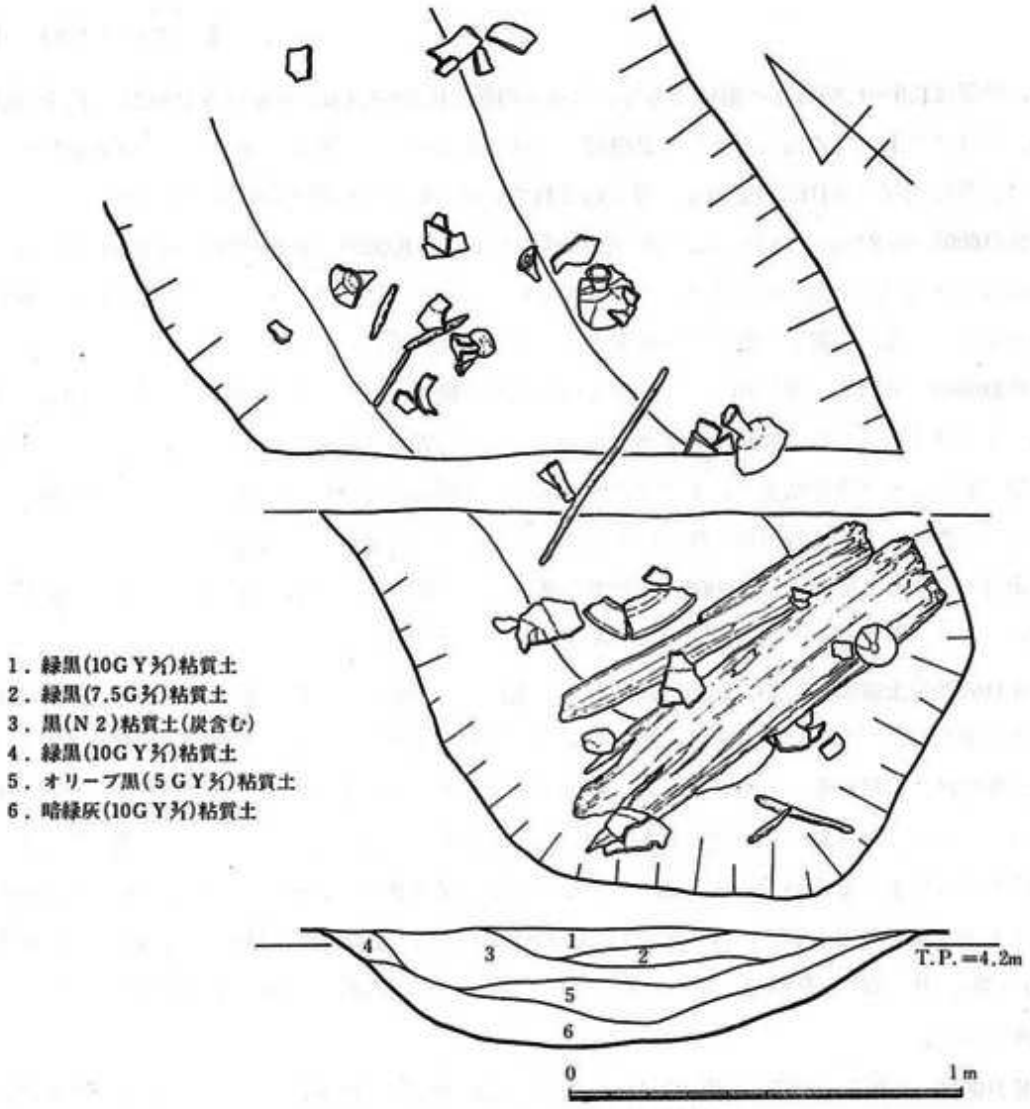
ＳＤ6010　幅0.5～0.65m、深度0.1mと浅い。充満土は暗灰色粘質微砂のみで、出土遺物はない。この溝の方向は、ＳＤ6008の方向に等しく、南北方向でもやや西に振れる傾向を示す。

トレンチ南端で検出された溝も南端は途切れるが、ＳＤ6010と一連の溝となろう。したがって、ＳＤ6010はＳＤ6009、6011に切られる。

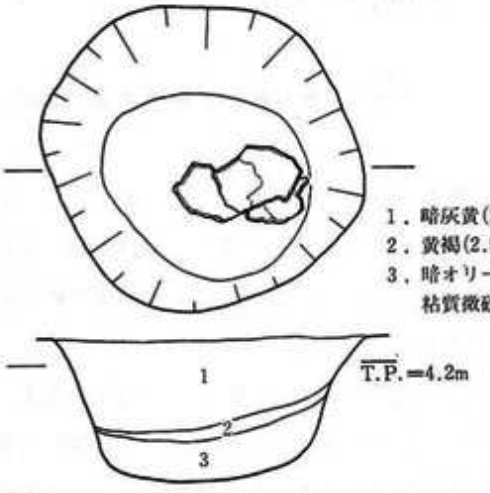
ＳＤ6011　幅0.2mの浅い溝で、ＳＤ6009に平行する。南端ではＳＤ6009に接近する。北側ではＳＤ6009とともにＳＤ6010を切っている。出土遺物はない。

ＳＫ6030（第27図、図版13）　幅1.4～1.5m、深度0.3～0.4m、北に向ってやや深くなる。平面形は長円形で、長軸はほぼ南北方向である。北側は調査区外へ及ぶ。西端でＳＤ6008とＳＢ6007を切る。充満土は６層に分けた。土器は全ての層から出土した。３層では桃核が炭に粉れて数点出土した。板材他の木片が１～３層にわたって出土した。

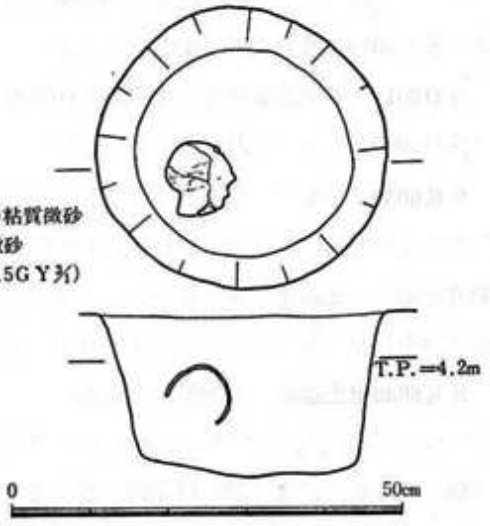
ＳＫ6030出土遺物（第30図、図版23）　土器は全て布留式土器である。器種では高坏の出土が目立つ。小型丸底壺は口縁部径が体部最大径を上回る形態のもので、外面ヘラケズリ調整のＢ（43）がある。壺Ａ（42）は頸部が長く立ちあがる二重口縁の形態をとり、内外面ともハケメ調整である。高坏では、ヘラミガキ調整のA_1＋A_1（44）、ナデ調整のA_2＋A_2（45）がある。前



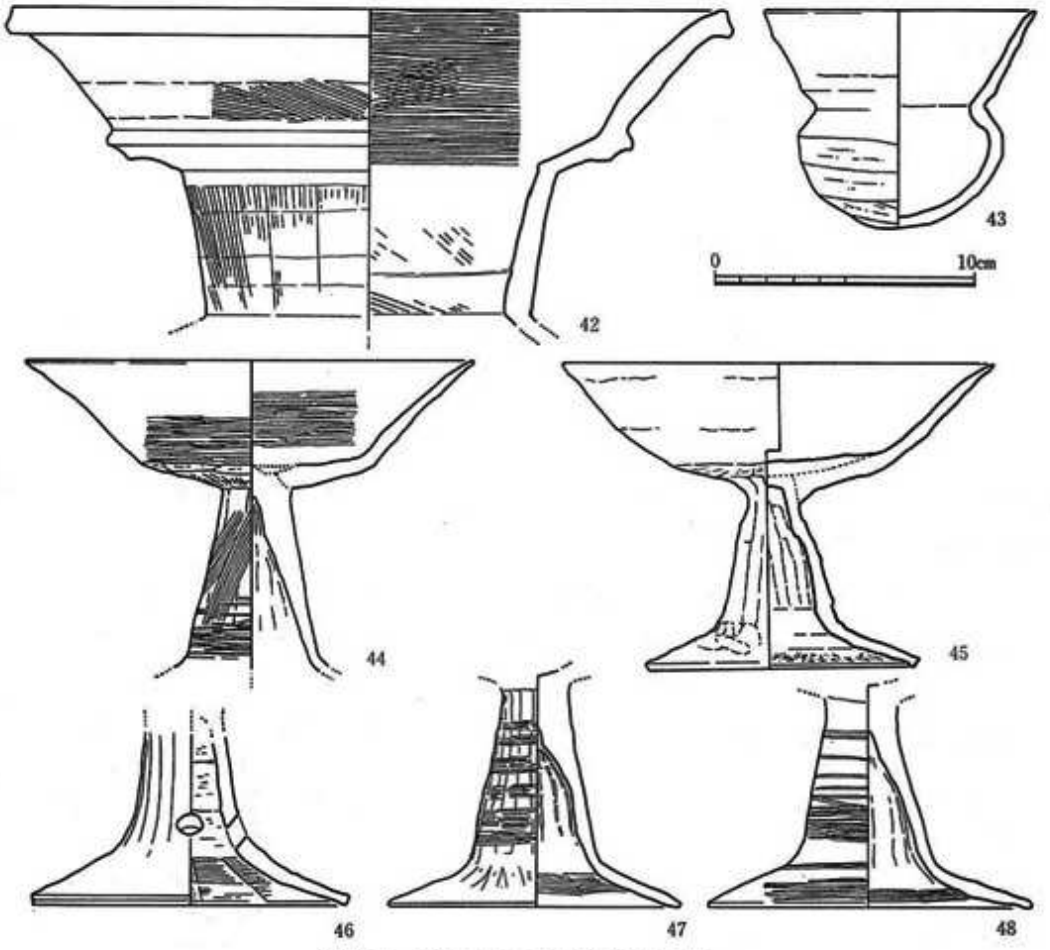
第27図　C2トレンチSK6030遺物出土状況



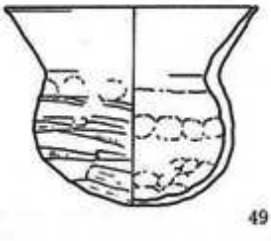
第28図　C2トレンチSP6134遺物出土状況



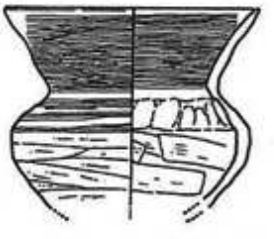
第29図　C2トレンチSP6135遺物出土状況



第30図　Ｃ２トレンチＳＫ6030出土土器



第31図　Ｃ２トレンチＳＰ6134出土土器



第32図　Ｃ２トレンチＳＰ6135出土土器

者の脚部にはハケメ、後者の裾部内面には布目が残る。脚部には有孔のB_2が１点（46）ある。他はヘラミガキで裾部内面がハケメ調整のA_1（47、48）である。

板材は幅25cmと10cmのものがあり、厚みは４～５cmである。長さは前者が110cm、後者が90cmを残す。一端に斧のようなもので切断した痕跡があり、他端は焼け焦げている。

ＳＰ6134（第24、28図、図版13）　径0.4m、深度0.17mの円形ピットである。ＳＢ6007の柱穴ＳＰ6125の北側に掘り込まれている。充満土は３層。最下層から底面より若干浮いた状態で土器片が出土した。

ＳＰ6134出土遺物（第31図、図版23）　小型丸底壺が１点（49）出土した。体部外面へラケズリ調整のＢである。ややゆがみがある。赤色粒を多く含み、焼成はあまい。

ＳＰ6135（第24、29図）　径0.36m、深度0.25mの円形ピットである。ＳＢ6007の柱穴ＳＰ6122の北側に接している。充満土は遺構面を形成する緑灰色微砂を混じえた灰褐色粘土だけである。土器は底面より浮いた状態で出土した。

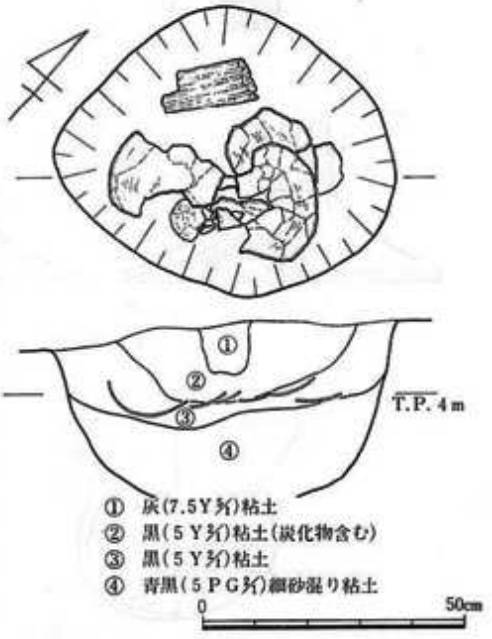
ＳＰ6135出土遺物（第32図、図版23）　小型丸底壺が１点（50）出土した。横方向のヘラミガキは口縁部内外面にわたって密に施され、一部体部外面にも及んでいる。体部外面下半は横方向にヘラケズリしている。小型丸底壺Ａである。

その他の遺構

ＳＰ6115～6117、6139は東西に並ぶ。掘削深度はＴ.Ｐ.4～4.1mである。ＳＰ6115、6116はＳＢ6007のＳＰ6122、6123にそれぞれ切られる。ＳＰ6115～6117がＳＢ6008に関連するかどうかはわからない。ＳＰ6139はＳＢ6007の南辺桁行の延長線上に位置する。梯子掛けの横木を受ける支柱など考えられなくもないが断定はできない。

Ｄ１トレンチの遺構と遺物

先の調査からこのトレンチにかかる部分は中世長瀬川の流跡にあたることが明らかにされている。その河床面は前節でも説明したように弥生時代後期の遺構面に達している。この河床面に至るまでは粗砂の堆積が繰り返されたことを示す堆砂状態が観察できたにとどまり、古墳時代の包含層も遺構も検出はできなかった。ところが、トレンチ北壁沿いに設けた幅１mの土層観察用ベルトの取り外しにかかったところ、Ｔ.Ｐ.4.12mに達して円形の土坑の残骸を発見した。中世長瀬川の右岸の肩の傾斜面が徐々に勾配を減じて河床に至る、その矢板際で辛くも流水に削り残された状況であった。遺構はこの土坑のみである。



第33図　Ｄ１トレンチＳＫ6031遺物出土状況

ＳＫ6031（第33図、図版14）　平面プランは0.65m×0.56mの長円形である。坑底はＴ.Ｐ.3.78mまで掘り込まれ、割合平坦である。充満土は４層を識別した。堆積状況からすると掘り込み面はかなり上位にあったようである。遺物は、坑底面にレンズ状の粘土堆積があったのち、次いで第３層の粘土が流入する過程で混入したものである。土器と共に幅10cm、長さ15～17cmの板切れが出土している。

ＳＫ6031出土遺物（第34図、図版５）　土器は３個体に復元でき、いずれも布留式土器である。小型丸底壺（51）は口縁部の短く外反する形態である。口縁部内面はハケメの後へラミガキ

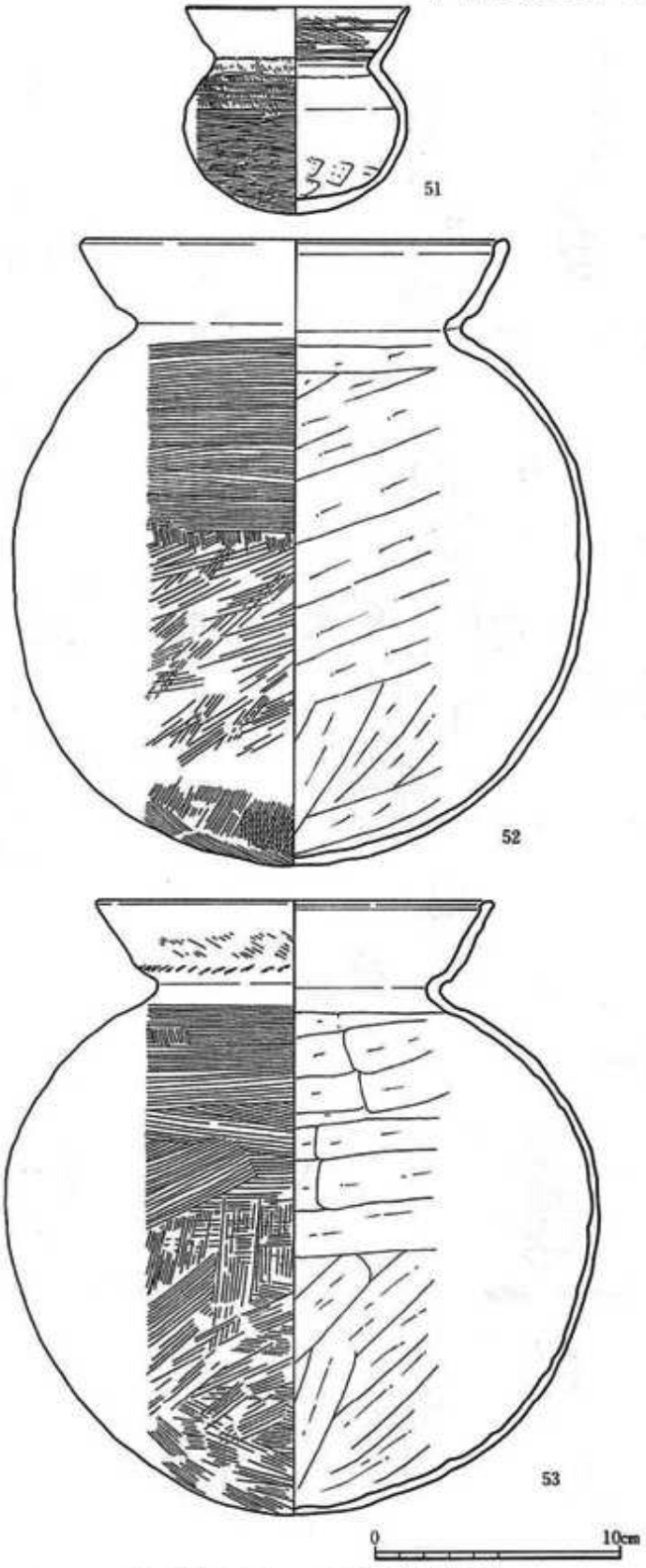
を加え、外面はヨコナデ、体部外面は上半部がハケメの上に粗いヘラミガキ、下半は横方向のヘラミガキを密に重ねる。小型丸底壺Aである。甕2点（52、53）は形態、調整とも同じであり、口縁端部に上端面をもち、球形の体部を特徴とする。頸部以下は縦方向のハケメで、上半部はさらに横方向のハケメを施す。甕Bである。

E・Fトレンチの遺構と遺物

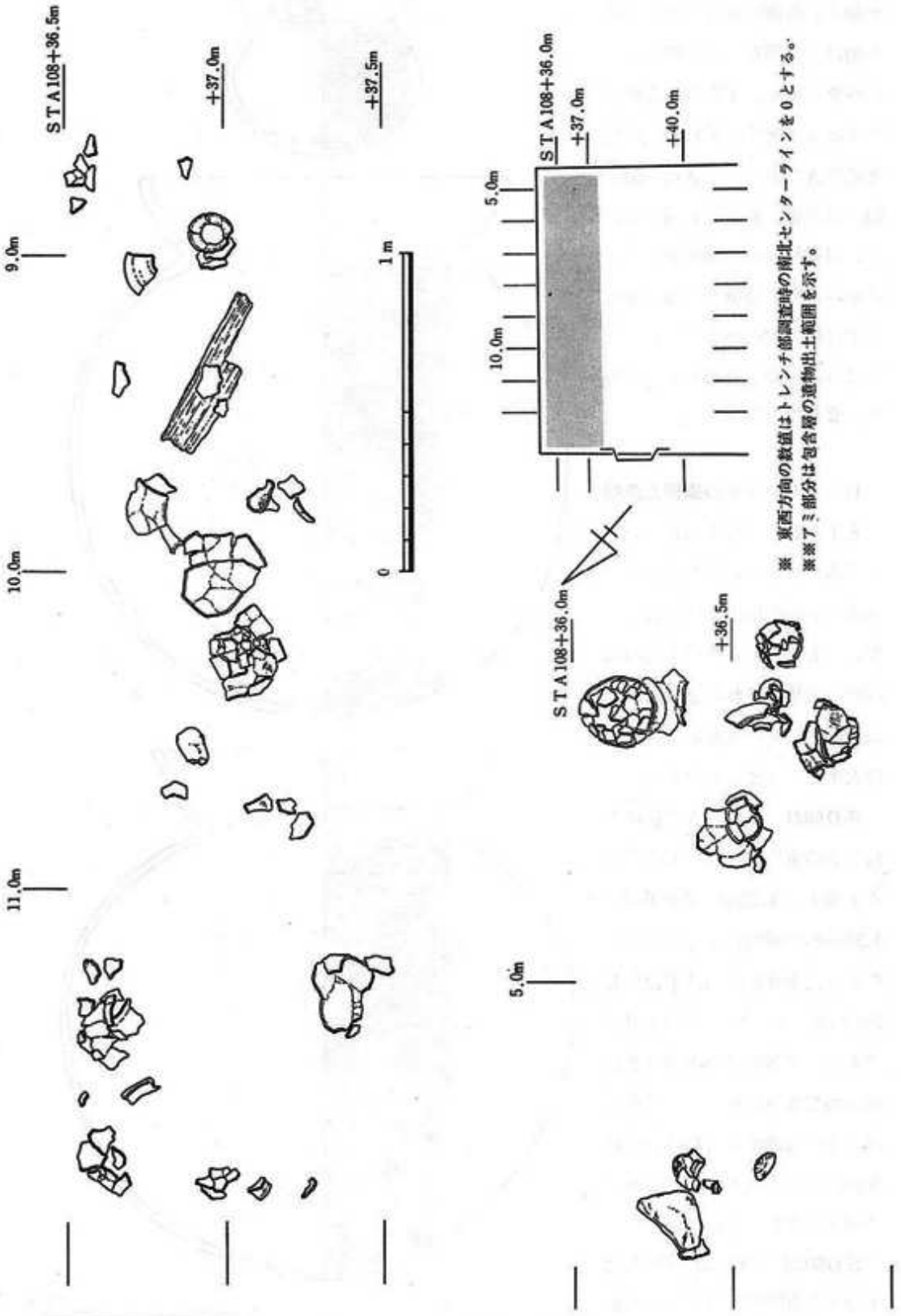
E1、E2、F1の各トレンチで溝、ピットなどを検出したが遺構からの出土品はほとんどない。E1トレンチの北端の矢板沿いで検出された包含層出土品が両トレンチを通じての遺物の大半というところである。

SD6021　先の調査で検出された溝の東に連続するものである。幅1～1.25m、深度0.3～0.35mの比較的しっかりした肩をもつ。掘り込み面はT.P.4.2mの暗オリーブ灰色粘土上面である。充満土は西北端で2層東南端で3層に分けた。最下層は炭化植物遺体を含む暗青灰色微砂混じりの粘土である。遺物は出土しなかった。

SD6026　幅0.6m、深度0.2mの東西方向の溝である。充満土は炭化物を含む黒色粘土、そ



第34図　D1トレンチSK6031出土土器



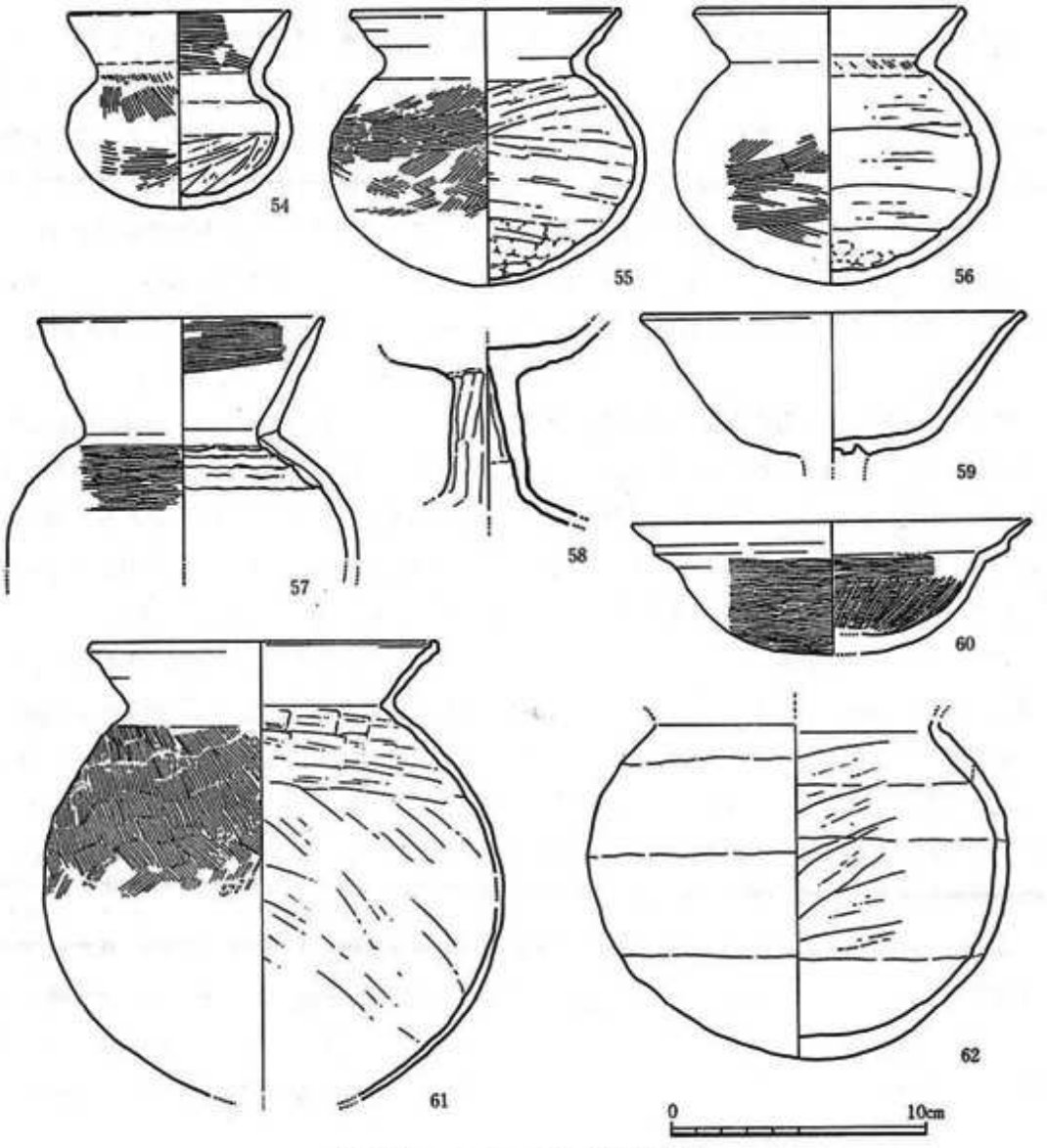
第35図　E１トレンチ包含層遺物出土状況

してその下に暗オリーブ灰色粘土が堆積する。出土遺物はない。

ＳＤ6027　幅0.6m、北進して一段と狭くなる。深度は0.03～0.05mと非常に浅い。ＳＤ6026とほぼ直交する。出土遺物はない。

ＳＤ6028　幅0.4～0.5m、深度0.05mの浅い溝である。西南西～東北東から東南東へ円弧を描くように方向を転じる。転じたあたりで東へ幅0.2～0.4mの浅い溝が分岐する。充満土は暗灰色粘土で、出土遺物はなかった。

ＳＤ6029　幅は0.1～0.3mと狭広がある。深さは0.05mと浅い。方向はＳＤ6021、6022と同様、Ｃトレンチの遺構群に一般的な軸方向とはずれる。充満土はこの面を覆う暗オリーブ灰色粘土と



第36図　Ｃ２トレンチ包含層出土土器

同じである。出土遺物は溝肩から流れ込む状態で土器片２点が出土した。布留式甕の破片である。

ＳＰ51（図版14）　径0.7～0.8m、深度0.1m前後の円形ピットである。充満土は暗灰褐色粘土である。遺物は底面よりやや浮いた状態で鉢形土器が１点出土した。

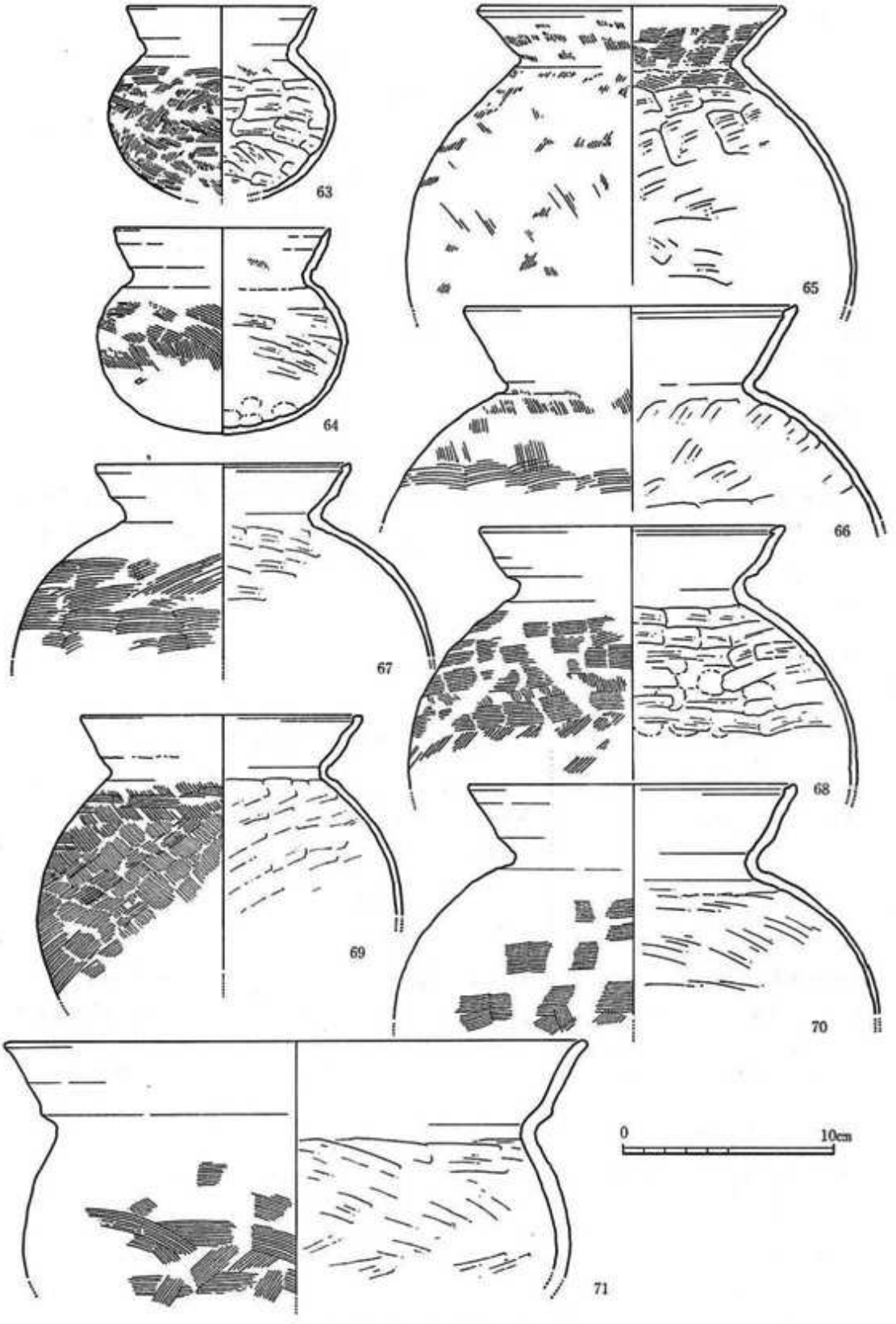
ＳＰ51出土遺物　平底で口縁が外斜上方に立ちあがる鉢Ｂである。内面は横方向のハケメ調整である。

包含層とその遺物

古墳時代前期遺構面を覆う遺物包含層の堆積状況については前回の調査で既に判明している。本節でもあらあら述べてきたところである。ここでは補足すべき点に限って説明する。

最も濃密に遺物を包含するのは今回の調査ではＣ２トレンチ東半部、特にＳＤ6009以東である。これは先の調査のＣトレンチ南部に関連する。Ｅ、Ｆトレンチでは包含層自体がほとんど存在しない。ただ、Ｅトレンチの一部では包含密度からいえばＣトレンチのそれに匹敵する包含層が検出されている（第35図、図版14）。土層はオリーブ黒色粘質微砂とこれを覆う暗緑灰色微砂混じり粘土の２層からなる。最大層厚は0.4mあるが、南して徐々に薄くなり、矢板打設位置より南１～1.5mで完全になくなる。包含層の範囲はＥ１トレンチ北方あるいは北東方に広がっていたとみられる。以下にＣ２トレンチとＥ１トレンチの包含層出土土器の主要なものについて説明する。

Ｃ２トレンチ包含層出土土器（第36図、図版24）　復元しえたものには小型丸底壺、壺、高坏鉢、甕などがある。小型丸底壺（54～56）はＣが多い。口径、器高が20cm以上のものとそれ以下のものとがある。体部外面のハケメ調整は、全体に施されるもの、下半にのみ施されるものがみられる。後者の場合は上半部が口縁部からのヨコナデを継続して施してある。先の調査でも指摘されていたが、口径、器高とも20cmを越えるものには体部下半に煤痕のみられる例が多い。壺（57）は口縁部が斜上方にのび、端部がまるみをもって終わる形態をとる。口縁部内面上半と外面肩部に横方向のヘラミガキを施し、その他の部分はヨコナデで仕上げている。頸部内面に接合痕を残す。壺Ｃに分類されよう。高坏には、坏部ヨコナデのＡ₂(59)、脚部縦方向ヘラナデのＡ₂（58）が多い。鉢では二重口縁をもち、端部が薄く尖る精製の鉢Ａ（60）がある。口縁部以下内外面とも密にヘラミガキを重ね、さらに内面には放射状暗文を加えている。甕の破片は多いが、破片観察では甕Ｂ、Ｃが目立っている。しかし、頸部が「く」の字形に外反し、口縁端部が上方に突出し、外端が面をなして、これに球形の体部が付く甕Ａ（61）も出土している。体部外面には右下がりの細かいハケメを施すが、部分的にタタキメが残る。内面はヘラケズリして器壁は薄い。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色である。他に、口縁部が欠失した体部片（62）がある。内外面とも粘土接合痕がはっきり残り、外面は成形後ナデまわしただけで凹凸が激しく、粗雑なつくりである。外面の煤痕は顕著である。



第37図　Ｅ１トレンチ包含層出土土器

E1トレンチ包含層出土土器（第37図、図版25）　甕の破片が圧倒的である。口縁部が内湾して立ちあがり、端部が内側に肥厚して面をなす甕B（66～70）が大半である。頸部が「く」の字形に外上方にのび、端部が立ちあがって外端面をもつ甕A（65）は1点出土している。口縁部内面の横方向のハケメ調整は頸部直下にも及んでいる。それ以下はヘラケズリして器厚を減じている。体部外面の細かいタタキメをナデて消し、滑らかな器表面を得ている。胎土は砂粒を多く含み、甕Bとは違って硬質である。小型丸底壺（63、64）は口縁部が短くのび、端部が細くまるみをもって終わる形態で、体部外面がハケメ調整による小型丸底壺Cである。体部外面のヘラケズリはよく残っている。鉢（71）は二重口縁をもつ形態。体部は外面ハケメ、内面ヘラケズリ調整である。器壁の厚い大型品である。

集落のありかた

これまでの調査で明らかなように古墳時代前期遺構面が既調査区の全域にわたって残っていたわけではない。後世の、特に長瀬川の流水は北と南でこの遺構面を寸断している。前者は後述する佐堂（その3）第3調査区、後者はDトレンチの調査結果にあらわれている。そしてE、Fトレンチでは一部を除いて包含層も顕著な遺構もない。したがって残されたCトレンチの調査結果が集落のありかたを知るキー・ポイントになる。

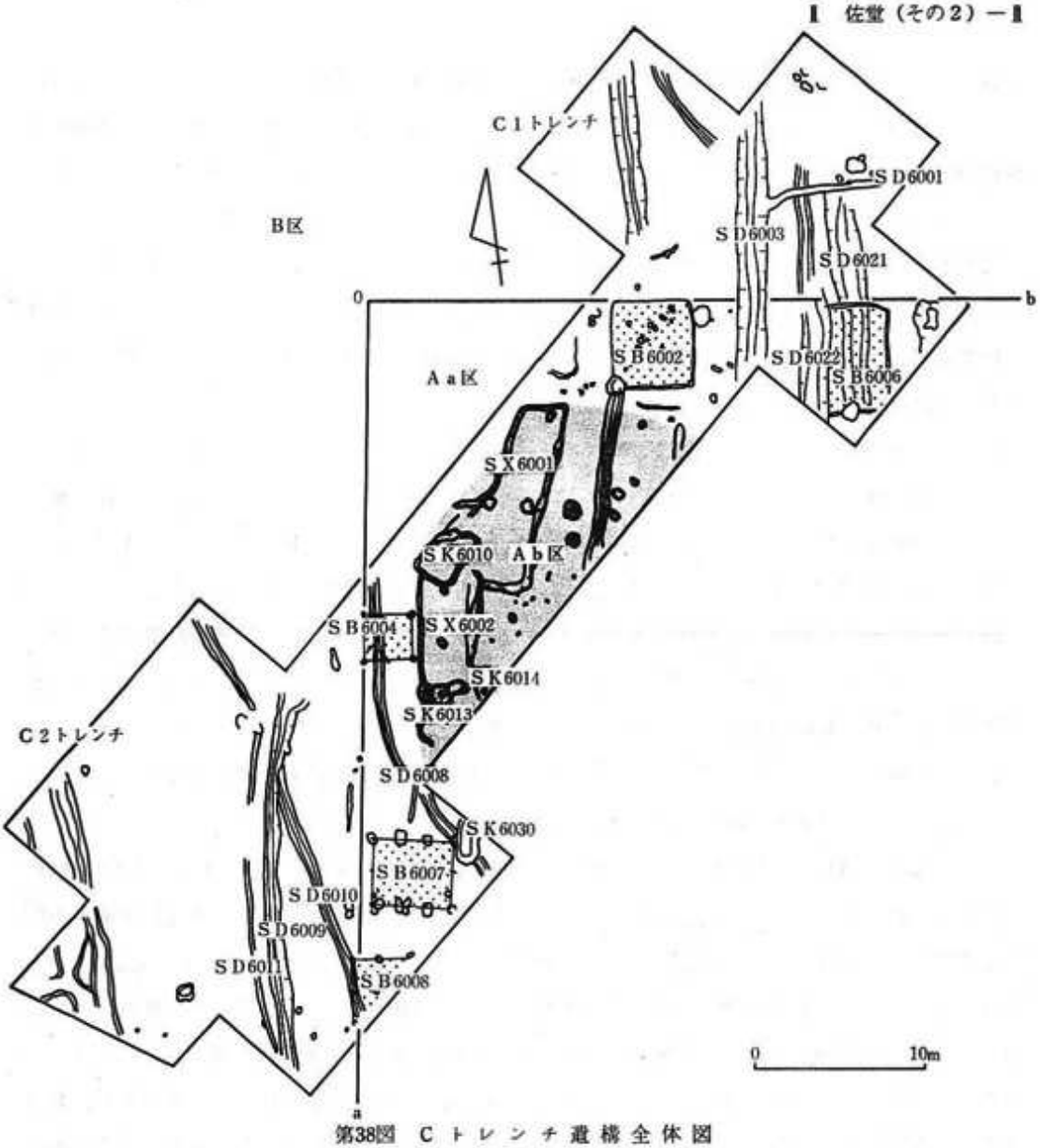
先の調査結果も踏まえてCトレンチの主要な遺構の前後関係を示すと以下のようになる。

	庄内式	布留式		
C1トレンチ周辺	SD6021 →	SB6006 →	SD6002 →	SD6001
				SD6003
C2トレンチ周辺		SD6008 →	SB6007 →	SK6030
		SD6010	SB6008	
			SD6009	
			SD6011	

SD6021は庄内式の段階の唯一の遺構である。調査対象区域内に集落が営まれるのはこの溝の埋没後、布留式の段階を迎えてからである。集落の営まれた期間は遺構間に切り合い関係があるものの出土遺物の点では大差なく、須恵器出現前には消滅したことが先の調査でも指摘されている。

さて、トレンチ全体の遺構の特徴を述べるにあたって若干ラインを補っておく（第38図）。図のa、b2本の線はSB6002とSB6006の北辺、SB6004、SB6007、SB6008の西辺の側線をそれぞれ延長したものである。その交点を0とし、これを結んだa－0－bでほぼ直角に限る。この線で画した内側をA区、外側をB区とする。A区はさらにAa区とAb区に区分する。

a－0－bは建物の「並び」に沿って線引できる以外に、ほぼこのラインを境として、遺構の分布密度とその種類、包含層の堆積状況にも差がある。すなわち、B区にかかるC1、C2のト



第38図 Cトレンチ遺構全体図

レンチ周辺で遺構と認定できるのは溝以外にないといってよい。ところが、A区では、時期の前後するものも含まれるが、一応竪穴や掘立柱建物、それに生活のにおいがぷんぷんする各種の土坑（特に、Ab区の土坑群の存在する一角を前回の調査者は「厨」という言葉で表現しているほどである）がある。一方、包含層の遺物の出土量もまたA区を中心に多く、周辺へゆくにつれて、つまり、C1トレンチでは北部に至って、C2トレンチではSD6011を越えると量的に少なくなる。また、層厚そのものも薄くなる。さらに、a—0—bの城外では、その南北を限るSD6003、SD6009で多量の土器が出土し、生活域の周辺にありうべき現象を引き起している。このような状況からA地区が居住区の一角である、と断言できる。

次にこのA区の内容はどのようなものだろうか。C1トレンチでは、既に検出されていたSD6003に加え、その東側にSD6022、またそれ以前にはSD6021が南北にほぼ平行して走ることが

分かった。つまり、東から西へと溝を掘削し変えて居住区の区画をつけていったことが知られる。またこの切り合い関係に示される時間の経過の中で住居そのものも東から西へ（ＳＢ6006→ＳＢ6002)、しかもｂ－０ラインに沿って築かれていった。言い換えれば、時間の幅があるにもかかわらず、住居の配置については一定の秩序にしたがって行われたのである。

これまでにも指摘されているように、当調査区の遺構は南北方向に軸をもつ例が多い。ところが、南北方向の溝に匹敵するような規模の排水溝は東西方向にはほとんど見い出せない。これは土地の地形に制約された証拠でもあるから、この自然環境の中で生活を営もうとする限り、溝は南北につけなければ排水の便をなさなかったわけである。

しかし、建物もこの南北に広がるスペースをどこまでも利用したかというとそうではないようである。ａ－０ラインに沿う掘立柱建物は溝に西限されて南北に立地するといえるが、ｂ－０ラインに沿う竪穴は整然と東西方向に移動してきている。このことは、ｂ－０ラインがＡ区に住まう人々により共通の認識のうえに了解された居住区の北限のラインであったことを示している。

溝の配置は地形に左右される自然環境的因子が多分に働いたのに対し、建物の配置はそれだけにとどまらず、集落を営む人々の間の社会関係的因子が作用していた、とみられる。とすると、居住区はａ－０－ｂを北西端として東西南北に四角いプランをとって広がる可能性がある。ただ、その空間が一時的に全て利用されたというのではなく、その範囲内では時間を追って活用するスペースにも変化がある点を考慮しなければならない。

では、Aa区とAb区の遺構の関連や性格はどのようなものだろう。いうまでもなくAa区は純粋に建物の配置スペースとして把握される。これに対してAb区は様相が違う。建物に関連する明確な痕跡がなく、各種土坑がAa区に比して無秩序に、切り合い関係を示して存在する。スペースの活用からみるとAa区は既にみたように秩序があり、Ab区はどちらかといえば無秩序といえる。しかし、Ａ区全体におけるAb区の位置は周辺にAa区のスペースが取り巻くというように一定の場を占めるものとして理解できないこともない。両区の遺構のありかたがどうであれ、共通するのはＡ区を生活の場とした人々の生活がいずれにも投影されていることであり、生活行為の内容の違いが２つの形で反映されているにすぎない。

Ab区の遺構では、ＳＫ6013、ＳＫ6014、ＳＫ6010についてその出土土器の型式学的検討による前後関係が先の調査者により導かれている。導かれた時間の幅は当然この集落の営まれた時間に重なり合い、遺構はその時間の中の人々の生活を反映する。Aa区の遺構では竪穴と掘立柱建物が共存するのか、しないのか、決定的な証拠は欠く。しかし、ＳＢ6006→ＳＢ6002の移動をみると、その時間的推移にかかわらず、新しい住居を定めるにあたっては古い住居にとられた既述の一定の秩序を採用しているのである。ところがAb区の場合、時間的推移をたどることのできる遺構があるにもかかわらず遺構の位置はこの区域にとどまる。とどまっていて、しかも竪穴や掘立柱建物にかかわった人々の生活と有機的関係をとりもつ。結局この条件を満たすのは上に述べた生活する側の生活行為に規定された生活空間の活用の基準の違いだろう。これによってAb区

はAa区とは別の機能を果す場と規定することができる。このようにとらえてはじめて、先の調査担当者のいう「厨」の機能もひとつの可能性として提示できるのではないか。

Ab区がAa区と違った意識で利用されていたことを証明する例がもう1つある。それはSK6030のありかたによって示される。この土坑はAb区に集中する土坑群の内容と等しい特徴をもつものであり、位置的にもAb区に含めてよい性格をもち、しかもその南端でSB6007を切っている。このことは、この掘立柱建物が廃絶されてもなおこの種の土壙が、Ab区に固執するかのように掘り込まれた、ということを示している。

以上のことから、Cトレンチの範囲にかかったのは集落の北西部であったと考えられる。しかも、これがこの集落の一時的な時間幅を反映する遺構群であれ、全時間幅を反映する遺構群であれ、集落の構成という面では、生活空間を活用する上で比較的秩序ある印象を与えている。これは繰り返し述べたように、布留式の段階に入ってCトレンチの地が集落として開かれ始めて以来守られてきた集落経営の秩序であると理解される。

担当した遺構のありかたは以上のようにとらえられる。発掘した範囲内では、居住区として考えられるのはC区の竪穴、掘立柱の建物群（Aa区）とそれにとりまかれる土壙群（Ab区）であって、集落の構成に与る墓、耕作地その他の証左は具体的に示すことは困難である。では、この限られた情報の中で上述した秩序あるありかたはどのように解釈されるだろうか。

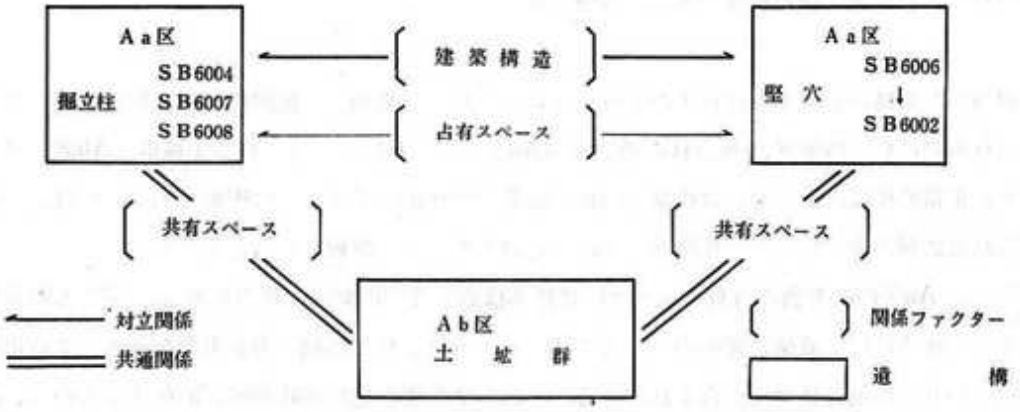
さて、Aa区の建築物の占有スペースには建築構造上2つの異質な建物がある。竪穴と掘立柱である。後者には、遺構の説明のところで述べたように、柱穴の掘り方が方形を基本とする比較的しっかりした掘立柱建物が含まれている。これら2形態の建物が時期的に前後するものか、同時併存した時期があったのか明確にはし難い。そこでまず2つの場合を考慮してみよう。

第一は、時期的に竪穴が先行し、その後掘立柱建物に変わるという単一的な流れとしてとらえる場合、第二は、竪穴と掘立柱建物とが併存したと考える場合である。後者には、竪穴群と掘立柱建物群のそれぞれに時間的な前後関係を考慮して、各々の一部が、構造的に異質の建物と共存した時期があった、という意味合いも含まれている。

前回の調査でも指摘され、今回の調査でも確認したように、本遺跡（C区）の古墳時代前期の集落は須恵器出現前の布留式土器を4期に分けた場合の第3期を中心とする、きわめて限定された時間の幅の中にある。古墳時代前期面の形成には、それに先立つ、自然環境に負うところの立地条件（微砂の堆積）が整わねばならなかった。他方、廃絶という点についてみると遺構面上には包含層が形成されるというように、自然環境の急激な変化を蒙って消滅したとはいちがいに言えない状況がある。廃絶はむしろ集落を営んだ側の、いわば社会的背景がまず候補に挙げられなければならないだろう。また、出現についても自然環境にきたす立地条件の成立もさることながら、ただたんにそこに自然発生的に集落が出来たとは倒底考えられないであろう。そうでなければ、上に観察したC区の割合整然とした遺構のありかたや、C1区の竪穴以前の庄内式土器を出

土したＳＤ6021がＣ区の集落の出現に先立って既に存在していた事実と矛盾することになる。やはり、Ｃ区を集落として活用せざるを得なかった社会的要因はあったといえるのである。とすると、竪穴から掘立柱建物へというような一般的個別的な狭義の建築史的羅列よりも、竪穴と掘立柱建物の併存時期を考慮した第二の場合がより重要になってくる。

第二の場合に立ってもう一度Ｃ区での検出遺構のありかたを吟味しておきたい。まず、建物の占有スペースという面についてみると第38図のＡ区には竪穴占有スペースと掘立柱占有スペースという２つのスペースを画していることが知られる。これは遺構のありかたにあらわれた建物の占有のしかたの２つの差といってよいだろう。次に、挙げうるのは、異質な建築構造（竪穴と掘



第39図　Ｃ区集落の空間利用の概念図

立柱建物）における建築構造上の２つの差である。差はそれぞれ同じファクターの範囲内で相互に対立しあっている。ところが既述したようにAb区の土壙群は一定の場を占め、とり巻く建物群に象徴される生活集団全体の共有スペースとして認識されていたと考えられる。結局、これらの占有あるいは共有スペースがひとつの集落構成に与っているわけである。このありかたを空間利用を中心として概念的に示せば第39図のようになろう。

このようにとらえられる集落の一端は繰り返し述べるように、この集落を生み出した社会を貫ぬく一定の秩序なくしては決して現われ得ない現象である。その前提となるものこそ必然的に社会的関係というカテゴリーに求めなくてはならなくなる。そして、特に上記の対立関係は所与の社会内部の構成体特有の格差にまでも対応する。それが、この集落構成を規定する要素のひとつだろう。

第4節 古 代・中 世

布留包含層の上層は暗青灰色と暗緑灰色の粘土が間層に薄く微砂あるいは細砂を挾みながら、交互に堆積している。C1トレンチでは約2.0～2.2m、C2トレンチでは2.3～2.5m程の堆積をみる。第一次調査では花粉分析データーから大きく2層に大別され、上層を混地性堆積、下層を水田耕作土と考えた。又、実際の調査でも花粉分析データーに反映されるような、畦畔、足跡等の遺構を検出している。

今回の調査では、この成果をふまえて検証を行ったが、確証を得るに至らなかった。C2トレンチでは水田面相等層を3面検出したが、これは各面上層に微砂や細砂の流水堆積があったためで、C1トレンチでは、この砂の堆積が極めて薄く、部分的であったため確認できなかった。又、Dピット以南では長瀬川による削平をうけているため確認できなかったが、河床面で検出した水田面Ⅳがこのうちのどれかに対応するのかもしれない。

水田面Ⅰ（第40図） C2トレンチ布留式土器包含層上層に拡がる暗緑灰色粘土層上面で検出した。上層には薄い微砂層が覆っており、全面に小穴とトレンチ南隅で溝（SD3002）を検出した。小穴は不定形なものが多く、流水によってえぐられたものか、足跡かは判別し難い。人間や牛、鹿等の足跡と思われるものも混じるが、歩行状態のわかるようなはっきりとしたものはない。

SD3002 東西方向にのびる溝で、幅2.5m、深さ0.2～0.3mと比較的浅い溝である。埋土はオリーブ灰色等の砂層で上層堆積の砂層と同じである。足跡内埋土もやはり同じ砂がたまっており短期間の流水堆積によって覆われたものであろう。

水田面Ⅱ（第41図） C2トレンチでイネ科植物の優占する中層上面で検出した。上層には部分的ではあるが微砂が薄く堆積しており、一時期の流水堆積によって覆われたことを示唆する。検出面には流水の際できたと思われる小穴及び溝状の遺構が検出された。この溝が遺構は水田面Ⅱで検出した溝（SD3003）とほぼ同位置をはしっており、人為的な遺構とはみなし難い。又、小穴も足跡と考えられなくもないが、確実なものはなかった。この検出面が水田面であるという確証は得られなかった。

水田面Ⅲ（第42図） C2トレンチでイネ科植物の優占する最上層である。上面にはやはり全面を覆う微砂堆積がみられる。2本の溝（SD3003・3004）と5状の畦畔（SA3001・3002・3003・3004・3005）を検出したが、先述したように自然地形の凹凸を掘りまちがえた可能性が強い。断面に現われるように畦畔には盛土を確認できず、溝も下層水田面Ⅱにおいて流水によってできたと考えられる起伏をそのままなぞらえているため人為的な遺構と考え難い点も多い。

SD3003 幅4.7～4.8m、深さ0.1m程の浅い溝である。埋土は水田面Ⅲ全面を覆う青灰色の微砂がやはり同じように溝底面にも堆積しており上層には暗灰色粘質土が堆積する。出土遺物はみられなかった。

SD3004 幅2.2～3m、深さ0.25m程の浅い溝である。埋土はSD3003と全く同様である。

一度はこの水田面が砂で覆われた。

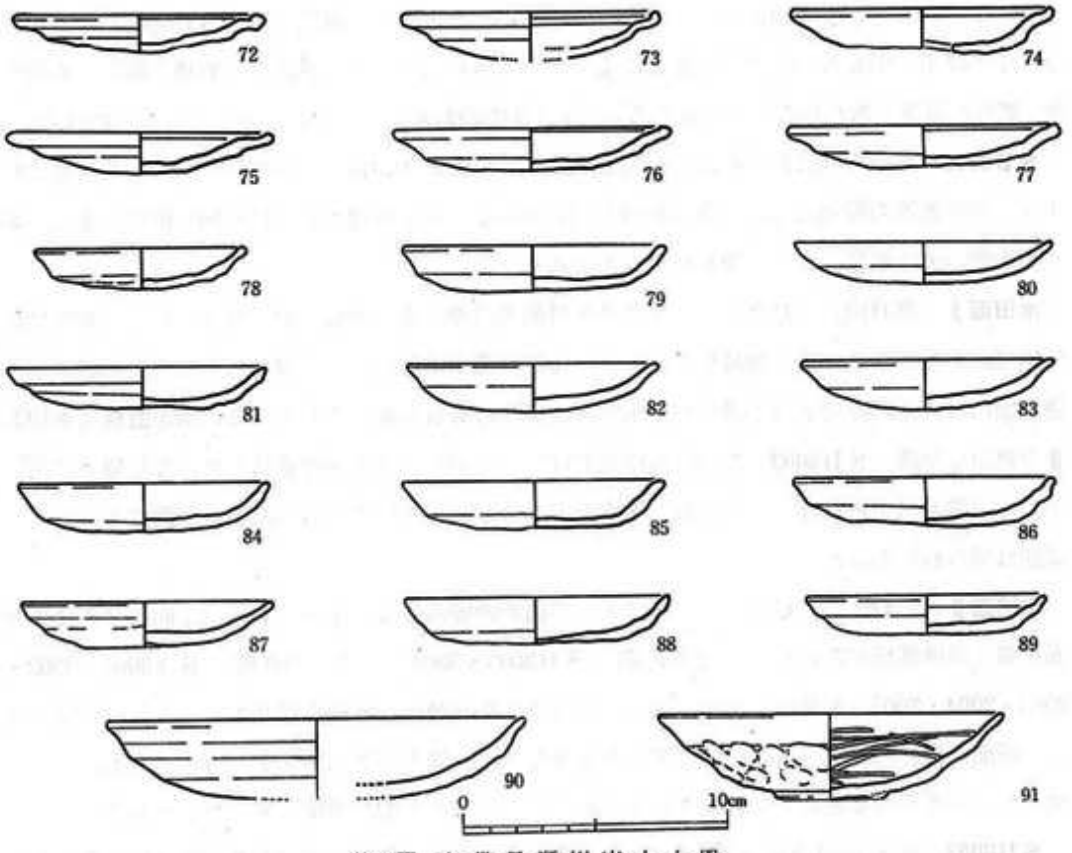
ＳＡ3001　ＳＤ3003、3004に挟まれた上幅1.2～1.6m、下幅３m、高さ0.2～0.3m程の畦畔状の高まりである。方位はほぼ南北である。盛土は確認できなかった。

ＳＡ3002　ＳＤ3004の東側に平行して南北にのびる畦畔状の高まりである。上幅1.2～1.5m、下幅2.0m、高さ0.1m程を測る。南端はＳＡ8004との間に水口状を呈する。盛土は確認できなかった。

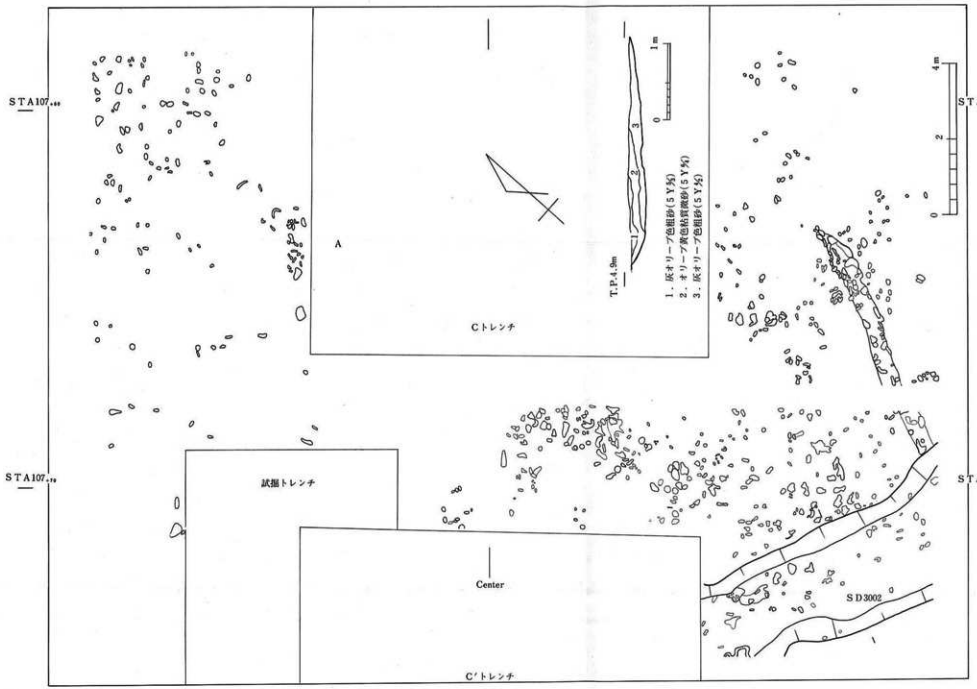
ＳＡ3003　トレンチ東側で南北にのびる畦畔状高まりである。上幅1.0～1.2m、下幅1.6～2.0m、高さ0.05～0.1mを測る。北端は東西方向のＳＡ3004と接する。盛土は確認できなかった。

ＳＡ3004　トレンチ中央部で東西方向にのびる畦畔状の高まりである。上幅0.8m、下幅1.5m、高さ0.1mを測る。

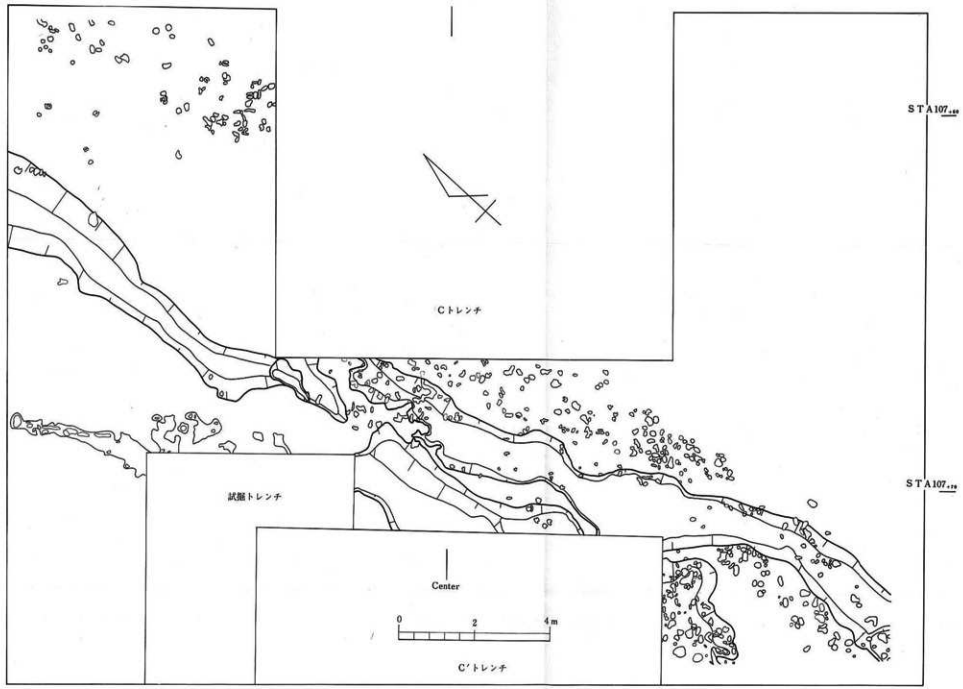
ＳＡ3005　トレンチ北隅で東西にのびる畦畔状の高まりである。上幅0.2～0.3m、下幅0.5m、高さ0.05m程の小さなものである。盛土は確認できなかった。



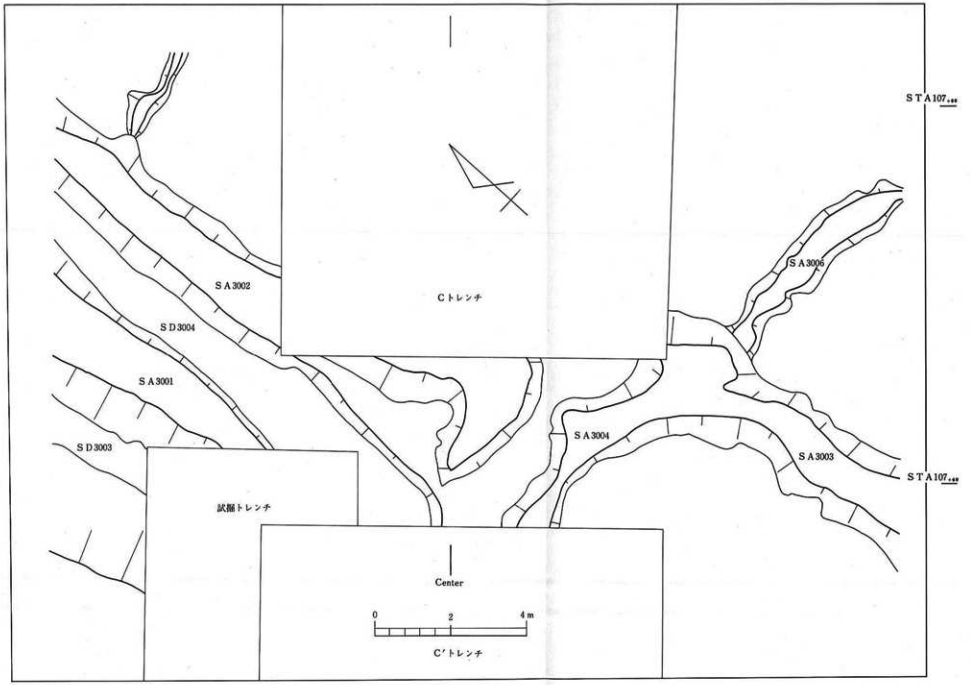
第40図　中世長瀬川出土土器



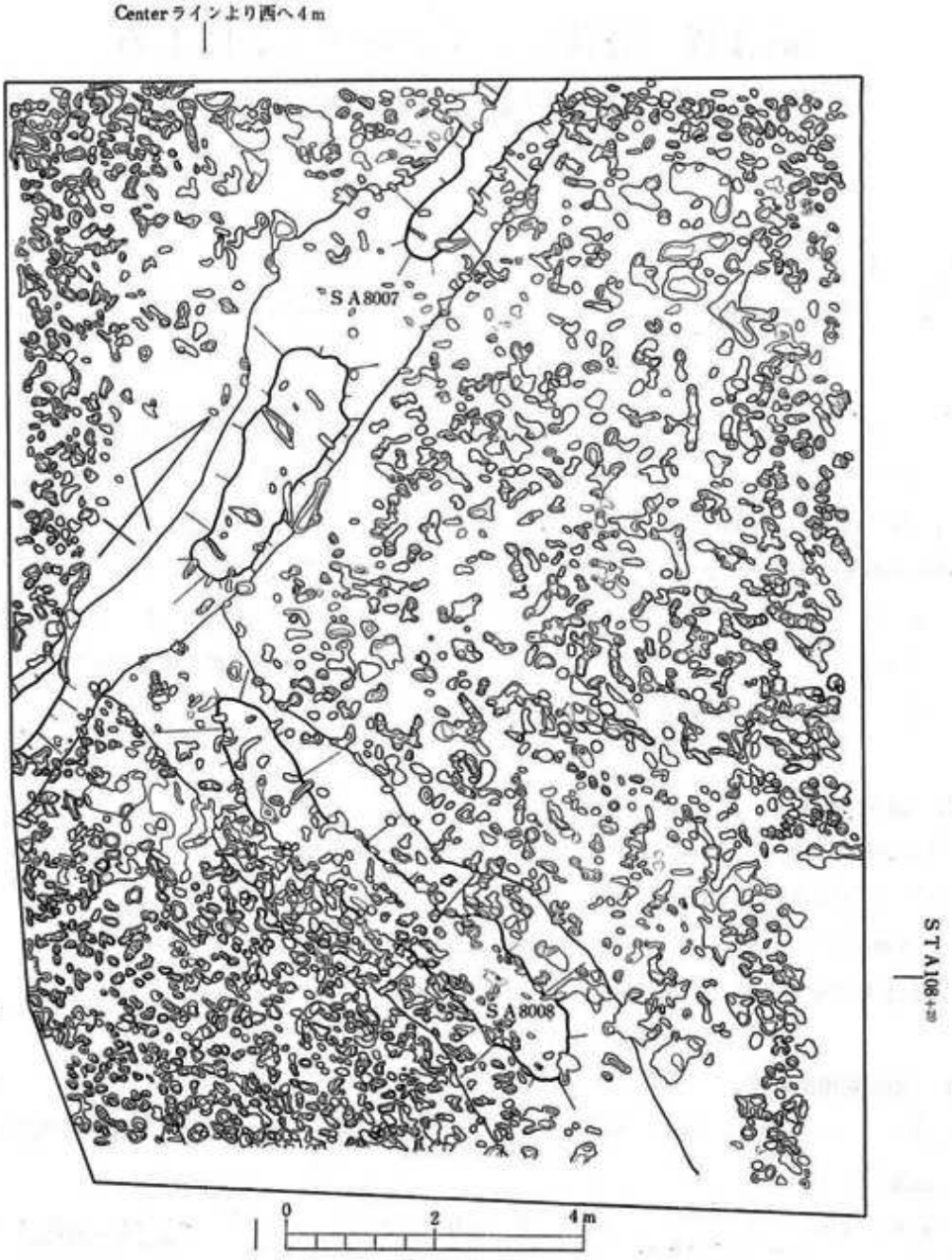
第41図　C２トレンチ水田面 Ⅰ



第42図　C２トレンチ水田面 Ⅱ



第43図　C２トレンチ水田面 Ⅲ



第44図　F３トレンチ水田面 4

SA3006　トレンチ東側で東西にのびる畦畔状高まりである。上幅0.5～0.6m、下幅1.0m、高さ0.1m程の比較的小規模なもので、盛土は確認できなかった。

水田面Ⅳ　中世長瀬川の河床面において多数の小穴と南北方向畦畔（SA3007）東西方向畦畔（SA3008）を検出した。この水田面はトレンチ調査及び久宝寺遺跡北端でも検出されており10世紀頃のものと考えられる。

第3章　液体シンチレーションによる佐堂遺跡の14C年代決定

京都産業大学　山　田　　治

1. はしがき

放射性炭素年代決定法は古代の生物が枯死した時刻が現代から七年前とするとき

$$t = 8033\ (年) \times \log_e \frac{No}{N}$$

として求めるものである。No と N はそれぞれ現代標準および古代生物の炭素１ｇ発りの ^{14}C 原子の数であり、また炭素１ｇ当りの毎分のベータ線放出数と置きかえることができる。Nは１ｇ当り毎分13.46＋0.005個であることが判っているので、古代遺物中の炭素１ｇ当り毎分のベータ線放出数Nだけが判ればよい。

古代の木、炭、貝殻、骨、ピートなどの生物遺体は必ず炭素を含んでいるから年代決定の目的に利用できる。今回用いた液体シンチレーション測定期では、炭素15ｇを使用できたとき、近世の試料では誤差10年程度の測定精度が期待できる。

2. 測定結果

*ＫＳＵ-716　　250±35ＢＰ　（炭素量10.24ｇ　1000分測定）

資料採取場所　佐堂遺跡左岸護岸杭列

250Ｂ.Ｐ.は年輪年代におきかえるとＡＤ1630年頃になり、江戸時代初期に当る。

*ＫＳＵは京都産業大学の測定によることを示す記号である。

3. 測定結果の考察

液体シンチレーション測定は絶対測定であって統計誤差の３倍以上の年数が違う可能性は0.3％程度である。

ＫＳＵ-716の中世という時代の判定はやはり出土遺物があったからであろうが、河川はしばしば護岸のため杭打ちをくりかえすので、長い時代にわたって存続したものであれば古い材から新しい材まで混っている可能性がある。この結果は、試料に供された木材が江戸時代初期より100年以上古いことはないが、江戸時代中期以後であることもないという意味を表わしている。

4. おわりに

比例計数管式気体計数法による従来 ^{14}C 年代測定法は、比較測定でかつ再現性にかなり苦しむものであった。ところが体液シンチレーション法は、明確な物理法則に基き、確実な物理量を測

るという絶対測定である点で大きく新しい進歩をなしとげたのである。

しかも普通は比較測定の方が精度が高いのであるが、結果から見られるとおり液体シンチレーション方式のほうがはるかに誤差が小さいという有利さまで持っている。

測定結果が揺るぎない確実性を持っているということは学術研究にどれほどの価値を与えるかはかり知れないものがあるのであり、しかも簡単容易な技術でそれが成し遂げられるということになれば、時代のおもむくところは自づから明らかであろう。考古学者も自然科学を忌避することなく、一日も早く新しい技術を取りこむ積極性を持つべきであろう。

Ⅲ　佐　　堂（その3）

第1章　第1調査区

今回行った調査は、すでに調査が終了している佐堂遺跡（その1）ーAトレンチ（以下、佐堂1とよぶ）の追加調査である。

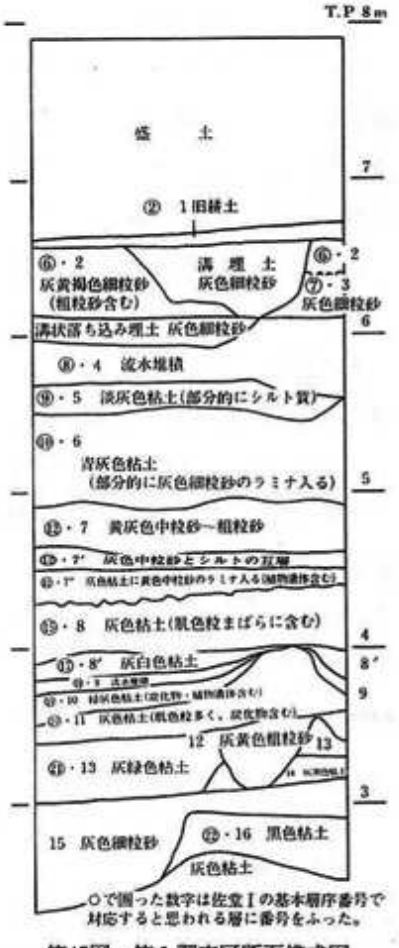
トレンチ位置は、近鉄大阪線久宝寺口駅より北北東約250mの大阪府道中央環状線佐堂交差点の南側で、佐堂遺跡では最も北端に位置する。また行政区画上では、八尾市佐堂町2丁目、久宝園1丁目、美園町1丁目の町境部となる。

トレンチは、Aトレンチの調査時に工業用水管が埋設されていたために掘り残していた所で、Aトレンチ北端東側と重複しており、広さは10.3×9.9mのほぼ正方形であるが、西側の幅2.5mの部分は前回調査による攪乱部分である。

調査は機械掘削で盛土層を除去後、個々の層を人力掘削によって順に掘り下げ遺構面の確認を行い、断面は北東壁を残して実測を行った。また最終掘削面は、弥生中期遺構面とされる灰色粘土層上面迄は完掘したが、それより下の縄文時代遺物包含層ー黒色粘土層迄は筋掘りによる断面実測を行った。

基本層序（第45図）

地表面はT.P.7.9mで、厚さ120～130cmの盛土下には耕土が約10cm堆積する。2・3層は粗粒砂を含む灰黄褐色系の細粒砂層が約150cm堆積するが、2層上面より切り込む遺構などのために残存部は少ない。遺物は瓦器、土師質土器などが出土しており、佐堂1の中世遺物包含層とされる⑥・⑦層と思われる。また3層は、2層上面と同じように北域は遺構による削平を受けており、南域にのみ堆積が認められる。4層は灰色系の中粒砂～細粒砂や青灰色粘土が複雑に入り乱れる流水堆積層で瓦器などの中世遺物が少量出土した。層厚は約40cm余りあるが、トレンチ西側では溝による削平を受けている。またこの層より下層では遺物



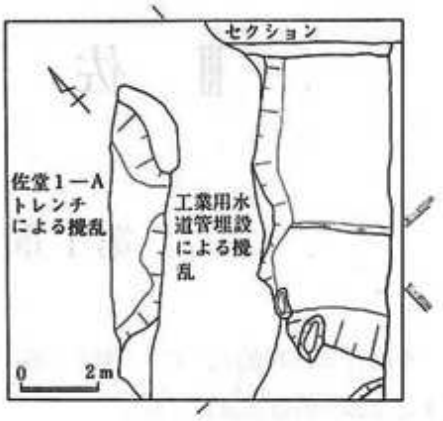
第45図　第1調査区断面模式図

の出土はみられない。5層は層厚約20cmの淡灰色粘土層で、部分的にシルト質の所も存在する。6層は約50～60cmと厚く堆積する青灰色粘土層で部分的に灰色細粒砂のラミナが入る。7層は上から灰色系の粗粒砂～中粒砂、中粒砂～シルト、粘土というように序々に滞水気味の層序で堆積することから、佐堂1の⑫層－NR301になるものと思われる。層厚は合計60cm余りである。8層は層厚40cmの灰色粘土層で底面のレベルはT.P.約4mである。8層下には11層の灰色粘土層をベースとする畝状遺構を検出したが畝周辺の低地には8′－灰白色粘土層、9層－流水堆積層、10層－緑灰色粘土層が堆積した。これらの層は畝のまわりでは薄いが、周辺部では10～20cm堆積する。なお10層には植物遺体や炭化物が多く含まれた。11層は佐堂1－㉔層と考えられる灰色粘土層で層厚は10～40cmを測る。

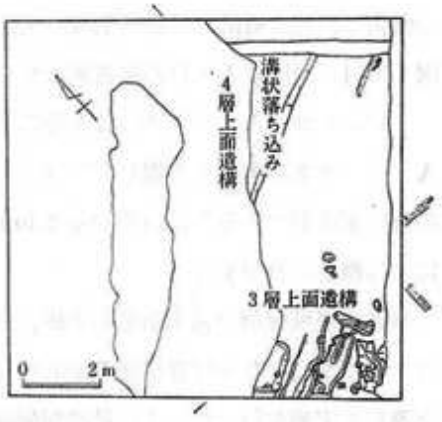
11層より下は筋掘りを行ったが、掘削途中に多量の湧水をみたため略測を行った。掘削最下でみられた黒色粘土層は、トレンチ西域では灰色の粗粒砂によって大きく削られており、佐堂1で述べられていたように大きな河川の存在が考えられた。

遺構（第46～48図）　**出土遺物**（第49図）

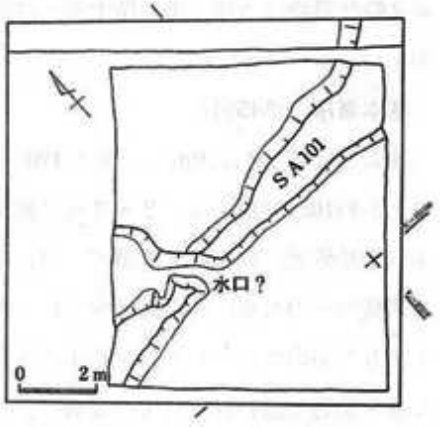
2層上面（第46図）　溝状の遺構等を検出したが、攪乱の範囲が広いためにそのつながりはよくわからない。攪乱はトレンチ中央付近を工業用水管が南北方向に埋設されていたことから、T.P.4.9m付近迄は攪乱を受けない所が東域と西域にわかれて存在した。東域で検出した溝状の落ち込みは縦8m以上、横4m以上、深さ30～45cmを測り、南東部と北東部はトレンチの外へ広がる。西域の遺構は北東から南西にやや彎曲しながら落ち込んでおり、深さは10～15cm余りである。両遺構とも埋土は粗粒砂を含む灰色細粒砂層で、遺物は瓦器などの中世遺物が大半であったが、古い土釜－4や染付などの近世遺物も少し含まれた。4は土師質の土釜で復元口径28.8cm、残存高7cmを測る。外斜する口縁と水平方向に伸びる鍔を持ち、口縁内外面はヨコナデを行う。また胎土には金雲母などを含み生駒西麓産土器の特徴をもつ。



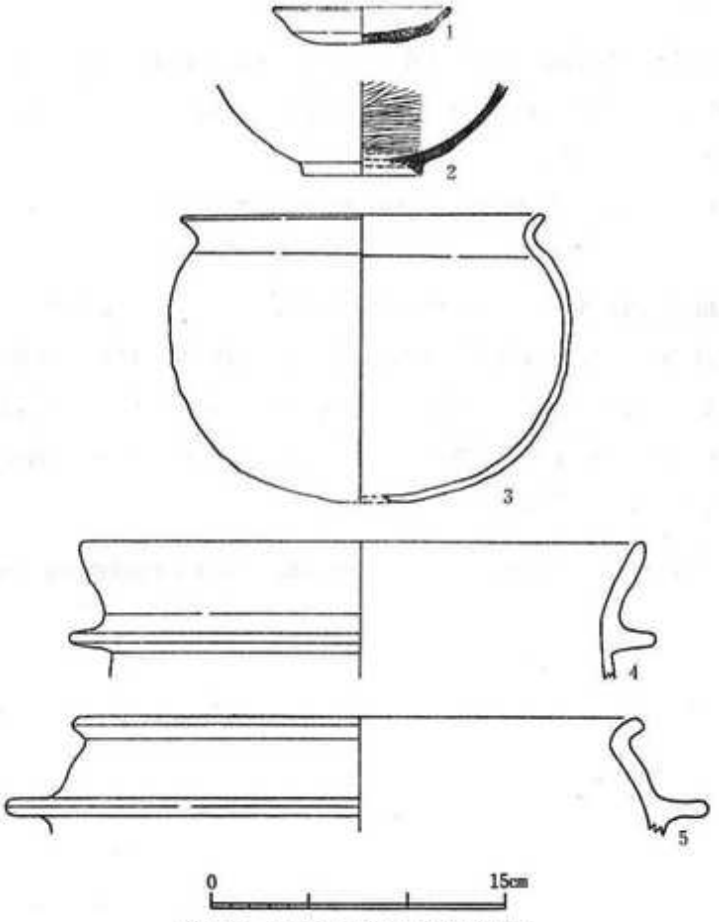
第46図　第1調査区2層上面遺構実測図



第47図　第1調査区3層上面、4層上面遺構実測図



第48図　第1調査区11層上面遺構実測図



第49図　第1調査区出土遺物実測図

3層上面（第47図・図版26）　トレンチ南東端の一部は、2層上面遺構の影響を受けなかったことから北東～南西方向の数条の小溝や不定形落ち込みなどを検出した。小溝には灰色系極細粒砂が堆積しており、下場幅20～40cm、上場幅30～60cm、深さ5～10cmを測る。遺物は高台のやや退化した瓦器などが少し出土した。小溝は、佐堂1の⑥層上面遺構と方向はほぼ一致するものの遺構面の層序の関係は、よくわからない。

3は3層出土の土師器甕で、口径18.8cm、高さ14.8cm、最大腹径21.6cmを測る。口縁内外面はヨコナデを施すが、他は摩滅のためわからない。外面全体には煤が付着する。

4層上面（第47図・図版26）トレンチ北城～西城で東北東から西南西方向に流れる溝を検出した。溝は幅4m以上、深さ20～30cmで西肩部はトレンチ外となる。埋土は灰色細粒砂層が堆積しており、瓦器皿―1、土師質土釜―5などが出土した。1は口径9.1cm、高さ1.9cmを測る。全体に摩滅が激しいが、見込みには平行線状の暗文が荒くつけられる。5は口縁をく字形に強く折り曲げ、肩部には鍔が水平方向につけられる。復元口径は29.4cmで、胎土にはチャートを含むが雲母はみられない。口縁・鍔の形態や胎土は、河内 B_1型注 と同じ特徴をもつ。なおこの溝は佐堂1の⑦層上面で検出されているSD444と方向は一致するが、規模はやや異なり、3層上面遺構

同様に層序の食い違いがみられる。

2は4層出土の瓦器椀の底部で、高台径6㎝、残存高4.6㎝を測る。高台は断面が三角形のしっかりしたもので、内彎気味の体部内面には太い暗文が密に施される。また外面にも暗文が存在するが摩滅のためによくわからない。

8層上面　トレンチ全体に上層の黄色中粒砂埋土の足跡状遺構がみられたが、不明瞭であった。

11層上面（第48図、図版26）　佐堂1の㉚層上面で検出されている畦畔状遺構―SA101につながる畦畔を検出した。ほぼ東西方向に伸びる畦畔は、上場幅40～140㎝、下場幅110～200㎝、高さ15～20㎝を測る。肩部は南側に強く落ちており、やや南域寄りの所には水口状の溝が北西から南東方向に存在した。佐堂1では畦畔にベースの灰色粘土を盛っていると書かれているが、このトレンチではよくわからなかった。

注　菅原正明　畿内における土釜の製作と流通　文化財論叢　奈良国立文化財研究所　1982・10

第2章 第2調査区

今回の調査は、すでに調査を終了した佐堂遺跡（その1、A地区）南端の佐堂（その3）の2トレンチに対して行った。

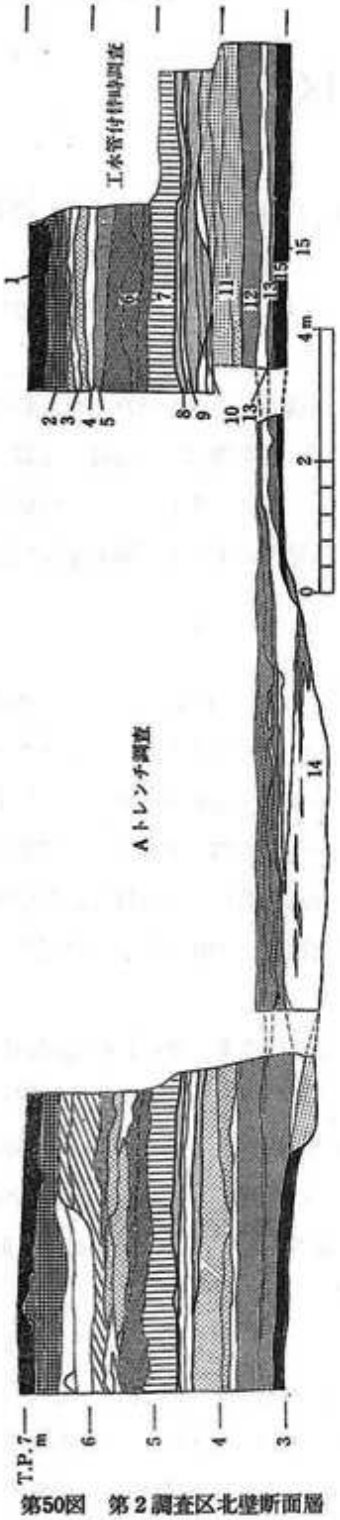
佐堂遺跡（その1）（以下佐堂Ⅰ）は八尾市佐堂町に所在し、北端で美園遺跡、南では佐堂（その2）（以下佐堂Ⅱ）と隣接する。

調査は機械掘削で盛土を除去後、人力掘削によって掘り下げ各遺構面の調査を行なった。概に中央部は第一次調査Aトレンチで弥生時代中期面まで、調査区東側は工業用水管付替時に古墳時代後期面まで調査が行なわれている。このため佐堂ⅠAトレンチより東側をAトレンチ、西側をBトレンチとした。又、今回の調査では縄文晩期相等層と思われる黒色粘土層まで掘り下げて調査を行った。断面は西壁と北壁を残して実測を行った。

基本層序（第50図）

基本的な層序関係は、第一次調査（『佐堂その1』以下佐堂Ⅰ）で確認されており、その知見を概ね変えるものではない。上から第1層攪乱土、第2層灰色あるいは褐色系砂質土層、第3層灰黄色粘質土（佐堂Ⅰ第6層対応層以下土層番号のみ）　第4層暗緑灰色微砂混りシルト（第7層）　第5層暗青灰色シルト（第8層第9層）　第6層暗緑灰色粘土（第13層第15層）　第8層暗灰色砂レキ混り微砂（第16層、布留式土器包含層）　第9層暗青灰色細粒砂（第17層、古墳時代前期ベース土）。第12層暗青色粘土（第20層）　第13層暗緑灰色粘土（第21層）　第14層灰色系粗砂（自然流路）　第15層黒色粘土。以上に大別できる。

現地表は、T.P.7.9m程で北の美園遺跡よりも1m程高く、南の佐堂Ⅱでは中世長瀬川が形成した自然堤防上に位置するためT.P.8.6mと高くなる。現地表から1.3mまでは攪乱土と旧耕土が全体にわたって認められる。第2層は鉄斑を有しており中近世の耕作土と思われるが、各面の上層には灰色系の粗砂堆積がみられ、長瀬川増水時の影響がみうけられる。3層・4層は佐堂Ⅰ第6層・第7層（中世包含層）に相等するものと思われるが、本調査区では人為的な遺物、遺構等は存在しなかった。Aトレンチでは安定した面を有するが、Bトレンチでは、土層に乱れがみられ粗砂と粘土の堆積をくり返していることから長瀬川からの溢流がかなりあったものと思われる。中世の集落が佐堂遺跡北側に集中するのはこのためで当調査区付近は不安定な湿地状、あるいは畑地を形成していたものと思われる。なお、佐堂Ⅰでは第3層上面を13～14世紀の遺構面、第4層上面を10～12世紀の遺構面と考えている。第5層は厚く0.2～0.5mの暗青灰色粘土層である。出土遺物は見られなかったが、佐堂Ⅰの調査で「降平永宝」が出土しており平安初頭以降である。第6層、7層は古墳時代の水田耕作土でA地区6層上面で畦畔を1条検出した。佐堂Ⅰでは6世紀末～7世紀代の時期を与えており花粉分析でイネ科の花粉が優占していることもあわせて報告されている。第7層は佐堂Ⅰの第15層相等層と考えられるが、今回の調査で水田遺構は検出でき



第50図　第２調査区北壁断面層序概念図

なかった。佐堂Ⅰの調査では５世紀末～６世紀代頃の水田と考えられている。第８層は布留包含層である。調査区全体を覆うが、希薄で厚さ10cm程しかない。かなりの砂レキを含んでおり、出土土器も希薄で中にローリングをうけたものもある。第９層は古墳時代前期（布留式期）のベース土となるが上面に遺構を検出し得なかった。第10層、第11層は自然流路で弥生前期～後期の土器を包含する。第10層は暗青灰色粘土で上層は調査区全体を覆うが、下層は自然流路中央を通る溝状の落ち込みにたまる。後期の土器を包含する。第11層は黄灰色細砂と灰色細砂の２層に分層できる。ややローリングをうけた前期～中期の土器を包含するが、中期のものに磨滅は少ない。中期以降に流れた自然流路が後期初頭に最終の粘度堆積を終るのであろう。第12層は佐堂Ⅰの調査で水田面が検出されているが、調査区で上層流路の前平が激しく畦畔の検出するまでに至らなかった。佐堂Ⅰでは弥生中期と考えられている。第13層は緑灰色粘質土で上層は粗砂を混じえる。出土遺物はみられない。第14層は第15層の黒色粘土をベースに流れる自然流路で、トレンチ東側と西側に平行して南北方向に流れる。遺物は含まれない。第15層は黒色粘土である。T.P.+3.2～2.9と約30cm程の厚さでほぼ水平堆積をみせ、植物遺体が含まれている。山賀遺跡等の概要報告で示されている黒色バンドⅠ・Ⅱ・Ⅲのどれかと対応するものであるかは今後課題となる。

3.　調査成課

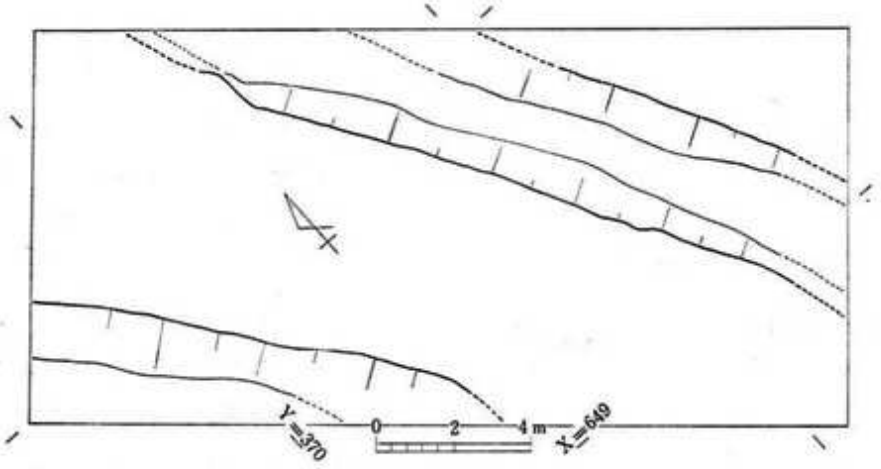
弥生時代（第51～53図）

弥生時代の遺構面は３面確認された。最終面黒色粘土上層で検出された自然流路２本、弥生中期水田相等面、中期～後期の自然流路の３面である。このうち遺物が出土しているのは上層の自然流路だけで、下層２層からは出土遺物がみられないので時期の限定は難しく、一番下層の黒色粘土の解釈によっては自然流路１・２は縄文時代の可能性もある。

自然流路１　トレンチ東側を南北にまっすぐはしる流路で緑黒色粘土上面で検出した。幅3.2m、深さ0.6m程の小さな流路である。底面はほぼ平坦であるが、0.1m程南側で低くなっている。しかし、この付近の自然地形からみれば北流していたものと考えるのが自然である。埋土は

オリーブ黄色粗砂層で、上層暗緑灰色微砂～粘土はベース土の黒色粘土上層を覆う。出土遺物はみられない。

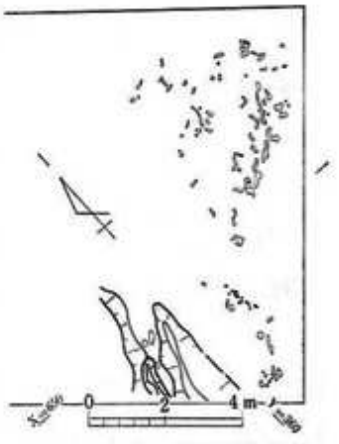
自然流路2　トレンチ西隅で自然流路1とほぼ平行している流路の右岸のみ検出した。検出面は1と同じ黒色粘土上面であるが、断面観察によれば、流路の最上層、黒色粘土を全面に覆う緑灰色粘土上面から流れ込んでおり、1よりも新しい。幅・深さとも規模は不明である。埋土は上から暗緑灰色粘土、緑灰色粗砂、オリーブ灰色粗砂の順である。出土遺物はみられなかった。



第51図　第2調査区弥生時代前期自然流路

水田　佐堂Ⅰの調査で検出された弥生中期の水田面に相等する暗青灰色粘土を検出した。上層に自然流路の粗砂堆積がみられ、当調査区では粘土上面に流路による削平のあとがみられ畦畔を検出するに至らなかった。

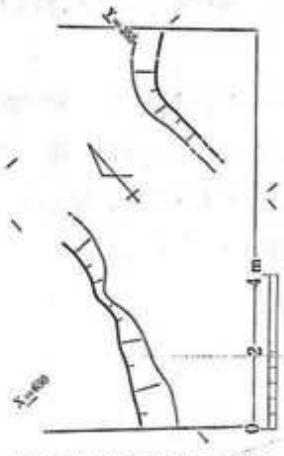
自然流路3　弥生中期水田面上に堆積した粗砂を調査区全域で検出した。幅等は不明である。粗砂中に弥生前期～中期の土器を包含するが、いずれもかなり摩滅をうけているため流路自体の時期判定は下し難い。上層には青灰良の粘土が溝状に堆積するが、流路の最終堆積によるものと考えられる。Ⅳ～Ⅴ様式期の土器を包含する。流路の下限時期を示すものである。



第52図　第2調査区弥生時代中期水田面

古墳時代前期　暗灰色砂レキ混りの粘土層がT.P.+4.6m付近に厚さ5～10mの堆積をみる。布留式土器の包含層である。しかし、出土遺物はほとんどが小片で摩滅をうけているものもある。包含層自体はかなり小礫を含んでいる。遺構は検出されなかった。佐堂Ⅱで検出されている集落も、この付近までは拡がらないものであろう。

古墳時代後期　17Aトレンチ暗緑灰色粘土上面で畦畔状の高まりを検出した。暗緑灰色粘土面



第53図　第２調査区弥生時代後期自然流路

はＡトレンチではＴ．Ｐ．５ｍ、Ｂトレンチでは5.1m前後と若干西上がりに傾斜をみせているがほぼ平坦である。又、Ａトレンチでは部分的に２層に分層が可能であり、『佐堂Ⅰ』の調査においても、上層を６世紀末～７世紀、下層を５世紀末～６世紀としているが、今回の調査では下層遺構を検証できなかった。出土遺物はみられなかった。

畦畔１　17Ａトレンチ暗緑灰色粘土面上で検出された畦畔状の高まりは、ほぼ西北～南東にのびるが、17Ｂトレンチではその延長が確認できなかった。畦畔は２段に構成されており、下段は下幅4.0m、上幅3.7m、高さ0.05～0.1m程、上段は下幅1.6～2.0m、上幅1.0～1.3m、高さ0.1mを測る。『佐堂Ⅰ』古墳時代後期水田面対応層となるため水田畦畔と考えられるが、今回の調査で水田とする積極的要素を他に見出すことができなかった。花粉分析の結果を待ちたい。

3.　奈良・平安時代

本遺跡の奈良・平安時代は『佐堂その２』Ｂ地区では大きな流路が存在しその南側Ｃ地区では不安定な状態ながらも、イネ科植物花粉の優占する層（水田ⅠⅡⅢ）が確認されている。又、『佐堂そのⅠ』Ａ地区では本調査区北側にやはり大きな自然河川が南北に流れている。つまり、奈良・平安時代の本調査区は２本の大きな自然河川に挟まれており、不安定な湿地堆積が人為的な遺物等は『佐堂Ⅰ』の調査でも遺構は希薄であったようだ。

中・近世　中世の佐堂遺跡は、本調査区から北側に平安時代末葉から室町時代初頭にかけて集落が営まれる。又、南側は川幅200m程の長瀬川が南北に流れる。本調査区はちょうど長瀬川右岸堤防のすぐ北側にあたり、集落は約150m程北に離れた所に位置する。

本調査区では、長瀬川からの溢流を思わせる流水堆積と可耕地の可能性を伺わせる。

自然流路Ⅰ　17Ａトレンチ北半の褐灰色微砂面に厚さ0.15～0.2m程の流水堆積がみられた。わずかに落ちぎみの左側肩部を検出したが、継続的な流路とは考えられず、一時の長瀬川からの溢流であろう。なお底面には不定形のキャタピラ状の根跡を残している。層位的にいえば『佐堂Ⅰ』鎌倉～室町の面に対応する。出土遺物はみられない。

自然流路Ⅱ　自然流路Ⅰの上層堆積灰色微砂上面を覆う流水堆積であり、左側肩部を検出したが厚さ0.1m程の粗砂堆積で継続的な流路とは考えられない。流路Ⅰと共に長瀬川の溢流と考えられ、その意味では自然流路と呼ぶにふさわしくないかもしれない。出土遺物はみられないが、層位的には中世末～近世初頭が考えられる。

第3章 第3調査区

調査区の所在は八尾市末広町4丁目と5丁目にまたがっている。佐堂遺跡の従来の調査区分からいうと「佐堂」（その2）の北端に設定されたBトレンチ（STA106+80～90）に南接する位置を占める。調査対象面積は178.5㎡である。

今回の調査区が、先の調査結果によって中世長瀬川の流路にかかることは当初から十分予想されていた。このため調査目的の主眼を、中世長瀬川右岸堤防の築造時期にかんするデータを得ること、古墳時代遺構面あるいは遺物包含層の残存状況を把握すること、さらに、縄文晩期相当層といわれる黒色粘土よりの出土遺物の有無を確認すること、に置いた。

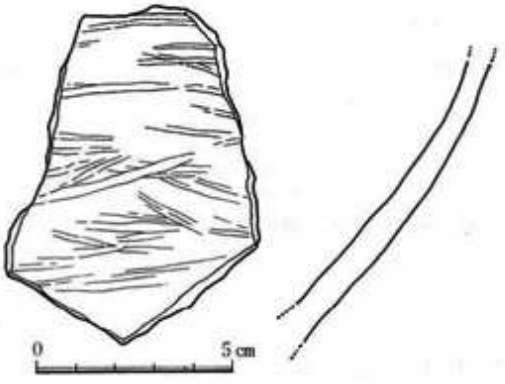
調査方法としては、掘削深度をT.P.2.5m付近に堆積する黒色粘土層までとし、以下は部分的にT.P.1.5mまで掘り下げて堆積層を観察した。なお、現地表面（T.P.8.9m）以下約1mまでの攪乱土、盛土は機械掘削、以下は全て人力掘削にて排土した。

資料の作成は、前回の調査によるBトレンチとの関係を重視する立場から、トレンチの東壁・北壁の土層断面に加え、南北センターラインの断面に対しても図化することとした。特に、後者によって先の調査成果である「右岸堤防断面」（「佐堂」（その2）—Ⅰp.104[注1]）に連続させ、それとの関連を明らかにするよう努めた。中世長瀬川の右岸の平面位置については前回の報告に示されてあるのでここでは割愛する。

調査結果（第54～56図、図版30、31）

古墳時代以前の堆積土とその遺物

T.P.1.4～2.6mで、灰色もしくは緑灰色の粘土が数層、またT.P.1.7m付近では灰色粗砂を挟んで計3枚の黒色粘土層を確認した。土質、色具合とも似ており、それぞれ菱鉄鉱を含んでいる。最上位の第1黒色粘土は後世の流水で中心に近いところはほとんど削り去られている。この黒色粘土は、先の調査のBトレンチの筋掘りで確認されているT.P.2.2～2.4mの「黒粘土」に連続するものだろう。第1黒色粘土を含め以下のどの土層からも遺物は出土しなかった。黒色粘土を覆うのは層厚の異なる4～5層の灰色系統の粘土である。いずれの粘土にも植物遺体が含まれている。これらの粘土を除去する過程で弥生前期の壺形土器の体部片が1点出土している（第54図）。



第54図 第3調査区弥生前期壺形土器片

この粘土層の堆積後、T.P.4.2m～4.3mの古墳時代前期の包含層が形成されるまで、灰色、緑灰色の細砂・微砂の堆積が繰り返される。これらの砂層は比較的粘性の強いものとそうでない

ものからなり、ところによっては互層となる。遺物は全く出土しなかった。

以上の土層は全て水平堆積を示す。そして、この堆積が完了した後に古墳時代前期遺構面が形成される。

古墳時代前期の包含層とその遺物

トレンチ北東隅で、T.P.4.2〜4.3mにかけて検出した。後世の流水に削られて残ったものである。緑黒色の細砂混じりの粘土で炭化物をいくらか含む土層である。先の調査のBトレンチでもこの時期の包含層が検出されているが、それは0.7mもの層厚があった。それに比べると今回検出された包含層は薄い。流水による削平が原因となってプライマリーな層厚は残らなかったのだろう。検出レベル、土質その他の特徴から当然これまで検出されてきた古墳時代前期包含層と連続するものである。なお、包含層除去後の古墳時代前期面で遺構は検出されなかった。

包含層から布留式土器の破片をコンテナ半箱ほど採取した。器形のわかるものでは、甕、小型丸底壺、高坏がある。甕は口縁端部の内面が肥厚して面をなす形態、小型丸底壺は体部外面をヘラケズリするものがみられる。こうした遺物の内容もこれまでの調査結果と変わりない。ただ、今回の出土品の中に東海系の台付甕が含まれている点は注意すべきである。

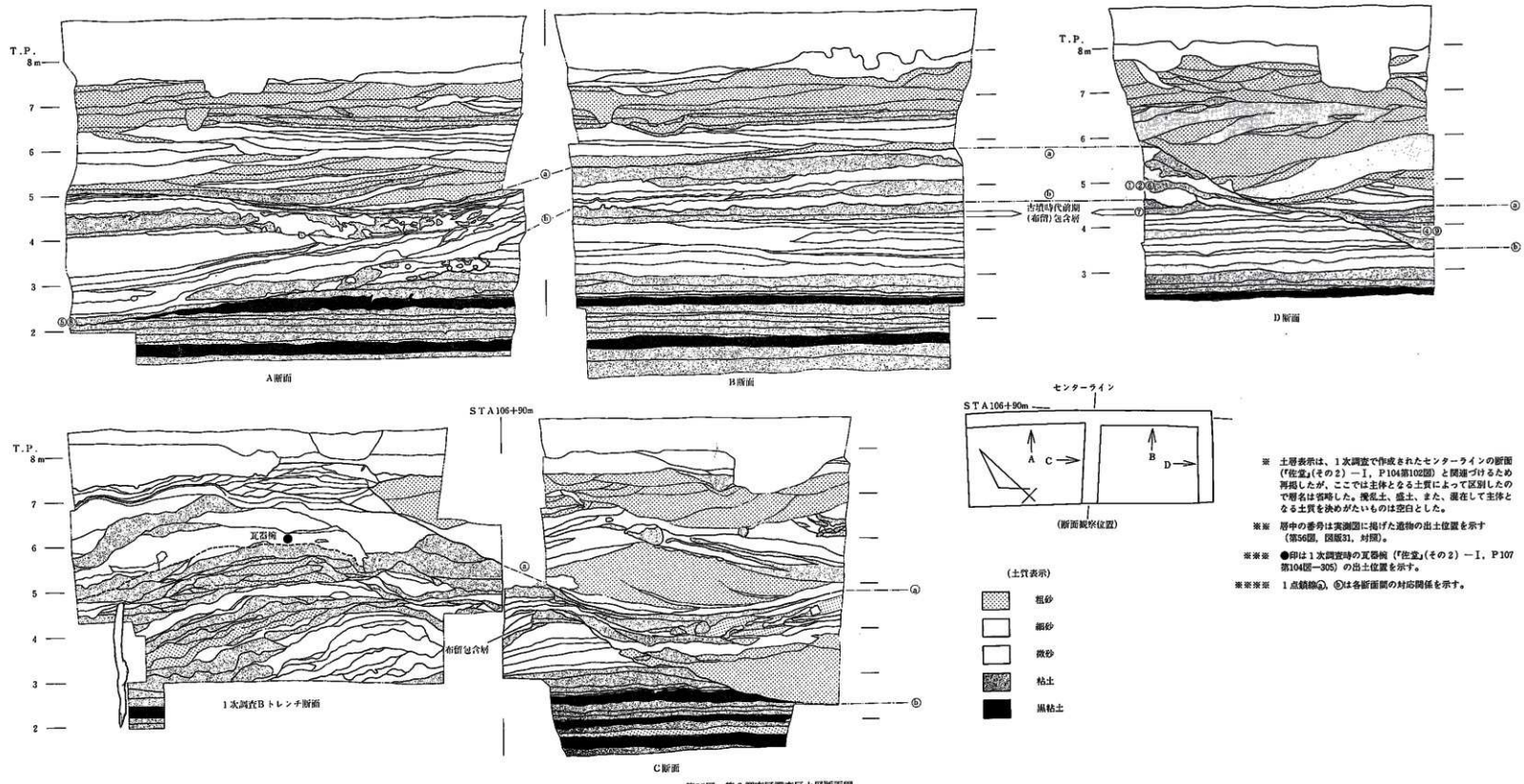
S字状口縁台付甕形土器（7）　口径15.4cm、器高25cm、ゆるやかに張る体部に脚台の付く器形である。外反する口縁部の立ち上がりは屈曲が弱く、稜をなすほどではない。端部は外側にやや肥厚気味である。器壁は5mmと厚手で、接合部では7〜10mmに達する。指オサエ成形による脚台端部は裏側へ折り返している。調整は、体部上半部に左下がり、下半部に右下がりの全体的に粗い櫛目が施されている。櫛目は8条／3cmを単位とするが、上半部では櫛目の幅が3mmと粗い。内面は、体部下半の粘土接合部の厚い器壁を下から上へヘラケズリし、器厚を減じている。頸部下にも横方向のヘラケズリが加えてある。脚台の折り返しはヘラをあてて一巡させ強くナデて仕上げている。口縁部〜体部下半に煤痕が付着している。

大和地方で出土したS字状口縁台付甕の編年を試みた安達・木下論文[注2]を参照すると、本器は口縁部と体部の形態、器面の櫛目の粗化、肩部器面の平行線文の消失などにみられるように、定型化した台付甕の特徴は薄らいで、脚部の折り返し、口縁部の指頭によるわずかな屈曲の創出などにその特徴をとどめるにすぎない。したがって、同論文にいう最古式の須恵器を伴出する可能性があるとされるⅣB類にあたるものだろう。

古墳時代以後の堆積土とその遺物

古墳時代以降は南北方向の自然流路が固定される。本トレンチはほとんどその流路内におさまる。トレンチ内にかかる流水堆積は、T.P.7.5m前後の粗砂上面を検出面とし、河床最下低面はT.P.2.3m前後の第1黒色粘土面にまで達する。この第1黒色粘土もまた流心近くでは洗い去られてしまって、その最下面では実にT.P.1.7mを測る。

この深度5.2〜5.8mに堆積した流土は大づかみにみて次のような過程を経ている。流路の中心部では、粗砂の堆積⟶微砂・細砂・粘土（粘土はブロック状に混入する場合も含めて）の堆積



※ 土層表示は、1次調査で作成されたセンターラインの断面(『佐堂』(その2)—Ⅰ, P104第102図)と関連づけるため再掲したが、ここでは主体となる土質によって区別したので層名は省略した。攪乱土、盛土、また、混在して主体となる土質を決めがたいものは空白とした。

※※ 層中の番号は実測図に掲げた遺物の出土位置を示す(第56図, 図版31, 対照)。

※※※ ●印は1次調査時の瓦器椀(『佐堂』(その2)—Ⅰ, P107第104図—305)の出土位置を示す。

※※※※ 1点鎖線ⓐ, ⓑは各断面間の対応関係を示す。

第55図 第3調査区調査区土層断面図

⟶河床面の形成⟶粗砂の堆積、というサイクルが繰り返される。粗砂堆積後、河床面の形成までは割合緩慢で、時には湿地状を呈したかも知れない。この状態のときに混入する遺物は粗砂の堆積する過程で流れ込んだ遺物に比べて残りがよい。また、こうした堆積層が次の急激な流水に洗われ、ブロック状となって粗砂堆積の中に紛れ込んでゆく場合も、この土塊に含まれる遺物は残りがよかった。

先の調査成果と関連して問題にしなければならないのは、以上のような堆積サイクルのうち、粗砂の堆積の開始と、それが堆積した後の微砂・細砂・粘土の再堆積、そしてそれらの堆積土から採取される遺物の時期である。この点はC断面図を中心に説明する。

最大深度T.P.4.3m付近の河床面（aライン）までは、途中、T.P.5～7mにかけて粘土ブロックを含む微砂・細砂の堆積があるほかは、全て粗砂堆積である。これらの堆砂中より採りあげた遺物には、弥生式土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦等様々である。粗砂を除去した河床面（aライン）を形成する粘土層上面では馬の下顎骨を検出した。同層出土の土器類には黒色土器（内黒）、また14世紀代の土師器皿（いわゆるヘソ皿）が最も時期の下降する例として挙げられる。さらに、その下位の細砂層を除いて露呈する粘土層上面では、D断面図に出土位置を示した土師器高坏、壺、須恵器壺などが北東より流れ込んだ状態で出土した。この土層はbラインの示す河床面に粗砂が堆積し終えた後、その上を覆う微砂・細砂・粘土という一群の緩慢な堆積の1つを構成するものである。したがって、それらの土器類はこの堆積に伴い、同時にこの堆積の時期を指すものでなければならない。土器類には一部時期のさかのぼるものもみられるが、最も新しいものでも8世紀前葉を下らない。つまり、aラインを境として、それ以下に中世遺物は全く含まないといえるのである。

各断面図に示したa、bの各ラインと、先の調査のBトレンチ断面との連続性についてみると、aラインはBトレンチの断面図にもラインを拾うことが可能である。それは土質による区分や、河岸より流れ込む斜めの堆積方向に加えて、13世紀初頭の瓦器椀の出土層を含む、一連の微砂層上面のライン（T.P.6.7m前後）によって示されてよいだろう。しかし、bラインを連続させるのは難しい。それは、STA106+90ラインに打設した鋼矢板位置付近でbライン以下の細砂層が北に向って低く落ち込んでゆくこと、さらに、その細砂層が流水による自然堆積を示し、別の流水堆積が北側（Bトレンチ内）に存在する可能性があること、に理由がある。いずれにせよ、bラインによって示される河床面が流路であった時期は少なくとも8世紀前葉を下らない。それと、「最下層の堤の基礎杭の放射性炭素による年代測定ではA.D.600±10の数値が得られている[注3]」という前回のBトレンチの調査結果とは、13世紀初頭以前の、古代の流路が存在した事実を導いてくれる。

築堤の検証は、今回のトレンチ位置では無理だった。予想していた境の坑がかからなかったことが残念である。しかし、前回の図面（「佐堂（その2）—Ⅰ P105第102図）を照合しながら、その南側坑列の位置、つまりSTA106+90ライン付近の断面観察（C断面図）を行った結果、

上記したように一連の細砂層の堆積は、各層にラミナーが走り、細かい植物遺体がそのラミナーに平行して線状を呈する個所もみられ、一般的な自然堆積と変わりなかった。

以上の流水堆積層のうち、特に古代の流水にかかわるa～bライン間で出土した遺物の主要なものを図示し説明する（第56図）。

土師器小型高坏（1～3）　1、2は坏部径9.5～10cm、器高7cm。脚部は絞り、裾部は低く外へ広げる。裾部端は内側に角張るか、2ではむしろ指のつまみの加減でそのまま尖がり気味に終わっている。坏部内外面と脚部はナデているが、手捏ねによる指頭圧痕は顕著に残っている。脚部内面には絞り目がはっきり残る。1では裾部内面に布目の圧痕がある。赤褐色でやや軟質である。灰色微砂質粘土出土。3は坏部径14.2cm。坏部は浅く、ゆるやかに外反する口縁部は端部を丸く内側に巻き込む感じである。この坏部に、絞った脚柱部が付く。坏部は内外面をヨコナデし、内面は放射状暗文が丁寧に施される。外面にはヘラミガキがなく、ナデているだけである。脚部は手捏ねによるもので、縦方向にナデて仕上げるが、指頭圧痕は明瞭である。オリーブ黒色粘土出土。

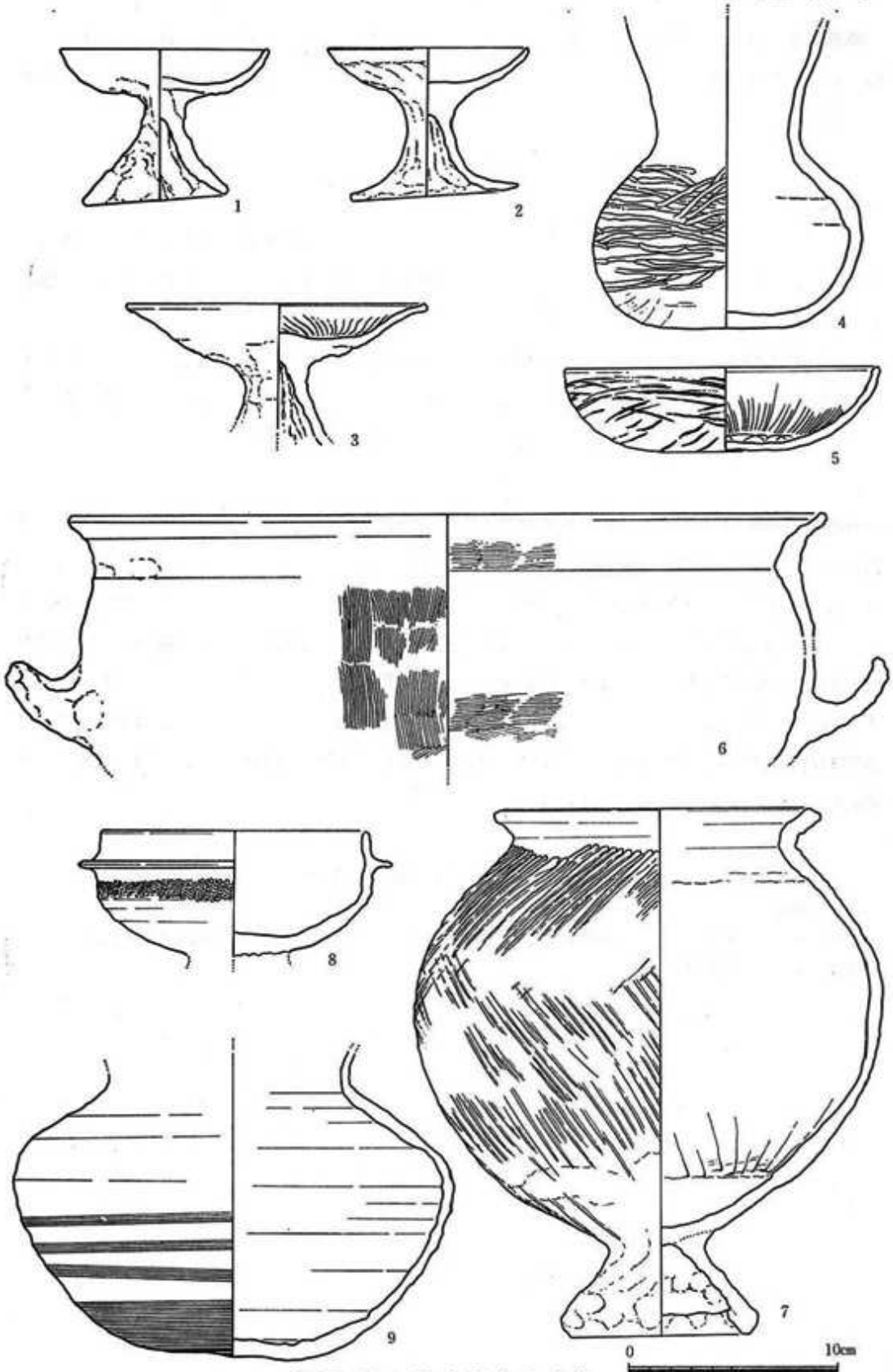
これらの高坏は、3の高坏がいわゆる面取り高坏の初期のものの坏部に形態や調整が似るところから7世紀末～8世紀前葉とみられる。1、2についても同じような時期であろう。

土師器壺（4）　口縁端部は欠失するが、器高15cm程度の直口壺である。底部は平坦で安定感がある。体部は丸みがあり、これにやや外反気味の口縁部が付く。器壁は全体的に厚い。体部下半から底部全面にかけて規則的にヘラケズリしたあと、体部上半にやや粗いヘラミガキを施す。ヘラミガキは全体を4区に分けて施している。口縁部内外面はヨコナデ調整だけである。黄灰色粘土出土。時期は7世紀前葉。

土師器坏（5）　径15cm、器高4cmの椀形である。まるく、外反しつつ立ちあがる口縁部をもち、端部は内側に面をなす。調整は、内面ヨコナデ、体部から底面にかけて外面を粗いヘラミガキし、成形時の指オサエによる凹凸を整えている。内面中央に連弧状暗文、その外側に放射状暗文を施すが、口縁端部まで及んでいない。淡灰褐色で、雲母、白色微砂を含み、堅緻である。暗緑灰色粘土、すなわち、流水堆積の最下底面で出土した。7世紀中葉～後葉。

土師器把手付鍋（6）　あまり張りが目立たない体部に、「く」の字形に折れる口縁部をもつ。端部はやや内傾して丸く終える。口径は36cmと大きい。調整は、体部外面が縦方向にハケメ、口縁部外面がヨコナデ、口縁部内面と体部内面下半に横方向のハケメを施す。把手は指オサエのままである。橙色で、胎土は白色、赤褐色の微砂粒を含み緻密である。灰色微砂質粘土出土。7世紀後葉～8世紀前葉。

須恵器高坏坏部（8）　低脚の付く有蓋高坏の坏部である。立ちあがりは短く、端部はやや内傾して丸く終わる。受け部は外へ水平にのび、端部は丸く仕上げる。受け部には波状の装飾帯がめぐる。内底面は不整方向にナデ、外底面も強く不整方向にナデる。器表面は暗青灰色を帯び、断面はにぶい赤褐色で、胎土は緻密で硬質である。陶邑最古型式に相当する。5世紀代。



第56図 第3調査区出土遺物

須恵器壺（9）　肩の張った体部に、短くゆるやかに外反する広口の頸部が付く。最大径は肩部にあり、20.8cmを測る。体部上半に3条、下半から底部にかけては全面に回転カキメ調整を施す。7世紀前半。

まとめ

黒色粘土がいわゆる「黒バンド」として縄文晩期に相当するか否か、これを証明する直接の証拠は見い出されなかった。しかし、この層を覆う粘土からは微量ながら弥生前期の土器片を検出した。

古墳時代の包含層については、その主体となる布留式土器に須恵器が伴出しないこと、これまでの調査で出土していない東海系台付甕が出土したことが指摘される。前者の事実は既に明らかにされている佐堂遺跡古墳時代前期の特徴であり、後者はそれを実証する新しい出土資料である。

古墳時代以降は、少なくとも7世紀中葉～8世紀前葉には流水があり、以後流路が固定し、古代、中世にわたって堆砂が繰り返されてゆく。こうした流路に伴って右岸の築堤が行われたことは既に先の調査により指摘された。この点については、今回の調査区がほとんど流路内にあたっていたので確証を得ることはできなかった。既述したように、前回の調査区に隣接する部分の断面観察では築堤工事を証明するような積極的な証拠は得られなかったといえる。ただし、それが人為的に築かれた堤防であるか、ほとんど自然堤防の域を出ないものであったかは別としても、前回の調査で検出された杭は、その放射性炭素による測定年代も考慮すると、今回の古代の流路の河岸に対して打設されたことは間違いない。

注1　阪田育功・森屋直樹編　『佐堂』（その2）－Ⅰ　大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター　1984年
注2　安達厚三・木下正史　「飛鳥地域出土の古式土師器」　『考古学雑誌』　第60巻2号　1974年
注3　注1　文献参照

Ⅳ 美　　園（その4）

2G—2トレンチ

行った調査は、佐堂遺跡（その3）の調査と同様に、美園遺跡（その4）—2Gトレンチの調査時に信号ケーブル等が埋設されており、その撤去にともなう掘り残し部分の調査である。

トレンチは、近鉄大阪線久宝寺口駅の北北東約250mの大阪府道中央環状線佐堂交差点北側のグリーンベルト部にあり、地番は八尾市美園町1丁目である。

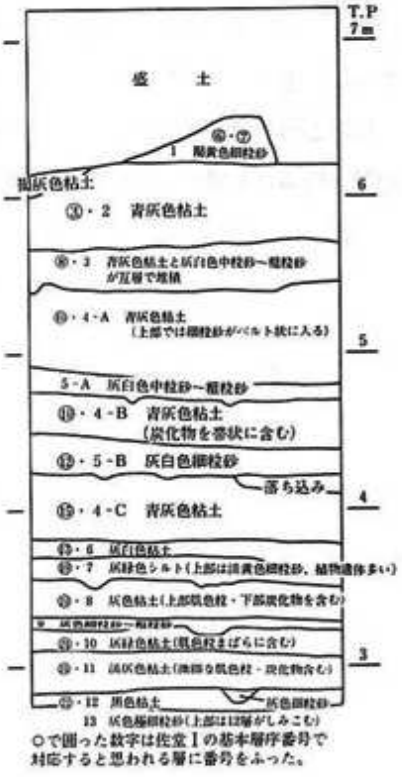
橋脚位置部に設けられたトレンチは、美園遺跡南端の2Gトレンチ調査時にほとんどを調査しており、残存部分は底辺6.1m、高さ3.1mの二等辺三角形で、面積は約9.5㎡と極めて狭い。

調査は機械掘削で盛土層を除去後、各々の層を人力掘削によって順に掘り下げ、遺構面の確認を行った。また断面は南西壁の実測を行い、最終掘削面は前回の調査で縄文式土器の出土をみている黒色粘土層迄の調査を行った。

基本層序（第57図）

地表面はT.P.7.2mで地表から約70～100cmは攪乱及び盛土を受けており、その下には1層の褐黄色細粒砂層が30cm余り堆積する。2層—青灰色粘土層以下、4C層—青灰色粘土層迄の約2.4mは青灰色粘土層と灰白色系の中粒砂～細粒砂層が互層で堆積しており、滞水期と流水期が交互にくり返されていたことがうかがわれる。また層厚は粘土が20～60cmと厚く堆積しているのに対し、砂は10～30cmと薄い。遺物は1・2層から瓦器など中世の遺物が少し出土している。

6層の灰白色粘土層以下、縄文時代遺物包含層の12層—黒色粘土層迄の間には、7層—灰緑色シルト層、9層—灰色細粒砂～粗粒砂層を除いて、灰色系の粘土が数層にわたって堆積した。遺物は5A層の灰白色中粒砂～粗粒砂層から桃核、8層の灰色粘土から胡桃核の自然遺物が少量出土した。



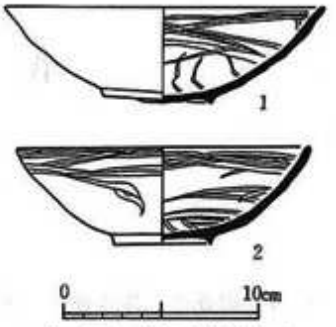
○で囲った数字は佐堂Ⅰの基本層序番号で対応すると思われる層に番号をふった。

第57図　断面模式図

遺構・出土遺物（第58図）

2層から瓦器椀が2個体まとまって出土したが、出土地点が矢板際の断面取りはずし中に出土したため、遺構に伴ったものかはわからない。1はやや外

斜ぎみの口縁を持ち、高台の断面は三角形であるが高台の位置が椀底部よりも上につく。口径16.4cm、高さ5cmで、見込みには平行線状の暗文を荒くつけ、その上半にも太目の暗文が荒くめぐる。2は口縁が内彎気味につくられており、高台の断面は三角形である。口径15.1cm、高さ5cmで、内面は刷毛状のもので調整後見込みに平行線状の暗文をつけ、その上半に太目の暗文がめぐる。また口縁の外面にも荒い暗文をつけており、全体に1よりていねいなつくりとなっている。なお、外面の底部周辺にはイネ科植物の穂(種子)と葉の痕跡が高台貼付前に付着しており、他に叡痕も認められた。



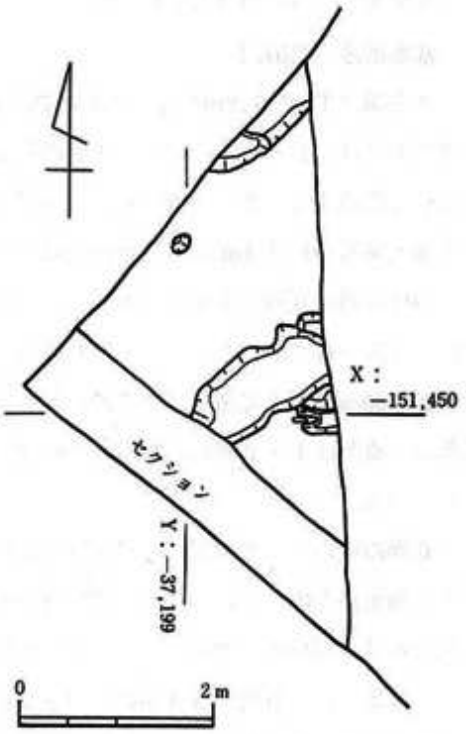
第58図　出土遺物実測図

2層上面　褐色系粘土を埋土とする溝が南北方向に伸びるが、東肩部は美園一2G内になる。溝は幅50cm以上、深さ20cm余りで、瓦器などの遺物が少量出土している。

4B層上面　青灰色粘土層上面では足跡状の窪みが認められ、灰白色細粒砂が堆積した。また、4C層一青灰色粘土層上面ではトレンチ北城が5～10cm溝状に落ちており、肩部の方向は北西～南東方向を示した。

10層上面（第59図・図版32）　灰緑色粘土層上面では東西方向に伸びる上場幅30cm、下場幅約10cm、深さ5cm余りの小溝と足跡状の窪みを検出したが、遺物の出土はなかった。

12層上面　黒色粘土層上面では断面中に灰色細粒砂埋土の溝状遺構がみられたが、平面は湧水のために調査できなかった。



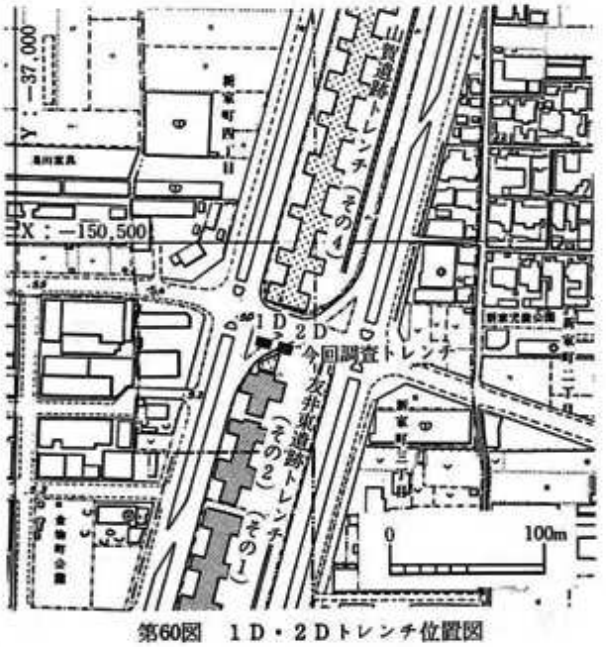
第59図　10層上面遺構実測図

Ⅴ 山　　賀（その4）

1D・2Dトレンチ

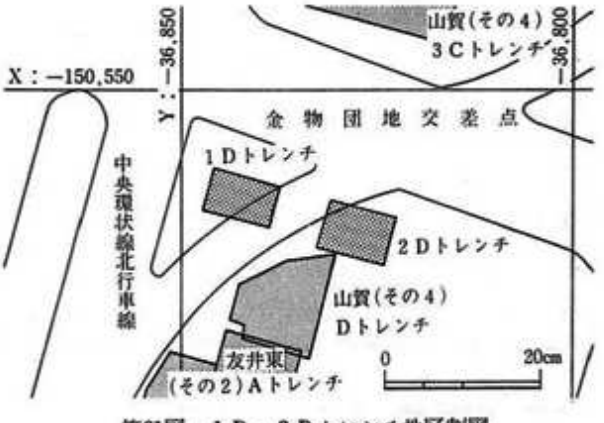
今回の調査は、山賀遺跡南端の調査区である山賀（その4）—Dトレンチの追加調査として行ったもので、南側の隣接地は友井東遺跡（その2）の調査区となる（第60図）。

調査地は、八尾市新家町4丁目の大阪府道中央環状線—金物団地交差点南側のグリーンベルト部に位置する。山賀（その4）の調査時には、北行車線の右折レーンが存在したために調査ができなかったが、今回右折レーンを廃止し、橋脚をたてるために2個のトレンチ調査を行った。



第60図　1D・2Dトレンチ位置図

トレンチは約6.6mの間をおいて西・東に存在するが、西側を1Dトレンチ、東側を2Dトレンチ（以下、1D・2D）とよぶ。規模は、1Dが東西8.7m、南北5.7mの長方形で面積は50.2㎡を測る。また2Dは東西8.7m、6.4mの長方形で面積は55.7㎡を測る（第61図）。



第61図　1D・2Dトレンチ地区割図

調査は機械掘削によって盛土層を除去後、個々の層を人力掘削によって順に掘り下げ、遺構面の確認を行った。断面は1Dでは北壁、2Dでは北・東壁を残して実測を行い、最終掘削面は両トレンチとも縄文時代晩期の堆積と考えられている第3黒色粘土層迄の掘削を行った。

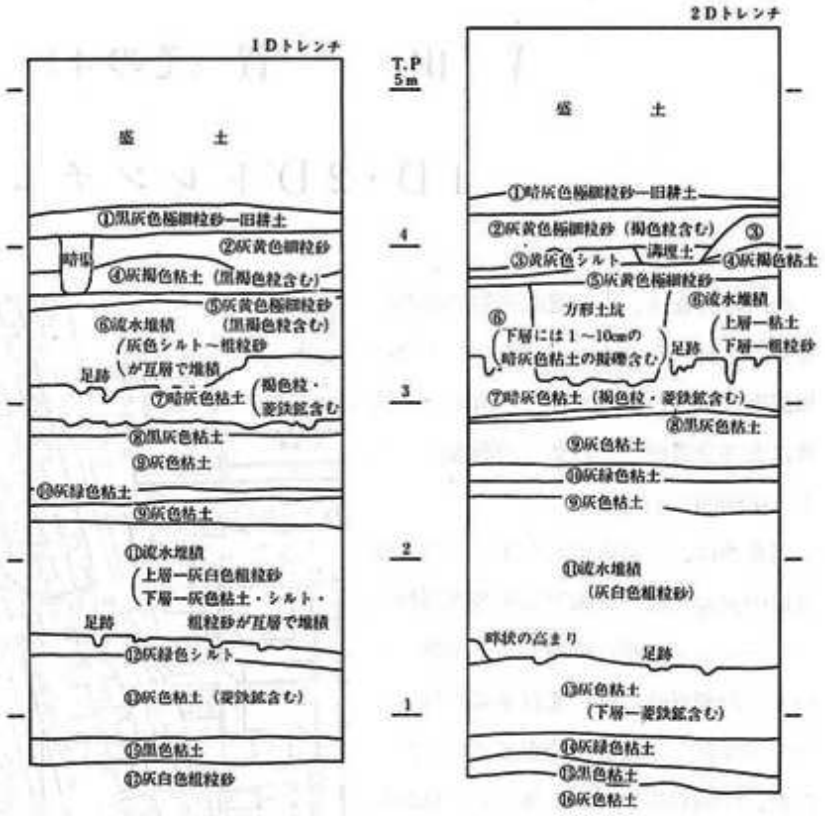
両トレンチの基本層序は基本的に大きな違いがみられないことから、まとめて述べることとする。

基本層序（第62図）

盛土　1D・2Dとも盛土が約1m施されており、1D東城の盛土下には下水道管埋設による攪乱が認められた。

1層　旧耕土になると考えられる黒灰色極細粒砂層が、10～20cm堆積した。

2層　染付などの近世遺物を少量含む灰黄色細粒砂層が20～30cm堆積しており1Dでは暗渠、2Dでは井戸が上面より切り込む。



第62図　1D・2Dトレンチ断面模式図

3層　黄灰色シルト層が2Dに堆積しており、厚さは5～20cmを測る。上面には溝が存在した。

4層　灰褐色粘土層が1Dでは10～20cmの厚さで全面に堆積するが、2Dでは南東隅の一部にのみ、10cm余り堆積した。遺物は極く少量の土師器、須恵器が出土している。

5層　灰黄色極細粒砂層が、10cm余り均一に堆積する。遺物は土師器、須恵器などが少し出土している。

6層　流水堆積層が、40～50cmと厚く堆積する。1Dでは灰色シルト～粗粒砂層が互層で数層にわたり堆積するが、2Dでは上層部が粘土層で下部になるほど粒子が荒くなり最下層は粗粒砂層となる。遺物は土師器が出土しているが、摩滅が激しい。また、2Dでは上面より切り込む方形の土坑を検出している。友井東遺跡（その2）の7層―黄色砂層と同一層と考えられる。

7層　暗灰色粘土層が30～40cm堆積しており、上面には多数の足跡が認められた。この層から下では、遺物の出土は皆無となる。

8層　黒灰色粘土層が5cm余り堆積した。

9・10層　9層の灰色粘土層が50～60cmと厚く堆積しており、その間に灰緑色粘土層が5～10cm堆積した。灰色粘土層の下層部には炭化物を多く含む。

11層　厚さ80～100cmの厚い流水堆積。1Dの上層部と2Dの全域には灰白色粗粒砂層が堆積

するが、１Ｄの下層部では灰色粘土、シルト、粗粒砂層が互層で堆積する。友井東遺跡(その２)の12層―灰青色微砂層と同一層と考えられる。

12層　１Ｄに灰緑色シルト層が約10cm堆積しており、上面には足跡が認められた。

13層　菱鉄鉱を含む灰色粘土が50cm余り堆積しており、２Ｄの上面では足跡と畔状の高まりを検出している。

14層　２Ｄに灰緑色粘土層が10～20cm堆積した。

15層　約10～15cm の厚みをもつ黒色粘土層で、山賀遺跡（その４）・友井東遺跡（その２）で述べられている第３黒色粘土層と同一層と考えられる。

16・17層　15層除去面の層で、２Ｄでは16層―灰色粘土層、１Ｄでは17層―灰白色粗粒砂層となる。

遺　構

２層上面（図版33）　１Ｄの北域でほぼ東西方向に伸びる暗渠を検出した。上場幅約50～60cm下場幅約20cm、深さ40～50cmで断面はＵ字形に掘られている。底部には孟宗竹が断ち割った状態で敷かれており、その上には桜の小枝などがのせられていた。埋土は肩部に堆積する２層に極めて類似する層で、通水していた可能性は少ない。遺物は染付等が少し出土している。また、２Ｄでは直径110cm、深さ90cm余りの素掘り井戸を１つ検出している。

３層上面　２Ｄトレンチでは東西方向の溝を２条検出した。幅10～20cmのものと、幅90cm余りのもので、深さは10cm以下と浅い。遺物は、瓦器、土師器、陶磁器などが少し出土している。

６層上面（図版34）　２Ｄの中央北域では、方形の土坑を検出した°幅約300cm、奥行き160cm以上で北側はトレンチの外へ広がる。深さは約60cm余りで、埋土は灰黄色細粒砂層であるが、下層部には暗灰色粘土層の擬礫を含むことから、人為的な遺構と考えられる。遺物の出土はない。

７層上面（図版33・34）　両トレンチで多数の足跡を検出した。足跡は人間のものが多いが、獣の足跡とみられるものも存在した。この遺構面は、友井東遺跡（その２）で足跡が検出されている古墳時代後期遺構面と同一であると考えられる。

12・13層上面　７層上面同様、両トレンチで人間・獣の足跡を検出したが、その数は７層上面よりかなり少ない。また２Ｄ西端付近では、下場幅100cm、上場幅 40cm、高さ 10cm余りの畔状の高まりも検出している。なお、足跡は１Ｄでは12層上面、２Ｄでは13層上面で検出しているが、２Ｄでは13層上面に堆積する流水堆積層の削平作用によって１Ｄでみられた12層の灰緑色シルト層が消滅し、足跡の底が残存したものと思われる。

図　　版

図版一　縄文時代晩期遺構面（D1トレンチ）

SD9001、9002（北から）

同　上（東から）

図版四　弥生時代中期遺構面（Eトレンチ）

E1トレンチSD8002(東から)

E2トレンチ　SD8002(北から)

図版五　弥生時代中期遺構面（Fトレンチ）

F２トレンチＳＤ8004(東から)

F３トレンチ　ＳＤ8007、ＳＤ8008、ＳＤ8009(北から)

図版六　弥生時代中期遺構面（F4トレンチ）

ＳＤ8007・ＳＤ8008(北から)

左上　ＳＤ8008、ＳＤ8009　断面
左下　ＳＤ8007、ＳＤ8008　断面
右上　ＳＤ8007　断面
右下　ＳＤ8007　断面

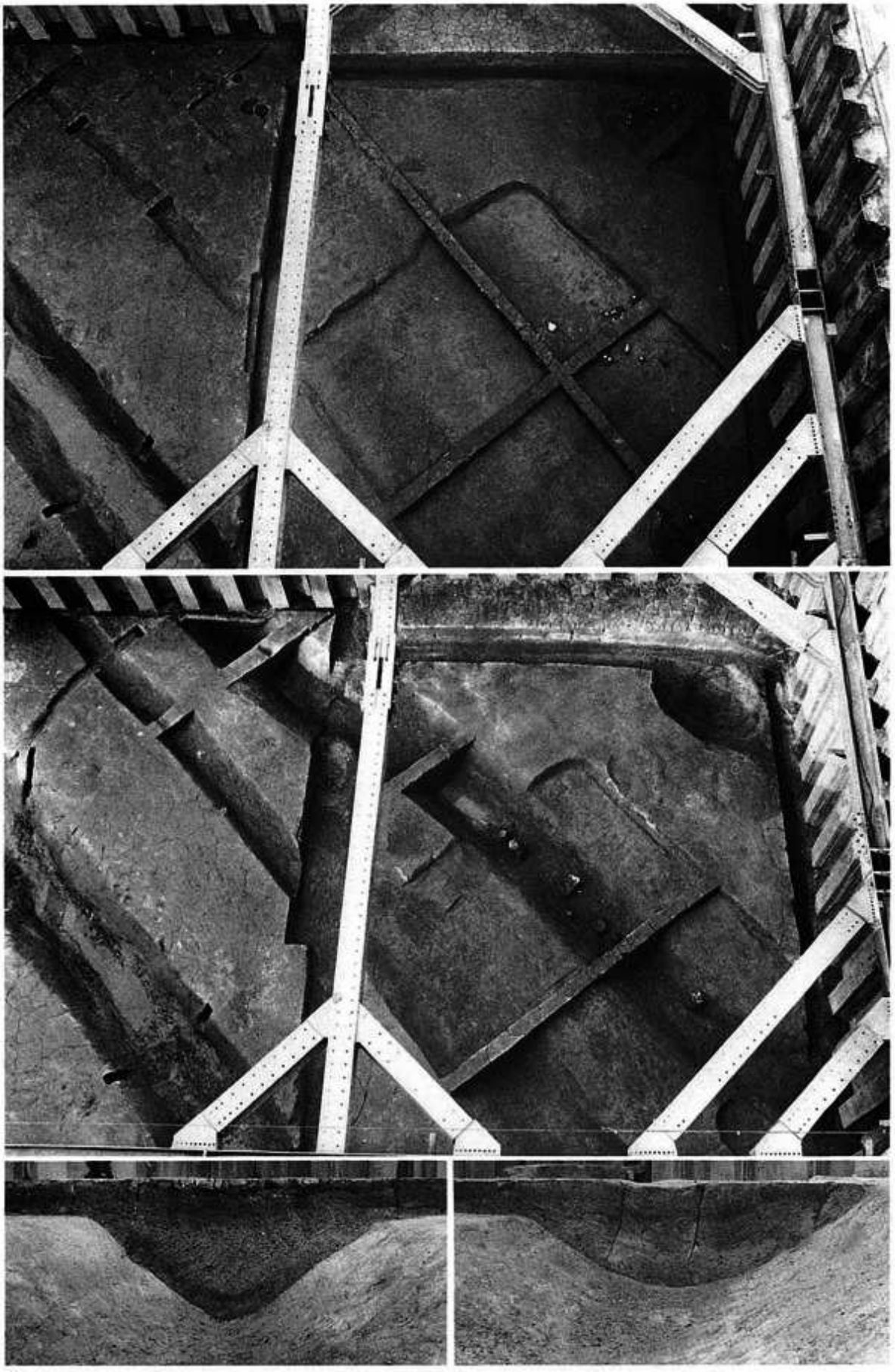
図版七　弥生時代後期遺構面（D1トレンチ）

遺構検出状況（北から）

上段　ＳＫ8004（東から）
下段　ＳＤ8010（東から）

ＳＫ8004出土土器

図版八　古墳時代前期遺構面（C1トレンチ）



上　SB6006　中　SD6021　下　SB6006、SD6021、6022　東西断面

図版九　古墳時代前期遺構面（C1トレンチ）

ＳＤ6021
遺物出土状況

ＳＫ6028
遺物出土状況（西から）

ＳＫ6029
遺物出土状況（西から）

図版一〇　古墳時代前期遺構面（C2トレンチ）

東半部遺構群（北東から）

ＳＤ6009遺物出土状況（北から）

図版一一　古墳時代前期遺構面（C2トレンチ）

ＳＢ6007　検出状況（西から）

同掘りあがり（西から）

図版一二　古墳時代前期遺構面（C2トレンチ）

ＳＢ6007ピット内礎板出土状況　ＳＰ6125

左上　ＳＰ6119　右上　ＳＰ6124　　左下　ＳＰ6123　右下ＳＰ6122

図版一三　古墳時代前期遺構面（C2トレンチ）

ＳＫ6030遺物出土状況（上面・下面）

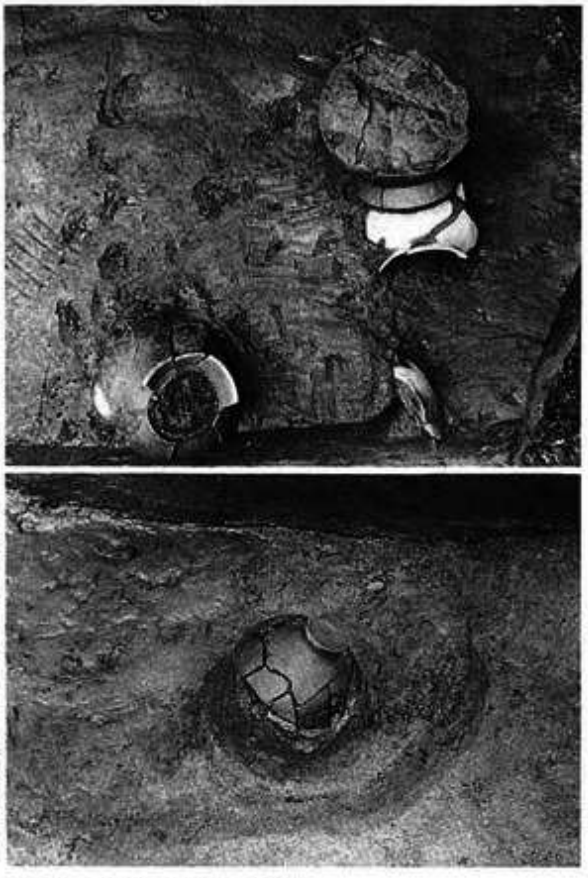
ＳＰ6134遺物出土状況

ＳＰ6135遺物出土状況

図版一四　古墳時代前期遺構面(D・Eトレンチ)

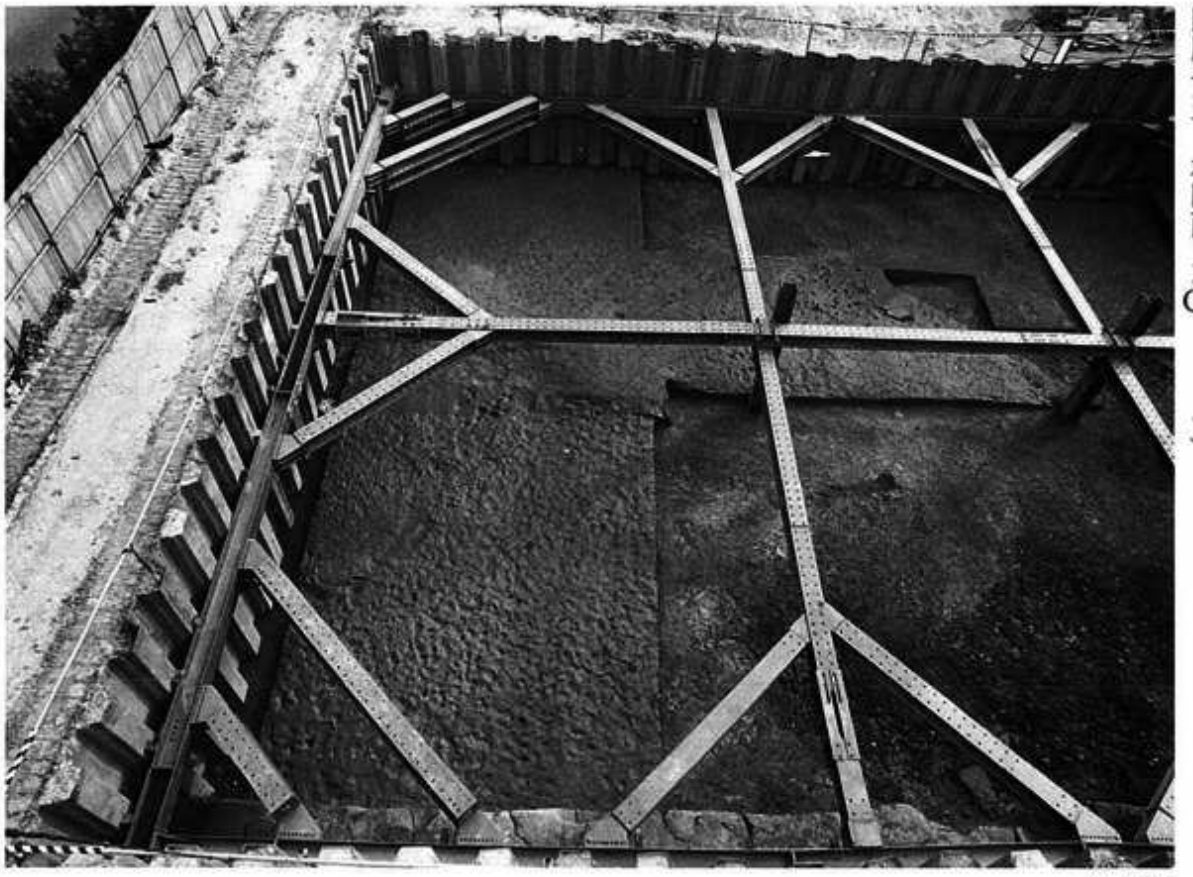
D1トレンチ　SK6031遺物出土状況

E1トレンチ包含層(左、右上)遺物出土状況



SP51（右下）遺物出土状況

図版一五　水田面Ⅲ（C2トレンチ）



水田面Ⅲ

同上

図版一六　中世長瀬川床面（E・Fトレンチ）

E 2トレンチ　中世長瀬川河床面

E 1トレンチ　中世長瀬川河床面

F 1トレンチ　中世長瀬川河床面

図版一七　中世長瀬川河床面（Fトレンチ）

F２トレンチ中世長瀬川河床面

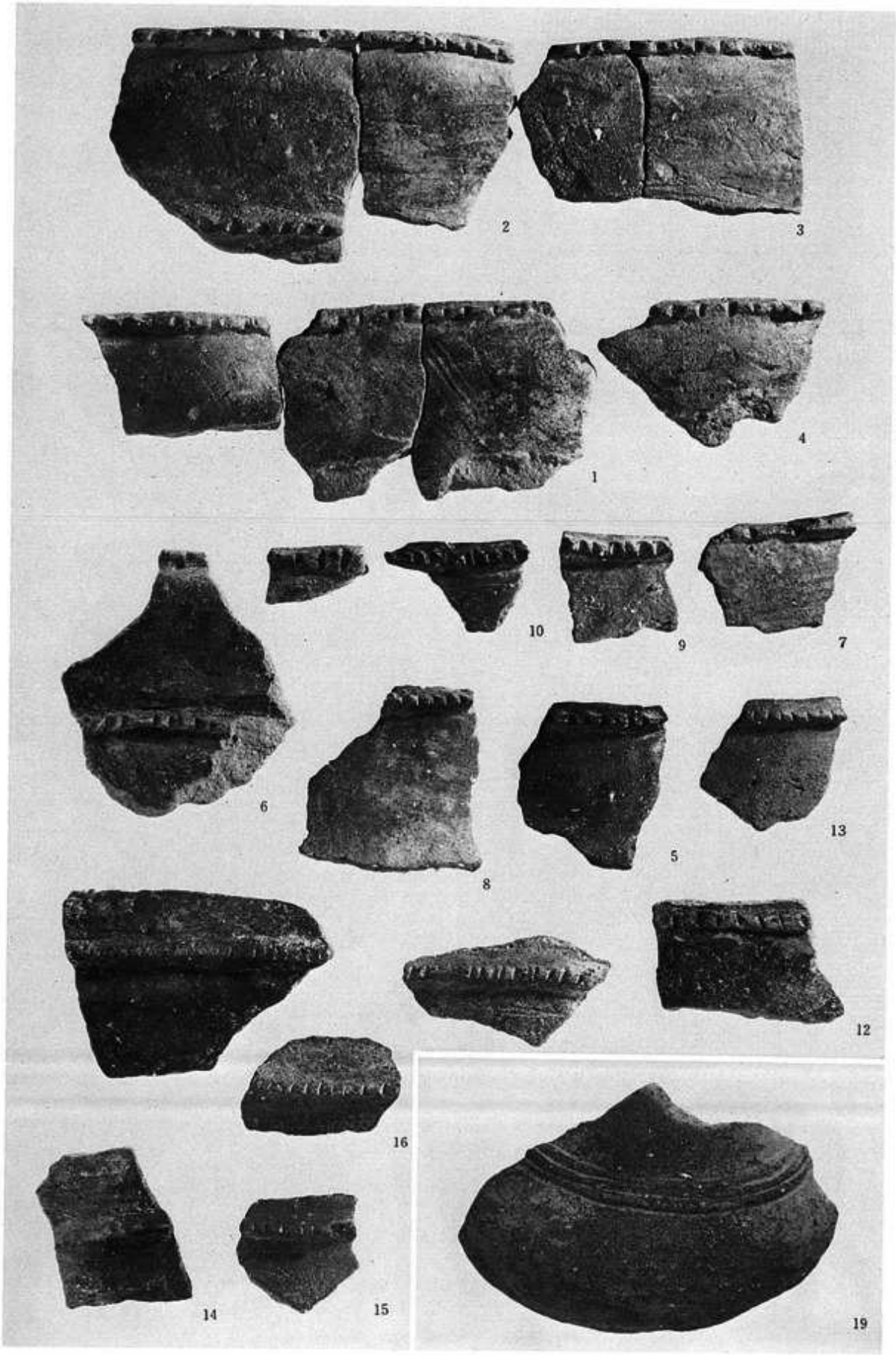
F３トレンチ　中世長瀬川河床面及び水田面Ⅳ

図版一八　中世長瀬川河床面（F3トレンチ）

中世長瀬川河床面

同　上

図版一九　縄文時代晩期～弥生時代前期出土土器



D１トレンチ黒色微砂質粘土包含層出土土器

図版二三　古墳時代前期遺物(2)

C２トレンチＳＤ6009(上層33、下層44―40)

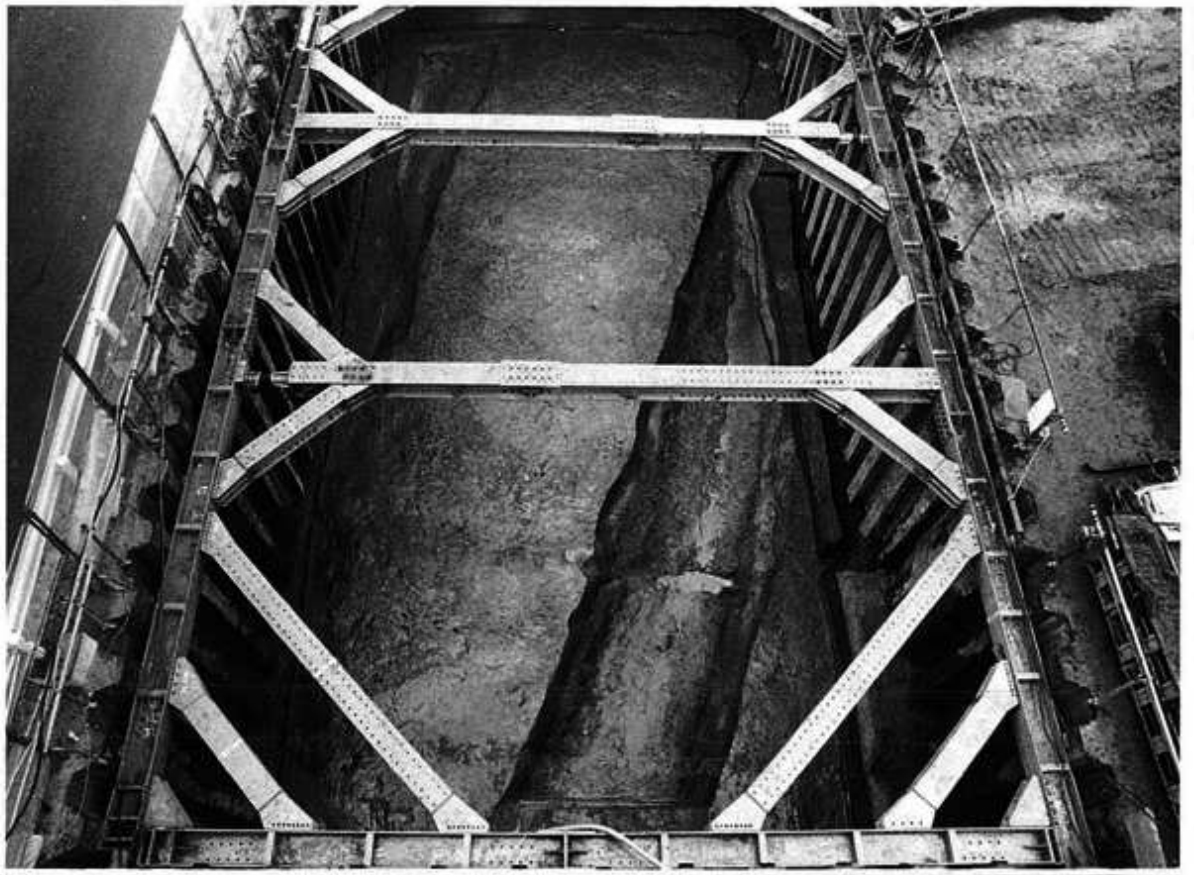
図版二三　古墳時代前期遺物（3）

C２トレンチ　ＳＫ6030（43—46）ＳＰ6134（49）ＳＰ6135（50）

上・3層上面遺構(東から西)、下・11層上面遺構－ＳＡ101(南西から北東)

出土遺物　瓦器－皿1、土師器－甕3、土釜4

図版二七　佐堂（その3）第2調査区遺構



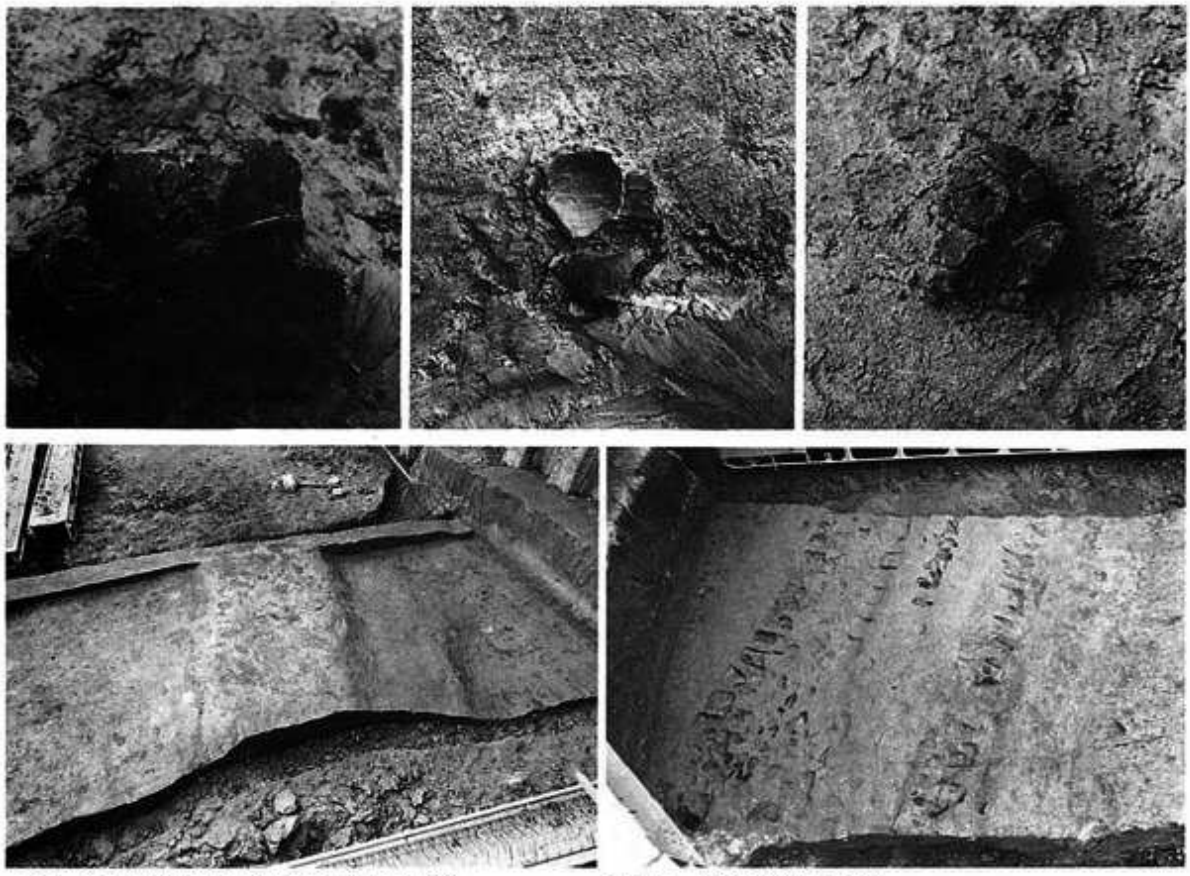
上段　弥生時代前期自然流路

中段　同上断面

下段左　弥生時代中期面

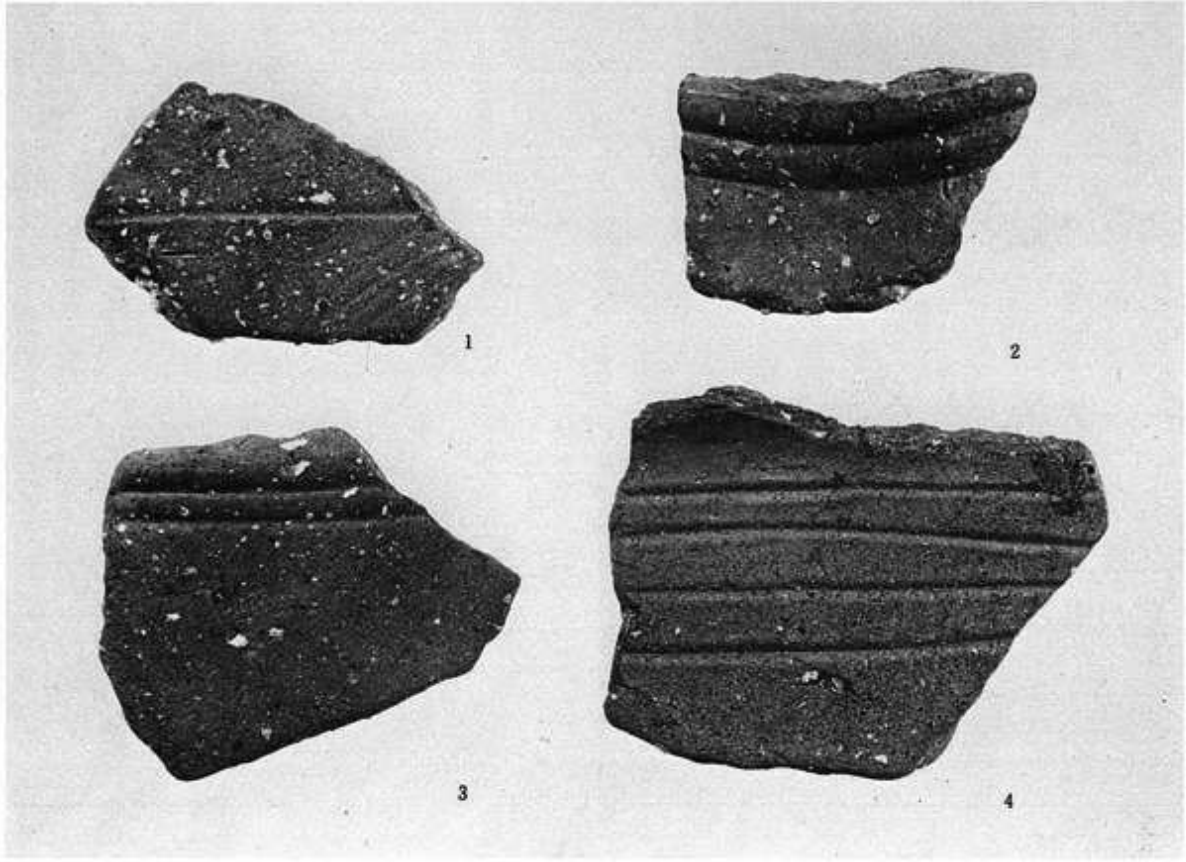
〃　右　弥生時代中期末～後期面

図版二八　佐堂（その3）第二調査区遺構



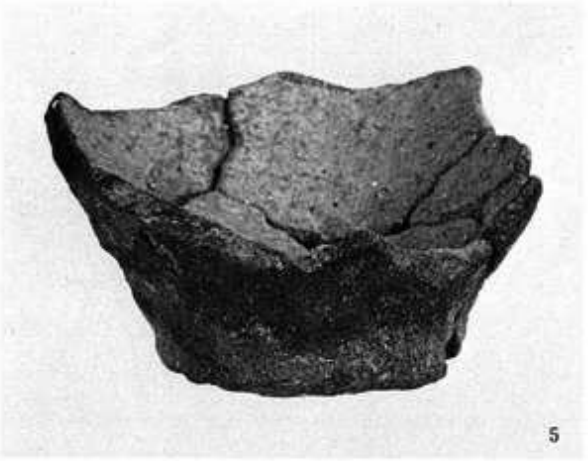
上段　弥生時代中期包含層中土器出土状態

下段左　古墳時代後期畦畔
下段右　中世遺構面



第11層出土弥生土器

図版二九　佐堂（その3）第2調査区出土弥生土器


5

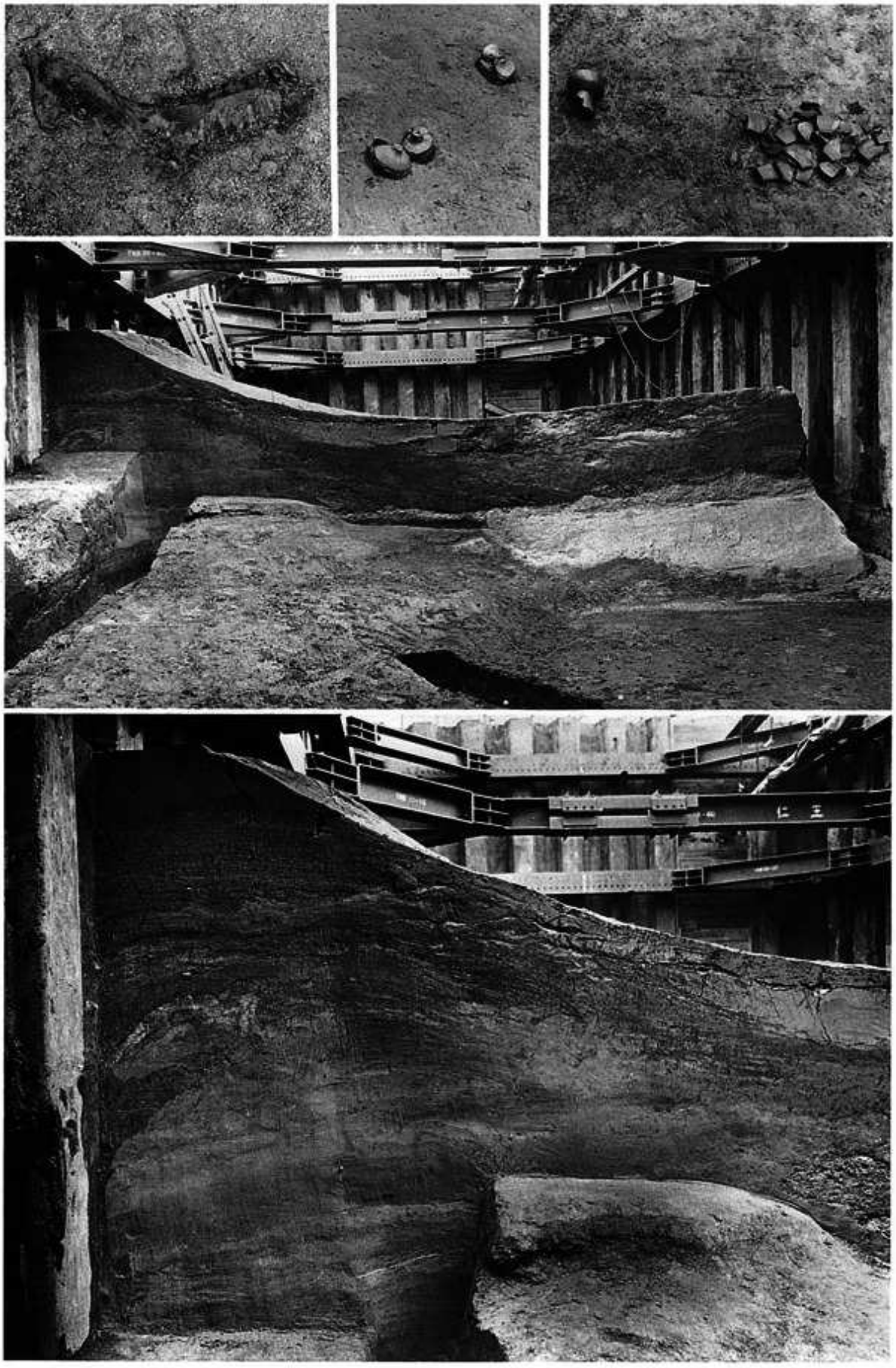

6


5


7


8

図版三〇　佐堂（その3）第三調査区遺物出土状況・河川断面



上一（河川推積土層遺物出土状況）　中一（河川断面）　下一（同拡大）

図版三一　佐堂（その3）第三調査区出土遺物

1～6、8．河川内堆積土層、7．布留包含層

上・10層上面遺構―溝（東から西）、下・５Ｂ層～地山面（南西壁）

出土遺物　瓦器―椀１・２

1Dトレンチ2層上面遺構ー暗渠

1Dトレンチ2層上面遺構ー暗渠

1Dトレンチ7層上面遺構ー足跡

図版三四　山賀（その4）遺構

2Dトレンチ　6層上面遺構―方形土坑

2Dトレンチ　7層上面遺構―足跡

佐堂(その2)ーⅡ他
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1985年12月10日発行
大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生2丁目10番28号
印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号